



# 第55回特攻平和観音年次法要

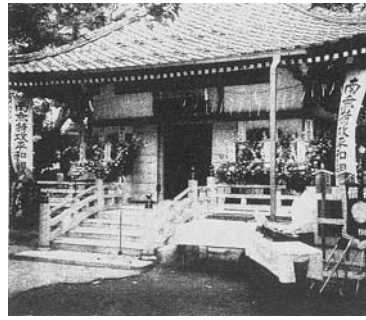
報 特 攻

平成18年11月

第69号

〒105-0001 東京都港区  
虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会  
電話 03(3432)1090  
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一  
発行人 栗原宏



参列者 御遺族 47名  
御来賓・会員等 204名

式次 第(開始14時)

梵鐘点打

大衆着座

式衆入道

国歌斉唱

山主願文

世田谷山観音寺住職

大田 賢照

三回

野口 清三

金龍山浅草寺一山大導師

観智院法田光順大僧正猊下

トランペット 田橋 雅之

特攻平和観音経

大田 賢照

司会 乗兼 英史

野口 清三

金龍山浅草寺一山大導師

観智院法田光順大僧正猊下

トランペット 田橋 雅之

特攻平和観音経

大田 賢照

野口 清三

野口 清三

金龍山浅草寺一山大導師

観智院法田光順大僧正猊下

トランペット 田橋 雅之

特攻平和観音経

大田 賢照

献歌

世田谷コールエーデ合唱団

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

献歌

世田谷コールエーデ合唱団

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

笛 逢坂 竜信

指揮 本間 充

（埴生の宿、千の風、ふるさと）

奉納献奏 トランペット（海ゆかば）

世田谷区民吹奏楽団

田橋 雅之

大田 賢照

ラッパ献奏 海軍軍装会ラッパ隊

陸軍軍装会

焼香 特攻平和観音奉賛会

会長 山本 卓眞

御遺族各位

来賓各位

会員・一般各位

式衆退堂 池前にて読経後式衆退場

直会 15時～16時30分

献 吟 石橋 一歌

笛 逢坂 竜信

皇魂隊 入江千之助

昭和二十年一月十日 リンゲン湾上空にて戦死

血にそみし操縦桿を握りしめ

男命の生き甲斐ぞしる

敷島隊 永峯 肇

昭和十九年十月二十五日 ルンゴン島東方洋上にて戦死

南海にたとへこの身果つるとも

幾年後の春を想へば

目次

特攻観音年次法要……………1

八月十五日の靖國神社……………4

八月十五日御奉仕を決議して……………5

第20回戦没者追悼国民集会……………6

人間魚雷回天と黒木・仁科少佐①……………8

特攻隊員・細井巖少尉の足跡……………20

上州の快男子小川清大尉……………25

万葉の防人の歌と特攻隊員の遺詠……………29

黒沢丈夫氏と比島での特攻攻撃……………30

小灘利春氏追悼……………31

陸海軍空挺指揮官報復裁判で刑死……………32

パレンバン空挺作戦一幕僚の回想……………34

正気の歌……………40

禅語と一脈通ずる特攻隊員の遺詠……………40

今期の戦史⑦ ガ島の攻防3……………41

英語版映画カミカゼ上映……………50

私の接した將軍達① 栗林大将……………52

憲法問題……………55

明野慰霊祭……………56

高野山「空」の墓前祭……………56

慰霊協の紹介……………57

お知らせ 理事長……………58

事務局だより……………59

訃報……………60



## 第55回特攻平和観音年次法要

平成18年9月23日(土) 秋分の日、

世田谷山観音寺において、第55回特攻平和観音年次法要が、厳かに執行された。普段は松や楓の屋敷林に囲まれ、林間に苔むす古き堂塔の見え隠れする静寂・森厳な観音寺境内も、今日ばかりは、久々の再会を喜び合う元戦友達を始め、老若男女大勢の参詣者で活気づいている。台風14号の余波か、照り曇りの変わりやすい天候ながら、さしもの暑さも和らいだ絶好の彼岸日和となった。本堂脇の特攻平和観音堂正面の祭壇には、菊や竜胆など沢山の季節の花が供えられて香が焚かれ、本堂の欄干に掲げられた若き特攻勇士達の御影にも花束が手向けられていた。寺域中央の蓮池には、白いさるすべりの花卉が浮かび、池中に立つ大慈大悲の観世音菩薩が慈悲慈愛の眼を注いで、特攻勇士達の御霊と御遺族を始めとする参会の衆生をやさしく見守り下さる中、やがて14時、法要は始められた。

金龍山浅草寺一山大導師・法田光順  
大僧正猥下以下七名の僧侶の式衆入道  
に始まり、国歌斉唱、山主願文奏上と  
続く。

世田谷山観音寺住職大田賢照山主は願文の中で、特攻烈士の遺徳を讃え

「特攻勇士の諸霊は正に忠烈の亀鑑なり。諸霊が父母の恩愛を断ち、大忠、

大孝、大義、大勇に徹せし崇高無比なる境涯に相到せんか誰か万斛の涙なきを得んや・・・唯、諸霊を慰め得るもの一つあり、宇内に無慮一百三十有余の独立国家の新秩序の出現これなり。真に世紀の偉業。この赫然たるに匹儔するもの果たして他にあらんや。これ正に諸霊の志の顕現なり。諸霊の血の発露なり。諸霊や、大仁にして大徳、大勇にして大善なり。故に諸士の霊徳や無量なり。諸士の光顔や巍々たり。諸士の威神や無極なり・・・嗚呼尊い哉、嗚呼仰がんか哉、長存不滅の光。南無特攻平和観世音菩薩・・・」と、言を極め、心魂を傾注して奏上された。真に特攻勇士は、護国の鬼神となつて散華され、今や平和守護の観世音菩薩となつて我ら衆生を見守っておられるのである。

続く祭文奏上の中で、特攻平和観音奉賛会山本卓真会長は 終戦後60有余年を経た今日なお、政・官・司法・経済の各界指導者の中に、東京裁判史観から脱却できず、国益無視の言動に走る者が多く、憲法・教育基本法の改正等独立国家の基本に関わる諸法規の整備が遅々として進まぬ現状を憂え、また、戦争体験世代の高齢化と急速な減

## 祭文

光陰矢の如く一年の歲月が流れ、本日茲に第五十五回特攻平和観音年次法要を迎えるに当たり、謹んで在天特攻烈士のみ霊に申し上げます。昨年は第四十四回衆議院選挙で与党が圧倒的勝利を遂げた直後で、遅々として進まない憲法・教育基本法の改正を初めとして、我が国が真の独立国家として恥じない様に諸法規の改善が、積極的に推し進められる期待が強まったことを御報告申し上げます。

然しながらこの一年の動きは従来と変わらず、政・官・司法・経済の各界で、国益を考へることなく、対米盲従・媚中の途に走る指導的立場の人々が少なからず存在することを目の当たりにして、今更ながら敗戦の痛手の深さを痛感させられました。米中両国の狭間に会って、我が国の自立自存を如何にして護って行くのか、それには東京裁判史観からの脱却と、憲法改正を初めとする国内諸法規・法令を整備しないと、自ら屈従の途を辿らざるを得ないであります。

大東亜戦争敗因の一つとして、情報軽視とそれに基づく拙劣外交が挙げられますが、その上に戦力不保

持による弱腰外交が伴うとあっては、我が国の前途は誠に憂慮に耐えないところあります。

戦争体験世代の殆どが傘寿を超え、且つその数を急速に減少させている現実を前にして、皆様方の壮筆を伝え、形而上及び形而下の慰霊顕彰を如何にして次世代へ継承して行くのか、その成否は国民がこれからの我が国の存立を、自信と矜持を堅持して護って行けるか否かと、表裏一体であると申せましょう。

この様な時に、若い方々が中心のボランティア団体「日本人の心を伝える会」の企画を知って協会は、全面協力してCD『あゝ、特攻』の発売を、本年一月末から開始致しました。売り上げ剰余金で全国の護国神社に特攻勇士之像を逐次献納したいという、伝える会の願望が、間もなくその緒につく状況に立ち至っていることを御報告申し上げます。

在天の諸霊、引き続き私共を御照覧下さい。そして一層の御加護を賜ります様に心からお願ひ申し上げます。

平成十八年九月二十三日

財団法人特攻隊戦没者慰霊

平和祈念協会

会長 山本 卓真

少に伴い、英霊顕彰の次世代への継承問題の困難性に触れながらも、最近若者の間にその曙光が見え始めたこと、即ち、若者を中心としたボランティア団体「日本人の心を伝える会」のCD『あゝ特攻』の制作に関わる佳話を報告し、一層の御加護を祈願した。

次に御遺族を代表して追悼の辞を捧げた、第4御盾隊故廣嶋忠夫一飛曹の弟廣嶋文武氏は、厳肅なる本法要の執行に対し、遺族として感謝に堪えない旨を述べ、終戦61周年を迎えた今年、8月15日に小泉首相の靖國神社参拝が実現し、当日の参拝者は実に25万8千余名の多数に達したこと、個人的にも当日、靖國神社での再会を誓った亡兄の戦友達80余名と共に昇殿参拝を果たすことができたこと、また、昨年10月には、フィリピンのマバラカットを始めとする特攻勇士の慰霊巡拝の旅に参加することができたこと等を報告し、更に、特攻勇士の壮挙は、米国人である静岡大学情報学部M・G・シエフタル助教授を感動せしめ、『散華』(BLOSSOMS IN THE WIND〜HU MAN LEGACIES of the KAMIKAZI ZE〜)と題した特攻隊に関する詳細な著書を上梓し、その中で、特攻勇士は崇高な愛のために命を捧げ、テロリストは忌まわしい憎悪のために命を捨

てる、その本質は全く異なると主張している、との佳話を披露した。

戦友代表星埜清滋(陸士55期)氏も「後に続く者を信ず」と後事を託し、決然として特攻・散華された勇士達の念願は未だ達成されず、今なお民族・宗教等の対立紛争は絶えず、世界悠久の平和は招来されていないが、我々残された者は、力の続く限り、勇士達の念願達成に努力することを誓った。

また、世田谷区長熊本哲之氏は、永年にわたる特攻平和観音法要に敬意と感謝の念を捧げ、昭和60年に平和都市宣言を行った世田谷84万区民の生命を預かる身として、特攻隊勇士の意志を継ぎ、安全・安心の世田谷区実現に向けて全力を傾注したいと誓った。

その後、献吟二曲が、石橋一歌氏の吟、逢坂阪竜氏の笛で朗詠され、世田谷コールエーデ合唱団による献歌(壇生の宿、千の風、ふるさと)三曲の合唱、更に世田谷区民吹奏楽団によるトランペットの吹奏に合わせ全員で「海ゆかば」を斉唱し、会長・御遺族を始め、参列者全員祭壇前に進んで焼香。

その後式衆一同池前に進み、池中に立ち給う観世音菩薩に向かつて朗々と『般若波羅蜜多心経』を声明して、滞りなく第55回年次法要の幕を閉じた。

(飯田正能記)

### 世田谷特攻観音年次法要

田中賢一

世田谷の杜に響く梵鐘三打  
清浄な音色 特攻隊員の心  
山主願文に言う

諸霊や 大仁にして大徳  
大勇にして大善なり

故に諸士の霊徳や無量なり  
諸士の光顔や巍々たり

諸士の威神や無極なり  
嗚呼尊い哉 嗚呼仰がん哉 長存不滅の光  
南無特攻平和観世音菩薩

観音のうたげに乗る特攻烈士  
菩薩となった特攻烈士

手を合わせて拝む 老兵の顔 霜鬢爛額  
死すべき命 長らえて  
菩薩となった友の顔 臉に浮かぶ



焼香の列

人生僅か五十年 軍人半額二十五年  
計らざりき 八十路に至らんとは  
御霊は 匂うが如き若武者なるに  
老耄 杖曳きて霊前に佇む  
嘗て国に報ゆるの微衷は抱きしも  
及ばざりき 御霊の大忠には  
命長ければ恥多しと  
幸にして恥すべきこと無きが如きも  
世に御霊の志を恢弘することの  
至らざりしを恥ず

## 八月十五日靖国神社

田中 賢一

歩行やや不如意なので、娘の付添い

を得て出向いた。七時に家を出て市ヶ谷駅に着いたのは、八時二十分ころだったか、神社の北の門が閉鎖されていたので、遠まわりして参道へ入ると、大鳥居方向から神殿に向かう人の列が続いている。路傍で我が会員で前号に「小泉首相の八月十五日参拝を求む」という記事を出した佐藤博志君に出会った。彼は嬉しそうにさきほど小泉首相



全国から参集者があり約600名

が参拝したと、私に告げた。私は英霊にこたえる会の本部運営委員の端末に名前をつらねているので、この会が九時から始める全国戦没者慰霊大祭に出席した。

堀江正夫会長の祭文のなかで、特に強調されたことは、「ここ数年に亘っての国立追悼施設建設の策動、また之れと関連したとみられる千鳥ヶ淵戦没者墓苑の拡幅の蠢動、昭和殉難者十四柱の分祀の再燃。さらにまた、畏れ多くも先帝陛下の靖国神社御親拝にかかわる新聞社の報道等が認められておりますが、誠に遺憾の極みであり、慚愧にたえないところであります」祭文のこの項に関することはあとで述べる。

祭文奏上に続いて仏所護念教団合唱部の献楽があった。同期の桜は戦争中もよく歌ったもので、その響きも歌詞も胸に迫るものがある。

慰霊大祭終了後、能楽堂脇の天幕張りの救護所に立寄り、特攻協会々員の佐々木さんから看護師の奉仕活動に敬意を表して、神前を後にした。毎年正午のサイレンを聞き拝殿で手を合わせていたが、今は体力伴わないので十一時前に九段下駅に向かった。九段下から大鳥居を経て神殿に向かう人の群れは延々と続いていた。もう我々のように戦友らしい人は殆どなく、みな戦後に



11時頃続々とつめかける参拝者

育った人である。

昨年は、この日の参拝者二十万を目標に、我々英霊にこたえる会では動員に心掛けて、二十万五千人の参拝者を記録した。今年は同じくらいは来てくれると思っていたが、続々詰めかける人の群れを見て、去年よりは多いような気がしたが、翌日の新聞を見ると二十五万八千人と出ていた。首相も参拝したし、去年を上まわる庶民、しかも若い人が参拝してくれて、こんな喜ばしいことはない。

産経新聞には正午頃ヘリコプターから撮った写真が出ていたが、拝殿を先

頭に参道は、立錫の余地もないほどの人の列である。

堀江会長の祭文にもあった通り、中国や韓国の内政干渉に屈し、首相の参拝に反対する徒輩が少なくない。そのような者にはこの庶民の姿を見ろと言いたいのだが、そんな手合いは参拝にも来ないのだから、国民の気持ちがかかる筈がない。中韓の国益に唯々諾々として乗っているのだ。彼の国は自国の人民の不平を逸らすため靖国カードを使っていることぐらい判らないのか。

この日のテレビは小泉首相の参拝のことは、ニュース価値が大きいので大々的に放映したが、大衆のことは殆ど知らせない。靖国神社のことを教科書に書けと言っても、すぐには実現しないだろうが、せめて公共放送のNHKだけでも靖国神社と庶民の姿を正しく全国に知らせないと、中国等に媚びる政治家共に、我が国が持っていられる怖れがある。

靖国神社に代る何かをつくるという論をなす外道には、御祭神と共に戦った我々の気持ち、知らしめるのは容易でないかも知れないが、戦死したら靖国神社に祀られ、国民の尊崇を受けて、天皇陛下の御親拝を仰ぐと信じていた御祭神の気持は判るだろう。判らせねばならぬ。

# 八月十五日御奉仕を決意して

会員 佐々木 ひろ子

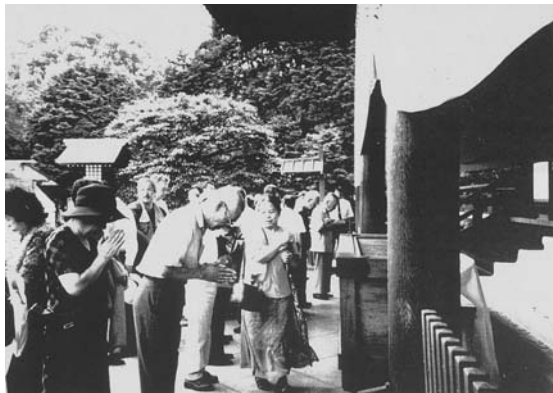
發揮され、「一旦緩急  
アレハ、義勇公ニ奉シ」、  
国難の折、御国の為に  
戦いに立ち上がり、たつ

五件で、此の日を終わりました。熱中  
症症状を訴える方が少なかつたのは、  
天候不順だったのは勿論ですが、救護  
所隣に併設された、靖國神社崇敬奉賛  
会青年部あさなぎ会員による、麦茶振  
る舞い所の一杯の麦茶が、熱中症予防  
に貢献されたのではないかと存じてお  
ります。あさなぎ会員のみならず、参  
拝者の中に二十代三十代の世代が更に  
増えた様に存じました。其の思いは、  
日本人として慰霊顕彰を受け継いで行  
かなければならない、と皆同じ思いと  
存じております。

今後も御英霊より賜りました鴻恩に  
添うべく、今回の救護の反省を踏まえ、  
来年以降に活かせるよう精勵致すと共  
に、報本反始の道を歩んで参りたいと  
存じます。

戦後六十年目を迎えた昨年八月十五  
日の靖國神社参拝者は、二十万五千人  
と発表されました。思い出しますと、  
朝から気温は上昇し靖國神社に到着し  
た十時には、既に神門前まで長蛇の列  
でした。拝殿までの流れは遅く、酷暑  
と人の蒸れで苦しい程でした。其の様  
な中、御高齢の方々が汗を拭っている  
姿が目がきました。看護師という職  
業柄、熱中症の可能性が頭に浮かび、  
万が一の事を考え救護所を目で探しま  
したが、境内に確認出来ませんでした。  
此の時、参拝者の生命力の消耗を防ぐ  
為に御役に立ちたいと存じました。そ  
して、参拝者のみならず、延いては、  
御英霊より賜りました鴻恩に、ほんの  
僅か乍らでも応える事に繋がるのでは  
ないかと存じました。

た一つの尊き生命を捧げられ、死して  
尚護国の護り神となられました。個人  
利己主義ではなく、生命を捧げてまで  
も御国を護る、此の御行為を鴻恩と言  
わずして何と申せば良いのでしょうか。  
そして、「博愛衆ニ及ホシ」に則り、  
従軍看護婦の大先輩に習いたいと存じ  
ました。故に、六十一年前の日本人が  
涙して終戦の詔書を拝聴された特別の  
日、八月十五日に救護の御奉仕を決意  
し、靖國神社より許可を頂きました。  
早速、同じ微志を持つ看護師仲間三名  
に呼び掛けた処、二つ返事で御奉仕す  
る事を引き受けてくれました。  
そして、迎えた平成十八年八月十五  
日、此の小泉首相は、反日偏向報道  
や昭和天皇の御発言とされる富田メモ、  
中韓からの抗議等の反対勢力に屈する  
事なく、昇殿参拝をされました。最後  
の夏になりましたが、公約を果たし日  
本の立場を貫かれた事に感謝致しまし  
た。亦、昨年を遙かに上回る二十五万  
八千人が、至極当然と心得え参拝を致  
しました。大勢の参拝者の中、看護師  
見の事が出来ました。「億兆心ヲ一ニ  
シテ」、国民が一致団結して大和魂を  
結果、救急隊要請二件、救護所処置十



## 8月15日第20回 戦没者追悼中央国民集会

飯田 正能

終戦から61年目を迎えた8月15日、小泉首相が靖國神社に参拝した。終戦記念日の首相参拝は、昭和60年、当時の中曽根康弘首相の公式参拝以来、実に21年振りのことである。この日小泉首相は、午前7時40分過ぎ小雨の降る中を靖國神社到着殿前に到着、沢山の参拝者が日の丸の小旗を打ち振って歓迎する中、モーニング姿で昇殿、「内閣総理大臣小泉純一郎」と記帳して献花し、本殿祭壇前で一礼して参拝を済ませた。小泉首相は、国内外のあらゆる圧力を毅然としてはねつけ、5年前の自民党総裁選で「いかなる批判があろうとも、8月15日靖國神社に参拝する」と訴えた公約を果たした。

この日、全国戦没者慰霊大祭の後、例年どおり靖國神社参道の特設大テント内で開催されている、戦没者追悼中央国民集会に駆けつけた。集会は10時半からの開会であったが、早くにテント内は満席となり、約三千人の参加者が周辺に溢れて、立錐の余地もない程であった。

大原康男国学院大学教授の司会により、国歌斉唱、靖國神社拝礼の後、当

時の録音による「終戦ノ詔書」の玉音放送を拝聴したが、無念の想いと万斛の涙を飲んで拝聴したあの日の情景を思い起こして感無量であった。

まず、主催者を代表して挨拶に立った日本会議の三好達会長（元最高裁判所長官・海兵75期）は、いわゆるA級戦犯合祀の問題に触れ、A級戦犯14柱の分祀は、靖國神社宮司が決断しさえすれば、5分間でできることであると暴言する者がいるが、靖國神社は、合祀者の実質的な選定権・裁量権を有していないのである。靖國神社の御創建は、明治天皇の聖旨によるものであり、戦争や事変等による戦没者を始め、国難に殉じた者全てを等しく合祀するものであって、被合祀者の身分や人柄とか、功績とか、戦争の責任如何等による選別はしないのである。これまで



の合祀手続に見られるように、遺族援護法等に基づいて政府・所管省庁（厚生省）の決定した戦没者名簿を「祭神名票」という形で靖國神社に送付し、それを受けた靖國神社は、合祀される方のお名前を記した「霊璽簿」と「上奏簿」を作成し、その「上奏簿」を宮中にお届けした後に合祀を行うのである。したがって、被合祀者の決定は国が行うものである。

次に東京裁判（極東国際軍事裁判）と講和条約の關係について、サンフランシスコ対日平和条約第11条の日本語正文には「日本国は、極東国際軍事裁判所並びに日本国内及び国外の他の連合国戦争犯罪法廷の裁判を受諾し、且つ、日本国で拘禁されている日本国民にこれらの法廷が科した刑を執行するものとす」とあるが、この中で「裁判（ジャジメント）」と表記されている部分は、「判決」と訳すべきであって、この規定は、日本政府に東京裁判の正当性を認めさせたものではなく、講和成立によって独立権を回復した日本政府による自主的な刑の執行停止を阻止することを目的としたものであると解すべきである。したがって、昭和27年4月28日、平和条約の発効により、戦争状態は終結され、日本は独立権を回復し、昭和28年8月3日には、「戦

争犯罪による受刑者の赦免に関する決議」が衆議院本会議で決議され、関係各国の同意を得て、受刑者は逐次釈放され、恩給法や各援護法も逐次改正されて、日本政府による、いわゆる戦犯者に対する援護措置も執られるようになった。政府は一貫して、いわゆる戦犯者を特別扱いしてきたことはなく、A級戦犯を始め戦争裁判で死刑・獄死した者をも公務による死亡者（法務死者）として、一般戦没者と同様に扱ってきたのである。また、いわゆるA級戦犯の合祀されている靖國神社への首相の参拝阻止を外交カードとする中、韓両国の不当な内政干渉に屈するようなどがあれば、次はB・C級戦犯もなどと次々に要求してくるであろうことは自明の理である、と強調した。

次に、各界代表の提言として、自由民主党の稲田朋美衆議院議員（弁護士・伝統と創造の会会長）が教育基本法の改正問題に触れ、日本の伝統と文化に根ざした愛国心、道徳心、宗教的情操の涵養等を教育の理念として推進する必要がある。また、政教分離に関する我が国独自の考え方については検討の必要があり、法整備を図るべきである。靖國神社については、国のために殉じた英霊を、国を代表して首相が参拝し、慰霊するのは当然のことであって、更

に進んで、靖國神社の国家護持を検討すべきであると主張・提言した。

次に挨拶に立った、英霊にこたえる会の堀江正夫会長（元参議院議員・陸士50期）は、先に執り行われた第31回全国戦没者慰霊大祭における祭文奏上と同様、小泉首相の靖國神社参拝を喜びつつも、戦後61年が経過した今日にあっては、いわゆる「東京裁判史観」の反日自虐思潮から脱却できず、国立追悼施設建設の策動、いわゆるA級戦犯分祀の再燃、また、最近の富田メモ問題等々誠に憂慮すべき状況にある。我々はまず、我が国の正しい近現代史の真実を明らかにし、間違った、いわゆる「東京裁判史観」からの脱却を図らなければならない。二千年来の日本の伝統と文化に基づき伊勢神宮と宮中三殿、及び靖國神社は国家護持としなければならない、と声を大にして強調した。

次に提言者の一人として、台湾団結連盟日本代表の林建良氏（医学博士・東京大学卒）が立ち、日本人は、本当の平和を守ってほしい、平和の奴隷となつてはいけない。国のために命を捧げた英霊を祀る靖國神社に参拝しないと、英霊に感謝しない人が、本当に日本を愛し、国を守ることができるであろうか、自分の国を愛することがで

きない者に、隣国を愛し、真の平和を守ることができるであろうか。日本人は、もっと隣国台湾を愛してもらいたい、

61年前までは、台湾人も日本人であった。台湾は、日本の南の守りであり、生命線であった。そのことは今も変わりはない。日本は、隣国を愛し、隣国の信頼を得て、台湾を、更にアジア諸国を守ってもらいたい。日本は、台湾とアジア諸国の先生となつてもらいたい、と熱っぽく主張・提言したが、日本人以上に日本を愛する熱情に、日本人として、誠に汗顔の思いであった。

最後に提言をした、日本大学の百地章教授（憲法学者）は、天皇の政治利用を許してはならないとして、日本経済新聞社がスクープした富田元宮内庁長官メモの問題に触れたが、これには数々の疑問点がある、同新聞社では専門家の検証を経たものであると強調しているが、その検証は実にいい加減なものであり、今後厳密な検証をやる必要があるとともに、同新聞社には、これら数多くの疑問に答え、誰もが納得のいくように説明する義務があるとした上で、数点の疑問について具体的な指摘をした。特に、A級戦犯が処刑されたのは、昭和23年12月23日、その日は、今上陛下（当時の皇太子殿下）の誕生日であったが、その祝賀の宴を中

止され、その後毎年、東條家の祥月命日には、陛下のお使いが見え、御下賜品とねぎらいのお言葉を賜っていた事実があることから、東條元首相らの合祀にまで昭和天皇が御不快の念を抱かれていたというのは、到底信じられない。昭和天皇が、仮に一部のA級戦犯の合祀を不快に思われたとしても、靖國神社には、幕末以来の国事殉難者約二四六万六千余柱が合祀されており、陛下の靖國神社御親拝は、これら英霊全体に対するものである。また、A級戦犯の合祀に反対し、その分祀を主張する人々は、公然と死者の差別を主張するに等しく、誰でも死ねば神、仏となつて平等であるという、日本人の伝統的な考え方に反するものである。次に、富田メモが仮に昭和天皇の御発言であるとした場合、このメモをめぐる

一連の報道を見ると、マスコミは、同じ天皇の御発言であっても、立憲君主としての公的立場での発言と私的な発言とは区別して考えなければならぬ、ということがかつていないのではなにか。昭和天皇は、立憲君主として、常に公平無私を貫かれ、公私をはっきりと区別された。天皇の私的な御見解によって国政が左右されてはならないからである。天皇の政治利用については、かつて、昭和48年5月、当時の増

原防衛庁長官が防衛問題について昭和天皇に内奏をした際、陛下から「国の守りは大事なので、しっかりやってほしい」とのお言葉を賜ったことに感激し、それを記者団に披露したことを、

社会党・共産党などの野党が取り上げて激しく反発し、マスコミも天皇の政治利用に当たるとして厳しく批判し、結局、増原長官は更迭という事件があった。その時朝日新聞は社説で「増原長官の発言は、天皇のお言葉を政治的に利用しようとするものであり、国民統合の象徴たる地位に傷をつけることになりかねない」などと批判し、日経新聞も、増原長官の発言を「防衛力増強に關し、天皇の内々の御発言を政治的に利用したととられてもしょうがない」ものであると批判した。それが、今回の富田メモを根拠に首相の靖國神社参拝に反対し、A級戦犯の分祀を主張する人々を勢い付け、中・韓国だけでは足りず、昭和天皇まで引き合いに出して首相の靖國神社参拝を阻止しようとしているのであるなどと、理路整然と主張・提言した。

以上で挨拶、提言等を終わり、戦没者への黙禱、武道館よりの実況放送による天皇陛下のお言葉拝聴、声明文朗読、海ゆかばの斉唱で幕を閉じたが誠に充実した集会であった。

# 人間魚雷回天と黒木博司・ 仁科関夫少佐（1）

会員 岡田 幹彦

本記事は月刊誌「明日への選択」に著者が連載したものであるが、我が協会機関誌に相応しいものと考え、改めて当方に投稿を求め、一部組み直し二回に分けて掲載することにした。

## 人間魚雷回天の創始者

大東亜戦争において飛行機による特攻とともに、特殊潜航艇による海中からの特攻が行われた。それが回天と名づけられた人間魚雷による特攻である。魚雷を改造した約十五メートルの小型特殊潜航艇に一五五〇キロの爆薬を積み、一名の海軍将校または下士官がこれを操縦して敵艦に体当たりする必中必殺の攻撃である。回天特攻は神風特攻とともに米軍を震撼させた。

終戦直後、日本軍の軍使がマニラのマッカーサー司令部に向いた時、サザランド参謀長が真っ先に言ったことが「回天を積んだ潜水艦が何隻洋上に残っているか」であった。「十隻ぐらいいる」と答えると、彼は身を震わせ

「それは大変だ。早速戦闘行動を停止するように厳命してほしい」と強く要請した。

また、一米海軍中将は「このとてつもない兵器は、もし戦争がさらに続いていたならば、重大な結果をもたらしていたかも知れぬ」とのべている。

回天特攻は、昭和十九年十一月二十日より終戦時まで行われ、米軍に少なからぬ打撃を与えた。国家に生命を捧げた回天勇士は訓練中の殉職者を含めて百六名である。

回天特攻を考えつき、これを海軍当局に強く進言、この特攻兵器の製造と特攻作戦の訓練及び開始に全身全霊の超人的努力を傾注し、護国の英霊として真っ先に亡くなったのが、未だ二十代前半の黒木博司少佐であり、黒木の盟友としてこれに協力、回天特攻の最先陣として散華したのが仁科関夫少佐であった。

黒木少佐は何ゆえ人間魚雷による特攻を思い立ったのであろうか。鉄の棺桶といわれた生還のありえぬ人間魚雷を駆って敵艦目がけて突撃した回天特攻勇士の祖国を想ってやまぬ至純至高の心を知ることこそ、今日の日本人に最も求められることではなからうか。

## 父母の庭訓と 黒木の家族への至情

黒木博司は大正十年九月十一日、岐阜県益田郡下呂村（現下呂市）に生まれた。昔の国名でいうと飛騨国である。飛騨川が流れる山あいの自然の美しい農村であった。父は弥一、母はわき、兄一人、妹一人の家族である。父は医者である。両親とも立派な人で常に「正直はこの世の宝」と博司らを厳しく躰けた。母のわきはこう教えた。

「百人の人に笑われても一人の正しい人に誉められるよう、百人の人に誉められても一人の正しい人に笑われないうよう。正直で曲ったことはしないように」

黒木はこうした両親の教えをよく守り心身ともすこやかに生長した。少年時の黒木の性格は小学校の成績考査簿に、「温順、快活、上品にして努力、勉強につとむ。技能に秀ず。社交的にして明朗なり」と記されている。人柄すぐれた元氣一杯の少年で、小学時代の学科成績は全甲（全優のこと）、操行（心と行い）も甲であった。

黒木は親思い、兄妹思いであった。岐阜中学時代、下宿をしていた家の主人はこうのべている。

「黒木は兄のことをいつも思っている。

た。兄が上級学校を受験した折は、兄の写真を床の間に飾ってその前に兄の好物である菓子や果物を買ってきて供え、試験の三日間断食して成功を祈った。真剣そのものだった。水を飲むだけで一切他の食物を断わった。しかも平然として学校へ通い少しの乱れも示さなかった。下宿の六畳の一室にあの食べたい盛りの少年がおいしそうに果物菓子を高く積み上げながら、自身は絶食してふりむきもせず心をこめて祈った。この時兄は合格した。その時黒木は全く飛び上って喜んだ」

黒木は兄あての手紙で「僕は狂ってしまうほど嬉しかったし、今尚嬉しさで一杯です」と書いている。四つ年上の兄の寛弥はこう言っている。「博司は僕に逆らったことは一度もないように記憶する。：『博司、一緒に行く』と誘えば欠かさずついてきた。：兄に



黒木博司少佐



逆らわなかった博司、今にしてはいじらしい弟であり、好きでもないのに(魚釣りのこと)誘って彼の自由を束縛したのが申し訳ない気持ちである。勿論僕に逆らわないほどだから、父母に対しては絶対に逆らわなかった」

寛弥もよき兄であり博司を親愛した。二人は実に仲の良い兄弟だった。この兄弟を見るとやがて博司が最も尊敬する吉田松陰と兄梅太郎の間柄を思わせるものがある。博司は妹の教子に対してもやさしい愛情深い兄であった。こうした子供を育てた父弥一と母わきがいかに立派な親であったかが思いやられる。

昭和九年、黒木は県立岐阜中学へ進んだ。ここでもよく学び成績優秀だったが、特に出来たのが数学だった。中学後半期、黒木は海軍を志望、海軍機関学校を目指した。黒木は年少時より船が大好きで船の模型や魚雷を作ったり、ガソリンで動く蒸気船を設計したりしていた。技術に深い興味をもち技能にすぐれていた黒木は、技術や兵器の研究に適切な学校として海軍機関学校を選んだ。海軍将校となる道として海軍兵学校か海軍機関学校そして海軍經理学校があったが、黒木は機関学校一本槍で受験にのぞみ、昭和十三年十一月三日合格通知を受けた。機関学校

は陸軍士官学校、海軍兵学校と並ぶ難関である。岐阜中学からは陸士五名、海兵四名、海機に黒木一名であった。明治節(明治天皇のご誕生日)の日に合格した黒木は自己の志を次のようにべている。

「千古の芙蓉(富士山のこと)、妖雲を払い、一朝の桜花、怒濤を斥く。字内万邦窺威して止まず(米英ソ連等が日本を制圧せんとしているとの意)、乾坤為に暗し。秋恰も世紀の大業、皇国の興廢、干戈に俟つ。我先に海軍に受験をし、天皇の股肱たらんことを志す。而して本明治の佳節、且つ軍艦旗制定五十周年祭の日にその発令に接す。嗚呼男子の本懐これに過ぐるなし。

庶幾くは神明、皇国をして無窮たらしめよ。黒木統字」

統字は黒木の号である。黒木はすでにこの頃「八紘一字」の精神で世界を一つにすることが日本の使命と固く信じていた。

### 海軍機関学校の日々

昭和十三年十二月一日、黒木は舞鶴にある海軍機関学校に入学した。満十七歳である。入学者は百名、全国から選ばれた優秀な若者たちであった。海軍機関学校は海軍機関科将校を養成する学校である。海軍兵学校出身の

将校は砲術、水雷、通信、航海運用を担当するのに対して、機関科将校は海上においては軍艦の機関運転指揮の任にあたり、陸上においては機関、兵器、航空機の計画、製造、研究等の仕事を担当する。

機関学校は全校三三五名、四学年からなる。全生徒は十二個分隊に分けられ、黒木は第十分隊に編入された。一分隊は各学年の生徒が数人ずつ入る。四学年が一号生徒、三学年が二号生徒、二学年が三号生徒、一学年が四号生徒とよばれた。海軍の学校だからあくまで軍隊組織であり、この分隊の中で生徒は切磋琢磨し鍛えられる。四号生徒を教導する役目をもつのが一号生徒であった。

海軍機関学校の生徒教育は広島県江田島にあった海軍兵学校と基本的に同じで峻厳そのものであった。一号生徒は四号生徒を徹底的に鍛え上げた。毎日起床から就寝時まで息つく間もなく厳しく規則正しい学習、訓練、生活が続く。ことに特別訓練期間である初めの一ヶ月間が泣きたくなるような大変な日々である。何事も短かい時間でテキパキとやらねばならない。移動は駆足である。少しでもやり方がまずくたるとんだ姿勢、態度をとると即座に鉄拳が頬を見舞う。

海兵でも海機でも上級生の下級生への鉄拳制裁は愛の鞭として公認されていたことである。四号生徒は入学後二十日目ごろ、全員が一号生徒の鉄拳をうける習わしがあった。それが海機名物の「召集」とよばれる催しである。新入生を鍛え上げる為の必須の行事とされたのである。

十二月二十日午後六時、「四号生徒、剣道場に集れ」の号令がかかった。全員、駆け足で集合すると一号生徒が恐ろしい顔つきで待ち構えていた。すると正面壇上に一号生徒の代表が立ち、入学以来の四号生徒の不規律、不徹底の例をさんざん並べ立てた後、「貴様達、しっかり歯をくいしばり腹に力を入れて覚悟せよ。活を入れてやる。軍人精神を叩きこんでやる」というなり、「一号掛かれ」と号令した。

一号生徒は居並ぶ全四号生徒に対して鉄拳の雨を降らせた。一号生徒が代る代る力一杯頬をなぐるのである。全員がほとんど一、二秒おきに四十発から五十発ほどくらう。そこらこらで四号生徒のすすり泣き、しゃくり泣きがおこる。しかしなぐる側の一号生徒はこうすることが四号生徒を一人前の立派な海軍軍人となるために必要と信じてやったのである。

最前列にいた黒木のところに第十分

隊の生徒長（一号生徒）がやってきて、「黒木、苦しくても泣くなよ」と涙を浮かべて激励した。黒木はこの生徒長が少し前「俺が四号の時五十発ほどなぐられ、後で便所の中で泣いたものだ」との話を思い出し、「はい、大丈夫であります」と元気に答えた。

### 機関学校随一の元氣者

黒木はこの日のことを日記にこう記した。

「四十近くあるいはそれ以上殴られたが遂に俺は涙一滴こぼさずにこらえることが出来た。男たることが出来たのだ。軍人たることが出来たのだ。皆しゃくしゃくおいおい泣いている。急に朗かな気持になった。俺は克つたんだ。人のみならず自分にまで克つたんだ。だがその後で四学年が、『軍人だ、泣くな』とて目に二ばい涙をたたえつ、

『貴様達とは同じ軍艦内で共に骨を拾い拾われする戦友だ。俺達の殴るこの気持を知れ』と絶叫されたのには皆おいおい泣いたが、俺も心中で有難いとも何とも言えぬ感激の念に一杯となって泣いた。だが遂にあふれ来る涙を一杯大きく開いて睨んだまゝ遂に頬を濡らさずにこらえ通した。実に今日の俺はよく辛抱したものと自分でも感心した。

解散後、学年監事から激励があり、酒保（軍隊の管内で酒、食べ物、日用品を売る所）に朗かに食べに行った。泣いた奴まで真赤な眼で喰うことだけには劣り無く来た。風呂では専ら召集の話でもちきり。誰もかも言うことが良い。『俺は殴られて泣いたのではないが、後の話で泣けたんだ』と。…六時五十分、生徒長が分隊長を神明社（学校社で皇大神宮の分社）に連れて行かれ情けある激励をされた。この時は俺もまた心の中で一泣き泣かされた。頬は濡らさずにこらえた」

殴り殴られた一号生徒と四号生徒はことに親密な間柄となって兄弟の如く睦み合った。黒木は一号生徒の幾人かと最も親しいつき合いを以後死ぬまで続ける。こうして黒木は「海軍生活中もっとも辛いつとめ」といわれた入校一ヶ月間の特別訓練をやり遂げた。

四号生徒百人中、黒木の存在は異彩を放ち、黒木の名は他分隊の上級生の耳にも達した。第十分隊の生徒長は黒木にこう言った。

「俺は貴様に最も期待している。海機で最も望む奴だ。一号が皆期待している。」

同分隊のある一号生徒はこういった。「一号の会合で『十分隊の黒木は実に元気で節度があり礼儀正しい』と評

判されるのを多く聞かたびごとに俺も生徒長も非常に嬉しい。その元氣と規律でやって行け。俺達は貴様に期待する」

黒木は家への便りでこうのべている。「上級生が『十分隊は校内一だ。そして十分隊の四号は元氣の源泉だ』と。また時々、『黒木、貴様のエネルギーを皆に分けてやれ』とまで言われるほど元氣にやって居ります」

黒木は四号生徒にして早くも機関学校の名物男となり、昭和十四年六月第二学年に進み三号生徒となった。上級生からは益々愛され期待され、同級生からは厚く信頼され、同期の中心的存在となった黒木の心の内を示す父母あての手紙の一節を掲げよう。

「同封の詩歌は私の皇化、八紘一宇の精神を謡いしものにて候。然して、この八紘一宇の国体観こそ私をして殉忠尊皇に赴かしめ今軍人たらしめて有るものに候…。

澎湃寄する大亜細亜 秋津島根の黎明は

二十億民同胞の 眼をさます朝日影  
あゝ玲瀧の不尽の嶺に 仰ぐ二千六

百年  
夢か現つか御民吾れ 天皇万歳に胸熱し

あゝ悠久の青史の跡 皇統の一筋に

八紘覆うて一字となす 皇講の聖業  
今進む

赤く燃えたつ父祖の血の 艦の一輪  
に丈夫が

皇国を偲びて泣く宵は 吉野の花に  
滴あり

昔砦の綿津海は 今狂瀾に月蒼し  
怒涛眼下に海の児の 胆併吞す五大

州 栄華の人の夢長けて 北斗の星  
のさえぎえに

誰か興亡を想わざる 天皇よ  
永遠無窮に

山に海に野の桜に 悲歌慷慨の丈夫  
が

皇国を念ひて起つときは 人生短か  
く名は長し

紀元二千六百年佳節作 黒木統字」  
昭和十五年二月十一日、神武天皇の

建国より二千六百年を迎えた紀元節の  
日の作である。黒木は迫り来る国難を

ひしひしと感じていた。翌年勃発する  
米英との戦い、大東亜戦争は「八紘一

宇」の世界を築く上に避けられぬ戦い  
と見ていたのである。

### 唯願うは皇国の無窮

黒木は海軍機関学校生徒として励みに励んだ。三号及び二号生徒時代の昭和十五年から十六年、十八・九歳の黒木が日々何を思っつて学び己れを磨いた

かを知るなら、やがて人間魚雷を創始するに至った心の内がわかる。黒木は父母、兄妹に数多い手紙を出し卒直に自己の気持を披瀝している。黒木の胸奥より奔る声に耳を傾けてみよう。

「私は今元氣一杯、思うに尊皇の大信仰と勉強とは切っても切り離せないものであります。今まで私はこの大信念を固めるのに或いは勉強も手につかぬ時もありましたが、今夏完全に不動不拔ふたふた聊かも揺がぬものとなすことを得、これ以上何も考え或いは疑うこともなく、胸中晴々として只管勉強の一途です。お喜び下さい」

二号生徒になった昭和十五年九月、十八歳の時父母へ出したものである。

「時今や皇国の大非常時、本当に私を必要としている。私が特にしっかりとやらねばならぬ秋。最早私の勉強は一点の『私』はなく、帝国海軍あつての勉強、皇国の無窮を希願ねがう私の情熱の顕現のほか何物でもないであります。完全なる修得、御奉公の為の習得、ど

れだけ追っても追いつけるものではありません。唯一直線、只管の傍目わきめもふらぬ一直線、何物のさえぎるものもない驀地もろち(まっしぐらに進むこと)、睡たくとも眠られぬ一步に一刻。唯々真直ぐに進むのみ。

すめぐに一人の我は生き死ぬも

唯天皇の世界を願ひて

すめぐに一人の我はいかでかや

人にすぐれて勉めざるべき大君おおきみの此の天地あめちを知らしめす

御代を護らむ力ふるひて

私は静かに考へてみました。否、実は一下級生と話して省みたのです。そして発見しました。私のこの胸中に燃ゆる純潔雄勁けんけい烈々崇高の尊皇心は他の者の忠節愛国の念と少くともその精神信仰を抱かかりに至りし過程に於て数段の或いは全く及び得ぬ差異あることを知りました。即ち説明せずとも御察し下さる如く天賦の血の情熱尊皇心であり、読書に或いは社会より或いは理論より培れたるものでなく、全く私独創の信念、信仰だからであります。私は感謝します。父上母上の今までの正しき御教育を遙かに東天皇居遙拜ちゆうばいの後、再び頭を垂れて心に合掌し父上母上に無上の感謝を致します。そして唯祈るは御健康のみ。

省みるに中学半ば志を立ててより未だかつて神明に祈って私を願ったことはありません。唯願うは皇国の無窮、聖寿の万歳、国土の健闘。そして父母兄妹の御健康。私を願うことは一片もなく唯皇国の御役に立つべきよう私が成りゆくよう、又斯くならんことを己れの努力に誓うのみであります。

没我殉忠 一誠

私一人でもうっかりしてすごした

ら、日本の危機は救うことが出来ない。唯一直線」

同じ年十月、十九歳の時のものである。両親から授かった烈々たる尊皇心のもとに、今や刻々と迫るわが国の危機に臨んで「没我殉忠」の誠を捧げる覚悟をのべている。

### 楠公に劣らぬ忠臣になりたい

アメリカは昭和十四年、日米通商条約を一方的に破棄し、日本に対する経済封鎖を強化、対日戦争に向かって着々準備していた。黒木はさし迫る一大危局を誰よりも敏感に捉えていた。

「今の世界、今の世界の人々は人間自分等の生活の真理なる日本の此の国体、皇国の姿をほうむらんとしているのです。私達は日本の土に生れたが故に愛する祖国愛のみではありません。その国体が第一等であり、絶対最高唯一の理想であるからであります。日本ありて父母あり、祖先あり、祭祀ありです。元がなくなつては何もない。唯一つのこの国体が失われたならば、永久に地球上から幸福と平和の第一たる孝悌こうてい(親に真心をもって仕え兄弟を敬愛すること)が失われるのです。

私の今は斯の小孝に己れのみを満足

させている秋ではない。日本人をして子孫をしてまた世界の人々をも此の幸福に入れてやらねばなりません。それには日本が昌さかえることである。日本が栄え、四海皆同胞、八紘一宇はつこういちうの大皇化たいわうかに、浴よくさねばなりません。その皇軍。大孝。忠を護る皇軍としての私の使命を見出したのです。これが本当の孝である」と

「日米戦起るならば近くである。是非それまでには一流に劣らぬ立派な日本人の考えを持ち、また人に劣らぬ実



楠木正成が祀られている湊川神社 (神戸市)

力を有し、かつ人一倍の胆力と死生観をもつて臨みたいと思うと夜も日も足らざるの焦慮のみにて仲々に修行はむつかしきものであります。休み時間も公の生活では自由に使えず決められた自習時間は足らぬのみにて、結局読書は夜起きて便所の中でやるより方法がなく、今朝も二時に起きシャツを着込んで三時間半ほど目的を遂げました。：随分私のやることは気狂いみたいなのですが、戦友も一日おいて意見を聞いてくれてどうやらクラスのリーダーと言いう有様で、また上級生に少々奇人に扱われて妙な格好の存在であり決して恨まれてなどはいません。変わった奴と思って一層親密な関係にさえなっている人も多い」

「人はともあれ、人は知らず、天を相手に唯尊皇に燃え立ちて立派な楠公にも劣らぬ忠臣になりたい。私のように凡人に毎日々々の殉皇の生活、忠臣たることは至難である故に最後の軍人の死に臨んで立派な最後が出来るように、また魂込めた仕事が無遠く皇國を護るようになり、そして日本第一の天皇のよき赤子、よき股肱（部下のこと）でありたい。今の私の至難は克己、更にそれよりも生の執着の脱出です。死が

やはり既に生命を捧げた軍人でありながら怖しく惜しいのです。死の大悟、これは凡人にはやはり至難であるうと思われます。そしてこの死を容易ならしめるもの、それは『死の心』より以上の尊皇の情熱、殉皇の純心あるのみです」

日本国民にとり最高の忠臣の鑑とされた楠木正成たらんとして、黒木はかくも熱烈な求道と修養に励み抜くのである。年明けて昭和十六年一月、兄にこう書いている。

「私の察します所では日米の武力衝突も間近だと思えます。日蘭印（オランダ領インドネシア）会議はどうなっているか知りませんが、今日本で一番重大問題は石油のないことです。米國は売らないばかりか蘭印の今まで売ってくれていたのまで妨礙して、日本にいま石油が干涸びようとしています。従って大陸へ大軍を派遣することは出来なくなります。故に日本はこの内地蓄蔵の石油がなくならぬうちに米國の艦隊を破るか、或いは攻略戦で蘭印を占領しなければならぬ破目に陥っているのです。：私が思う所では如何に教官達が口を塞いでいても、南海の攻略戦は今年中に決行されると思います」

の輸入を絶たれんとしていた日本が自存自衛の為、今年中に、対米戦争に立ち上り蘭印等南方地域へ進撃するのは必至と黒木は見ていたがその通りとなるのである。黒木はこの戦いに命を捧げる為それまで心魂を傾けて自己研磨に励んできたのだ。黒木は同年二月、妹にこう書いた。

「兄さんはお父さんお母さんの愛情を余り受けたくない。忘れてしまわれたい。そうでないと当然来るべきものが来たとき、お父さんお母さんのやり親としての悲しみが非常に大きいのではないかと思う。今度は日露戦争の時以上の多くの真の決死隊が要るだろう。そして広瀬中佐をモットーとする兄さんにとっては是非此処に殉じたいものである。誰も皆同じ覚悟だろうが、兄さんは必ずやってみせる。そうでなければ兄さんが今まで読んで日本國体の優美に感激し忠臣烈士に全生命、全魂魄を捧げてきた感激が無くなってしまふ。

そこでお願いだが、教子と大きい兄さんとお父さんお母さんをうんと大事にしてくれ。勿論この兄さんも大切に慰めぬわけではないが、それ以上に教子達でお父さんお母さんを慰めてやってくれ。お父さんお母さんが兄さんを忘れるほどに。そうすれば兄さんも安心して心残りなく暴れることが出来る。頼むから教子と兄さんでお父さんお母さんをうんと慰めてやってくれ」

黒木は実に至孝の人であった。かつてない戦いに一命を擲つ自分に代って、愛妹に長兄とともに両親への孝行を切願しているのである。

### 国難を救わんと熱誠

昭和十六年三月、黒木は一号生徒になつた。黒木は寸暇をみつけては家郷に便りを出し、求道向上の生活をありのままに綴つた。

「不肖益々元気に候。正に天下第一等の士たるべく真の大丈夫たるべく候。御期待下された候。父上母上様以上に教官、戦友の期待あるやも知れず候か。呵々!!

一号生活、それは実に愉快なるものにて候。運動は下手なる不肖も卒先張り切れば、下級生も負けずと張り切り候。学校三百の健兒中、不肖の熱と意氣と誠の通ぜざるものは一人も之無く、唯一人御し難きは己一心にて候」

この年七月、黒木ら一号生徒は軍艦にて日本海を巡航したが、途中萩に立ち寄り松陰神社始め旧蹟をたずねた。黒木はこう書いている。

「私の崇拜する忠臣志士は、先ず第一等に大楠公と吉田松陰先生でありま

す。非常に非常に一生忘れられない絶大の感銘だった。私も松陰先生に負けない。私の艦をして、私の周囲をして松下村塾たらしめてみせます」

対米戦争がいよいよ迫る同年十、十一月頃の黒木の感懐である。

「皇国最大の危急時到来致し候。乃ち愚弟も軍神として宇宙本然の姿に帰一一如となるべき日も間近かなることを兄上様にお告げ申し置き候」

「国難と叫ばれ候も外敵が特別に不可思議に強きには之無かるべく彼も我も人にて候えば、国難の所以は我が彼に優越せず、彼の尽す力に日本人の尽す力が、即ち至誠、愛国、殉国の真心の足らざりし影響にて候。過去数十年に亘りてのこの非国家的精神が一朝一夕に立ちかえるべくもなく、またこれを正しく導き得るには松陰先生ほどの人物を要し候に今時この人なく、また人々この人を拱手祈願すれども我が力を量らずして至誠のまにまに吾れ松陰たらんとするの人士之無く、及ばずとも松陰を生まんの気風更に生ずるなく、まだまだ日本は睡り国難はひらけず候。不肖現在の志確立せる所、この国難を救い至誠国民を警醒指導して義に就かんとの一念に之有り候」

わが国未曾有の危機、国難について黒木の認識がいかに深かったかがわ

かる。黒木は国難の国難たる所以は外なるアメリカの圧迫にあるのではなくわが内にあり、それは日本人の「至誠、愛国、殉国の真心」の不足にあるというのである。明治維新を成就し日露戦争に勝利した日本人の高貴にして剛毅なる民族精神は、大正期を経て昭和期に至って大きく弛緩し欧米思想が深く浸透、日本民族の伝統的精神になじまぬ「非国家的精神」が大正昭和期の学問、思想、社会一般に強い影響を与え日本人の自覚と国家観念を動揺させたことを黒木はのべている。的を得た鋭い指摘であった。黒木はかかる国難に對して心より敬仰する吉田松陰に習い至誠をもって「国民を警醒指導して義に就かん」と念願したのである。卒業直前、黒木はこう書いた。

「学業そのものの成績は不肖元より省ることを潔しとせず。全く私なき純正無影の精神練成に力め参り候えば普通にてさほど良好には候わねども、唯何人も不肖に一顧を置くは勿論、卓然何人にも許さざる不肖の忠義一心、破邪顕正の魂は絶大なる三年間の收穫にて候らひき。いずれ近々、人の人たる所以の何物なるかを天地に示すべく候」

### 恩師の感化

こうした黒木の精神形成に最も大き

な感化を与えたのが、東京帝大教授平泉澄である。平泉は文学部の国史学教授で当時令名高く、真に国家の前途を憂え国難打開に尽力した人物学問ともに卓越した学者であった。当時平泉の薫陶感化を受けた学生は少なくなく帝大生始め、陸海軍諸学校の学生並びに軍人に強い影響を与えていた。黒木は機関学校で平泉の講義を聴いて感銘、以後殉職するまで熱烈に師事し度々上京、親しく教えを受けた。黒木の恩師への便りを掲げよう。

「この度の東上の折、再び先生に親しく御訓導を承ることを得、満腔(心から)唯々先生の御厚情に感謝致し、先生のこの御厚情に對し奉りて必ずや報い奉ることあるべく深く深く心志に期し、更に更に道を明らめ軍人として胆を練り以て皇国の休戚(喜びと悲しみ)の大任を担い、真に陛下の御股肱とを以て吾が事となし、私儀の不断の念願たる皇国の、永遠無窮を確証致し、魂の尊皇の乾坤の真理の中に無窮に生さんべく不断の努力を致し、天命に桜花と咲き散るべく一層学問修行致すべく候」

一世の碩学と年若き海軍生徒は以後四年間魂と魂との美しい交わりを結ぶのである。

**建国以来最大の国難 大東亜戦争**  
昭和十六年十一月、黒木は海軍機関学校を卒業した。満二十歳である。すぐさま海軍機関候補生となり戦艦山城乗組を命ぜられた。そして翌十二月八日、予期していた大東亜戦争が勃発した。この戦いに黒木はいかなる覚悟で臨んだか。十二月末、父母に二通の便りを寄せたのべている。

「去る八日、大日本の天命たる来るべきもの遂に到来。…いよいよ奮いよいよ練磨、緊張を加え聖戦皇師(天皇の軍隊)の目的完遂相致すまでは、不肖死して護国の鬼となりても魂魄を留めて神国、父祖の国、魂の国、真理の国、皇国日本を無窮に擁護し奉る念願、然らざんばやまず、死する一死して鬼となると言ふも愚か、七生報国、生も死も念願には存せず、唯々皇国の無窮のみにて候」

「去る八日、皇国の天命と明治年来、国民存しく覚悟し期待致し居り候英米との乾坤一擲の決戦、幸いなるかな吾人の時代に展開せられ、その抱負の大なる満腔の欣快に堪えず候。勿論、皇国の興廃此の一戦にこれあり、事容易ならず、神武肇国以来の最大国難にして、長期の困苦に堪うる忍耐の力こそ最後の決と存じ候。この長期の忍苦は一に国民の団結、国民精神の振作一

致にほかならず候。…一方、一度敗れなば永久に世界より抹殺致さるべく候」開戦直後に詠んだ歌がこれである。

すめろぎの国亡ぶか興るかの  
戦なるぞ征けや益良夫

さらに昭和十七年初頭こう書いてい

「歴史の波と現在の政治を左右せる軍部の現状を眺むるとき、次の時代の危険を想いまた己み難く、心苦悶に堪えざるものこれ有り候」

この時わが国は真珠湾攻撃、マレー沖海戦そしてマレー・シンガポール、インドネシア、フィリピン等で陸海軍とも連戦連勝、破竹の進撃を続けているにもかかわらず、黒木はこの戦いの前途を厳しく見詰めていた。この戦いは「英米との乾坤一擲の戦い」であり、「神武肇国以来の最大国難」であるがゆえに、もし敗北するならばわが国は「永久に世界より抹殺」されることになる至難の戦いであるを覚悟していた。この戦いの困難さと大東亜戦争の持つ重大な意味を、この若さで黒木ほどよく認識していた者は稀であった。

## 天下一の分隊士

黒木は昭和十六年十二月、戦艦山城の分隊士となり分隊長七十余名を預る長となった。分隊士として黒木はいか

に勤めいかに部下に接したか。上司たる機関長宅和進中佐はこうのべる。

「黒木君は卒先窮行ということに徹底しておりました。何事でも部下の先頭に立ってやる。部下にやらすことは必ず自分でやりおさせる人でした」

軍艦内では起床すると直ちに全員が甲板に出て体操を行うが、黒木は寒風吹きすさぶ中で真っ先に上半身裸となり部下にも下着を脱がせ汗が出るまでやらせた。ある友人はいう、

「寒風肌を刺し黒潮空を舞う厳冬と雖も戦艦山城の甲板には早朝より裸体にて体操指導に専念する兄の姿を望見することが出来た。兄の指導振り、その親身も及ばぬ温愛の程は常に部下尊敬の的であった。兄は一番早く起きる兵よりも早く起床し、一番遅く就寝する兵よりも更に遅く寝るのをその務めとした」

黒木は部下の指導、教育に骨折りを惜しまず全力を尽した。機関科の仕事は算数、計算の知識が不可欠だったから、黒木は算数の出来ない部下に、任務を終えた夜間に教えてやった。妹の教子にこうのべている。

「小学校を卒業してから既に数年、ほとんど算術を忘れていた。そこで分隊長（黒木）はこれを導き器用な手で空箱の机をつくり小さな黒板も掛けた

て、兵隊の兄さん代りになって始めた…。兵隊さんは十七・八から二十三・四までの若年兵で、これらの人は一日中実におびたらしい業務と雑務がある。また戦争の待機姿勢で毎日毎日暮らしているの当直勤務も大変疲れることばかり。しかし兵隊さんの向学心は中女学生がなまじっか英語や数学を習うのと違って、どうしてももっとより一層の仕事をするのに、あるいは自分で深くつっこんで機械を考えるときにどう

しても必要になって学ぶのであるから、この向学心はいじらしいものである。一日中疲れ切った夕の七時半より一言も洩らさじと膝と膝をぎっしりにつめ、『ノート』を握って『分隊士分隊士』と聞き入る真剣さ。自分も此の可愛い部下兄弟の為に、何もかも投げ出して犠牲になってもよいような勇み立つ感激である。否ここに本当の人間博司兄さんの命が光り輝いて来るように感ずる。朝は兵隊さんと共に起き心からの敬礼を交し激励し、朝も昼も兵隊さんと一緒に仕事に油に煤にまみれて楽しみ、昼食は一緒に食べ床も一緒にとる。兵隊さんも『分隊士となら死んでもよい』と叫んでくれる。自分もそれ以上の気持、兄さんの魂を生命を兵隊さん〇〇名（七十余名だが伏せている）に植え変える決意でやっている。

これが兄さんの理想であり教育の真であると信ずる」

黒木の言葉は後世の我々の魂を揺さぶる。吉田松陰が野山獄中で囚人たちに深く同情し書を講じた逸話を想い起こされる。黒木という人物の真情がここにある。「この可愛い部下兄弟の為に何もかも投げ出して犠牲になってもよいような勇み立つ感激」の持主の黒木に対して、部下は「分隊士となら死んでもよい」と慕ったのである。部下の悦びと励む姿が目に見えようである。

黒木は岐阜県高山で少年時を過ごした広瀬武夫を海軍軍人の手本として深く尊敬してやまなかった。部下を親愛することに於いて黒木は広瀬と全く同様であった。このほか黒木は部下の為に身銭をきりやさしく書かれた偉人伝や修養書を買って読ませた。また部下の中に老母をかかえる者、扶養せねばならぬ家族がある者が二人いたが、黒木は毎月ありつた金の金を二人に与えて送らせた。だから黒木はいつも蓄えが一文もなかった。このような黒木に対して部下、同輩は勿論、上司もまた信頼してやまなかった。黒木は昭和の広瀬中佐といってよかった。宅和機関長はいう。

「黒木君は身を持つること極めて謹

厳、特に礼節に厚く、上長に対する敬礼は全く徹底しておりました。一事が万事、上長に対する態度、動作、言語、よくもあんなに訓練されたものだと感じする事が多くありました」

昭和十七年五月、黒木は父にこう伝えた。

「近頃最も悦ばしき事、一は本艦の初任下士官百数十名集め、選ばれて皇道精神講話を致させて戴き申し候。多くの感銘者を得候。二は部下が心より生死を委せ、『天下一の分隊長』と勇み励みくれ申し候」

同年六月、黒木は晴れて海軍機関少尉に任ぜられた。この時いまだ二十歳である。

**特殊潜航艇員志願**

未曾有の国難に対して軍人としていかに最善を尽すか。もとより生還を期せざる黒木は最も死に甲斐ある働き場所として潜水艦乗組を強く願った。黒木は開戦劈頭、真珠湾において九人の軍人が特殊潜航艇をもって攻撃し壮烈な最後を遂げたことに深い感銘を受けていた。黒木は宅和機関長に潜水艦乗組の志望を度々要請していたがそれが許され同年八月、広島県大竹にある海軍潜水学校に入学した。山城を退艦する時、分隊長は別れを惜しみ男泣きに

泣いた。後にある軍人が黒木に語った。「泣いて別れを惜しむことは海軍生活ではほとんど見られないことだ。そういうことはよほど信頼されている証拠であって珍らしい。泣かれるなんて貴様は本当に仕合せな奴だ」

その頃黒木が詠んだ歌がこれである。

国を思ひ死ぬに死なれぬ益良雄が魂留めて護らんとぞ思ふ

黒木は入学直後、再び萩を訪れ松陰神社に参拝し、身命を捧げ魂を留めて祖国を護り抜かんとした吉田松陰に続く覚悟を新たにされた。特殊潜航艇乗員を選んだ己れの決意を黒木は兄寛弥にこう伝えた。

「今や殉皇護国の舵を直接に取るの身、皇国を無窮に護り奉るべく候。国を思ひ斯くすればよしと思ふこと己が身以て先ず示さなむ」

恩師平泉澄には次のように書いていた。

「私儀今回多年本懐の潜水艦の乗組たる事を得。身の如何はともあれ、尊皇即殉皇の吾人の天命には変る処これなく、先哲の大楠公には及び奉り得ざれ候。近く佐久間艇長、あるいは広瀬中佐、あるいは九軍神の魂をば継承せんと念願仕り候」

黒木は一ヶ月半学び、九月十五日潜水学校を卒業した。そのあと黒木はか

ねて心に期していた特殊潜航艇員を志願するのである。従来特殊潜航艇員は兵科出身者に限られ、機関科出身者は役割が異なるので資格外だった。しかし黒木は決してあきらめず再度志願書を出した末、十二月ようやく認められた。潜水学校指導教官森迫勝美中佐はこうのべている。

「数回家に訪ねて来てくれたが、国を憂うる彼の情熱には全く圧倒されるほどであった。彼は在学中、甲標的(特殊潜航艇のことを海軍内ではこうよんでいた)乗りを終始熱望してやまず、樋口校長にも何回か頼んでいた。うであった。というのは当時甲標的乗りは兵学校卒業のものに限られていた。なかなか実現が困難だったからだ。しかしとうとう彼は目的を貫徹した。自分の信念を貫くための不屈不撓の努力もさることながら、その間に処し常に謙虚であったことには全く頭が下った。」

こうして黒木は機関学校出身者として最初の特殊潜航艇乗員となり、十二月訓練部隊に入った。当時の特殊潜航艇は一人乗りではなく数人乗りの小型潜水艇で潜水艦の背中に搭載されて運ばれ、攻撃目標に対して至近距離から放たれる特攻兵器であった。人間魚雷回天は一人乗りの最小の特殊潜航艇と

いう究極の特攻兵器だが、やがて黒木がこれを創始するのである。念願叶った黒木は昭和十八年正月、「尊皇遺言」と題する文を書いたが、全文血を以て綴った。

その一節は次の通りである。

「嗚呼大日本は神国なり。神国危うからんとす。乃ち先哲志士切々悲願の声を聞く。書を読まざれば誰か克これを知らん。秋に今皇軍死戦、神国危し、如何せん。即ち先哲に聞く、一死奉公と。正に征きて必ず還らざるの死を以てせば回天(国家の衰退を回復すること)の大効何ぞ成らざらん。時に特殊潜航艇は天賦の利剣なり。平生の志乃ち決す。即ち昨春来熱願して暮秋に叶う。ああ皇の為命死すべきの悦び今日この心に極る。それ天皇に帰一し奉らんとす。尊皇は即ち殉皇を翼求(願い求めるの意)す。況やこの挙、武人の本懐なるに於ておや」

戦局が不利に傾き神国日本存亡の危機が刻々と迫りつつあったとき、黒木は自己の一死奉公を以て祖国を救う回天の勤めを果さんとしたのである。呉の対岸倉橋島におかれた特殊潜航艇訓練部隊において、黒木はこれまで無縁だった航海、水雷、艇の操縦、戦闘技術等につき一心不乱に学んだ。

回天は一人乗りの最小の特殊潜航艇と

## 血書「鉄石之心」

特殊潜航艇員として真剣に訓練を続けた黒木は戦局と祖国の現状を憂えた。

伊はそむき独は敗れん物なけん

はづきながつき近きを如何に

これは昭和十八年二月、黒木が恩師平泉澄にあてた手紙の中の一首である。イタリアが降伏脱落しドイツが敗勢に向う大分前のこの時期に黒木はこれを見通すとともに、秋頃わが国が物質欠乏状態を迎えること推測している。平泉はまだ二十一歳の黒木の「神智明察に驚嘆敬服せざるを得ない」と後年のべている。また同時期、黒木はこう詠んだ。

今や今死もて仇うつ他に何

皇国護る道あらめやも

黒木の目にはこのまま推移するならばわが国は敗北滅亡に至るほかないことがはっきり見えていたのである。同年四月、平泉澄にこう書いている。

「私儀も誓って死に至るまで先生を仰ぎ道統を謹み承け継ぐ正字を心掛け、

一步にて真実の日本人の境域に近づき以て一死留魂、醜の御楯のゆくべき道により、皇国を絶後に猶護持仕りた候。…この際私見に陥ること最も恐しく唯々謹みて先哲の伝えられし候道義を先生に仰ぎ奉り、何とか正しき道

統に副い得て皇国護持の一石たらんこと静思黙座の念願血涙にて候」

同年五月、海機の四号生徒の時の先輩二号生徒の親友原田周三にこう語った。

「海軍の現状、焦燥と不安のみにして大局に徹底せる勇断なし。特殊潜航艇の使用法然り。艇の改造然り。今日、必死の戦法の外なし。…必死の戦法さえ採用せられ、これを継ぎゆくものさえあればたとえ明日殉職するとも更に遺憾なし」

黒木は殉職するまでの一年半ひたすら猛訓練と骨を刻む自己修養につとめた。黒木は昭和十八年四月より翌年三月までの一年間、「鉄石之心」と血書した標題の日記を全文血を以て綴った。その日その日最も心に期する言葉を短かく精根こめて記したのである。その一句をあげると「自爆必成の任、皇国興廢の責我に在り」

### 特殊潜航艇改良への尽力

昭和十八年六月、海軍中尉になった黒木は「甲標的」といわれた特殊潜航艇の搭乗訓練に励みつつ、潜航艇の改良に全力を尽した。従来の甲標的甲型は艇内に自己発電装置がないため航続距離が短い難点があった。そこで発

電機を備えた甲標的乙型が造られるが、その際建設的かつ有効的意見を出し乙型完成に最も貢献したのが黒木である。

乙型は全長二十五メートル、五〇トン、炸薬量三百キロの魚雷二本を積み乗員は三名。

出来上った乙型は実験し使用に堪えるか否か試されるが、その実験乗員を命ぜられたのが黒木であった。この様な小型潜航艇の中に閉じこもりこれを操縦かつ戦闘することは従来の潜航艇でも相当困難であった。発電機をのせている乙型はその煙や騒音のため長時間艇内にいることは常人に耐え難いと考えられた。またどこに性能の欠陥がひそんでいるかしれなかった。それは実際人が乗って試してみるほかにない。従って実験中に命を失う可能性が少なくなかったのである。

性能試験が始まる前日、黒木は兄弟子夫人に「今度は生きて帰れるかどうかわかりません」と挨拶している。試験は七月三日から五日間続いた。黒木は最終日の長期航走において、撰氏五二度の艇内で三十七時間頑張り抜いた。性能試験は無事終了した。このあと黒木が同乗して他の乗員の訓練が行われた。乙型は甲型に比べ操縦がむづかし

く危険であったため、連日息詰まるような訓練が続いた。だがしかし、黒木はこの改良された乙型にも決して満足していなかったのである。それは乙型の魚雷炸薬量三百キロでは戦艦や空母等の大型軍艦の撃沈が不可能であったことと、潜航艇が母港に帰還することを前提としている為、待っている母港が敵にみづかり攻撃される恐れがあったからである。

黒木はさらに改良を重ね丙型、丁型潜航艇に取り組んだ。ことに蛟龍とよばれる丁型はほとんど黒木の力によって出来た。黒木ら乗員の意見を聞き実際に艇を作り上げるのは呉海軍工廠の技術士官だが、親友だった緒明亮作技術大尉はこうのべている。

「この実験の結果、特潜はさらに改良せられ終戦当時の蛟龍となった訳ですが、黒木は当時の体験から蛟龍の基本計画に際して極めて適切な数々の助言をしてくれました。楕円形のコックピット（操縦席）兼用の司令塔、飛行機の如きガラス張りの風帽、操縦室内の艤装、機械室の装備等は氏の設計そのままです。何事にもあくまで研究的な態度で納得ゆくまで突込んでゆくという性分でしたから、単なる思いつきと違ってその提案は理路整然、思慮周到、技術仲間がよくたわむれに『兵科士官には惜しい』（黒木は兵科でなく



機関科だったが、特殊潜航艇搭乗員になつたので事実上の兵科将校だつた)等と陰口をきいた位でした。蛟龍の基

本計画の原案を私の手許に送つてきたことも三度に及びました。激務の余暇、重量計算から強度計算まで只一人でやつてのけるのはいかほどの勉強と努力だつたでしょう。感に堪えぬ。私が所持の高等造船学の参考書を贈つて、『お株を取られそうだ』と笑つたことがありました」

この戦いに敗れて亡国となることを何としても阻止せねばならぬという必死の思いが、黒木をしてそうさせたのであつた。そして少年時、船が大好きで数学や技術が得意であつたことがこゝうして生かされたのである。

### 血書嘆願

黒木は特殊潜航艇の改良において研究と実際の運転双方に先頭立って心血を注いだ。いかに潜航艇を改良したところで従来の特潜攻撃のやり方ではさしたる効果が上がらず戦局を挽回することは不可能と感じていた。改良されたものの攻撃力はなお不十分であつた。そこで敵への攻撃効果が大きい攻撃手段を求めて最終的にたどりついたのが人間魚雷による特攻であつた。一五五〇キロもの炸薬を詰めるこの魚雷

は一発でいかなる大艦をも止めることが出来る。ただしこの魚雷を操縦する人間は魚雷もろとも吹き飛び生還はありえない。しかしこの特攻以外に戦局の打開はありえぬとの信念のもとに、昭和十八年十月黒木は上京し海軍軍令部へ人間魚雷採用を血書を以て嘆願したのである。だが軍令部は生還の見込みなき特攻兵器を不可として却下した。黒木は海軍中央の態度に落胆し痛憤せざるをえなかつた。原田にこゝう語つて

「皇国の安危今日に決する時、真に時局を憂ひ責任を知る者の態度に非ず。誠意と熱情を披瀝すればするほど却つて嘲笑せんとす。上に立つ者として部下を死に赴かしむるあたわずとも、むしろ部下の決死の懇願は涙をもって許すが将たるの道ならずや。わが行くべき道は唯戦うのみ、最後まで戦うのみ」

黒木は人間魚雷による特攻をどうしても実現せんがため、ついに割腹自決を以て海軍当局に進言せんことを覚悟、平泉澄にその是非を問うた。平泉は懇諭して固くこれをとめた。だが素志の変わらぬ黒木は昭和十九年五月、「急務所見」と題する意見書を全文血を以て綴り、黒木をよく理解する先輩島田東助技術少佐を通して翌月、海軍当局へ

提出した。人間魚雷採用への黒木の肺腑の底からの叫びであつた。黒木は冒頭でこゝうのべている。

「大日本は神国なり。皇国の大義、万古神勅に定まり、大義の国体千歳忠烈を生むと雖も、臣民茲に感奮して自ら義烈に力むるなくんばいづくんぞ能く皇国を無窮に保せんや。今日の危急言うべからず。明日の変転察すべからず。未だ聖慮を安んじ奉ることを得ざる、嗚呼臣が罪誅に当る。臣既に死すべし」

次いで黒木は「回天護国の道」として直ちに取るべき四つの対策をあげる。第一「死の戦法に徹すべき事」第二「天下の人心を一にすべき事」第三「陸海軍一致すべき事」第四「緊要の策を速断断行すべき事」である。黒木は第一「死の戦法に徹すべき事」において、皇国護持のため今や「必死必殺の死の戦法」を取るほかなきことを力説、航空機及び人間魚雷による特攻戦法を直ちに採用することを強く訴えている。黒木は人間魚雷による特攻だけを考えていたのではなかつた。敵戦力を減殺する為には、航空機による方が効果は大きいのである。黒木はまず人間魚雷による特攻を自ら敢行することにより、陸海軍あげて航空特攻に立ち上がらせようと切願したのである。

黒木は人間魚雷の採用が決定したあと友人にこゝう語つてゐる。

「勿論俺も(当時人間魚雷はこゝうよばれた)が決定的なものになるとは思つていない。がこゝまでくれば俺がもし参つても(死んでもの意)大丈夫ある程度の役に立つ兵器として発展すると思う。仁科(閔夫中尉)もいることだし。しかし何といつても飛行機さ。飛行機の連中が俺と一心になつてくれたら文句はないのだ。むしろその方が目的とも言えるのだ。量と速力の世の中だからな」

黒木の思いは唯一つ「皇国の護持」であり、その為の唯一の道が今や海と空からの特攻による「死の戦法」以外にないといふ固く信じたのである。

### 人間魚雷採用の決定

黒木から「急務所見」の血書を預かつた島田はこれを平素師事する平泉澄に持参し意見を問うた。平泉はこれを高く松宮殿下の台覧に供すべきことを指示した。「急務所見」は高松宮殿下から竹田宮並びに東久邇宮にも回覧された。平泉は「急務所見」の全文を写し取り、その奥書にこゝう記している。

「徹頭徹尾血書にて筆勢雄渾湧くが如く迸るが如し。忠君の至誠神人を感じせしめ、護国の悲願天地を振盪(激

しく振り動かすこと）するものといいつべし」

後年平泉はこう語っている。

「この建白書は始め島田東助少佐に寄せられました。処で島田さんはどうしたらよいかというので私の処へ持って伺いに来られました。私はこれは重大であると考えて第一に高松宮殿下の御台覧に供しました。それから竹田宮が台覧になり、東久邇宮にも見せたいからと仰せになり、そこへも回された筈であります。海軍次官が私に、『海軍省で責任を以て保管します』というので私は、『死蔵してもらっては困る。誰と誰には必ず見せておいて貰いたい』と指名しておいた。だから大西（瀧治郎）中将も見ている筈です。この建白書は特別攻撃隊に対して大きな役割をした」

黒木の決死の至誠はついに海軍中央を動かし、六月海軍は人間魚雷の採用を内定した（正式に兵器として採用されたのは八月一日）。常に黒木と語り合った原田は当時の黒木の言葉をこう書き留めている。

「六月、『現戦局に対し急務所見』各部に提出す。終に軍令部、艦本（海軍艦政本部）賛成せり。仮称人間魚雷戦法採用と決定せり。且下着々準備中。戦果を求めず体当り戦法の完成を求め

るのみ。日本の道ここにあり。国難打開の道ここにあるを身を以て実践せんのみ。航空方面にこの採用を願う」

「問題は全く人にあり。決死捨身の覚悟なきにあり。そのうち何とかなる、最後の時はやると樂觀して怠慢なるにあり。国民然り。特に中央の怠慢は国賊というの外なし。戦局今日に至りし所以、全く物にあらざりにあり」

実に重要な黒木の指摘であった。戦争の勝敗を決する最重要素は数字に表される国力軍事力ではなく、結局人にあることは古今の歴史が指し示すところである。わが国がアメリカに敗れた最たる理由は、政治軍事の最高指導層に真にすぐれた人物がいなかったことにつきる。政治家はいうまでもなく陸軍にも海軍にも日露戦争時のごとき傑出した首脳、将帥が少なかった。わが国体を護持する為に絶対に敗れまいとする大局に立った戦略を立てかつ戦い抜く鋼鉄の信念と卓越した統率力をもつ将帥が乏しかった。黒木はこれを痛憤し（「海軍）中央の怠慢は国賊というの外なし」と嘆じ、戦局が不利に陥つた原因は「全く物にあらざりにあり」と断じたのである。まことに至論である。黒木は日本が惨敗を喫し国体の破壊を招くことを何としても阻止する為、

必死必殺の特攻作戦をもっと早く少く

とも一年前から行うべきと思い続けたのであった。同年五月、黒木は海軍大尉に進んだ。

### 黒木の姿こそ現世の神

黒木が魚雷をやや大きくしたものに人間一人が乗って攻撃する人間魚雷を思いついたのは昭和十八年の秋頃である。黒木は後に盟友仁科関夫中尉に「魚雷を知るの遅きは私の不覚」といっている。人間魚雷の建造が始まった頃、この建造に関わった呉工廠の一技術士官はこうのべている。

「いよいよ本気になってこの魚雷が計画される事に決まり、何回となく会議が開かれた。やゝ血の気を引いた白い顔を緊張させながらこの決戦兵器の絶対必要を説き来り説き去る彼の姿は私に異常な感激を与えた。本魚雷に脱出装置の必要な事を真摯に主張した一瞬の感動は恐らく私の生涯での最も印象深い思ひ出の一つであろうと思う。設計が細部にわたるに従い自分は彼と接する機会が殖えていったが、そのたびごとに彼の高潔な人格に尊敬の念を深めて行った。祖国の急を念うからとはいえ、全く死を超越して『還らざる突入兵器』の実現に淡々と従う彼の姿こそ現世の『神』ではないかとさえ思った」

た」

また一友人はこういう。

「兄は近くの呉工廠は勿論、軍令部、軍務局、艦本等を走り廻って、その意図するように④（人間魚雷）の改造実現に努力した。その熱情もった活躍

は高松宮のお耳にさえ達し遂に実現したのであった。兵器の完成は勿論、訓練地の選定、訓練様式の具体化、人の選定、そして訓練の指導、神特攻隊（回天特攻隊のこと）の壮挙、すべて兄の熱情の賜である。どんな依情地な人でも風変りの人でもいわゆる苦手な人でも兄は敢然と飛び込んでいった。そうしてその心奥よりほとぼり出る熱情、憂国の至情を以て説き伏せた。説き伏せずにはおかなかったのだ」

呉工廠電気部の一員はこういう。「実際黒木にかかったらどうにもならなかった。あいつに何度も何度も足を運ばれて涙を流して頼みこまれたら、他にどんな急な仕事があるうとも凡ゆるものに優先してあいつの言うことをやってやらすにはいられない気持ちになるのだ。工廠がぐうたらだとか何とか言うけれども随分手に余るような大きな仕事次から次へと来るのだもの。結局熱がものをいうのだ。とにかくいつはどこか常人と違った何かをもっていた。あれが本當の偉さというものでらう」

だろ

人間魚雷の採用が決定して黒木が殉職するまでわずかに三ヶ月間である。

人々が黒木の気高い姿に神の如き崇高さを見たのは不思議ではなかった。黒木は同年三月父母あてにこう書いている。

「研究も進み愈々励みおこり候。幼少より御訓し御教え下されし忠義尊皇のこと年と共に愈々堅く、省みては唯最も有難くうれしく光々しく感謝仕り候。三つ子の魂百までとか。総て尊皇忠義のこと父母様の御蔭と最も有難く存じ奉り居り候」

### 回天の訓練開始

昭和十九年七月、ようやく人間魚雷回天の試作艇が出来上がった。長さ四・七五メートル、直径一メートル、重さ八トン、耐圧深度八十メートル、上げ下げ自由な一メートルの潜望鏡を持ち、潜航、浮上、変針、変速が自在、水中最高速度三十ノット(時速五十五キロ)、頭部に一・五五トンの爆薬を備え、一発でいかなる巨艦も瞬時に撃沈しうる一人乗りの特攻兵器である。

この試作艇に初めて乗り性能実験を行う者は無論、黒木である。従来にならぬ全く新しい特殊潜航艇だからどこにどんな不備、欠陥がひそんでいるか、それ、不測の事故が起る可能性が十分

あったが、黒木は搭乗実験を成功させた。以後黒木と二番手仁科閔夫中尉による連日の訓練が続いた。やがて九月一日、徳山湾の大津島に新たに回天訓練基地が開設され、黒木と仁科が指導教官となり搭乗員の訓練が開始された。どちらかが狭い操縦席に同乗、そばで指導するのである。当時の黒木につき友人はこうのべている。

「九月上旬、徳山港外、大津島に訓練基地開設と決定した時兄等らの喜びは実に筆舌に尽し難いです。しかし実験開始当初より仁科君と常に話っておりました。

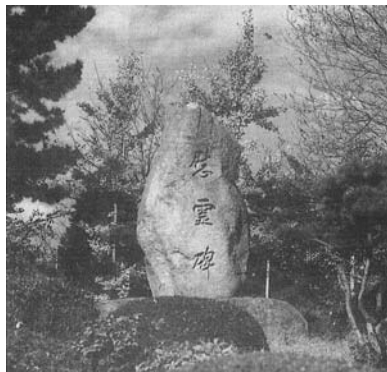
『この兵器実験中、きつとどちらかが殉職するは明かなり。残りし者は逝きし者の意志を継ぎ、訓練成った暁は必ず二人分の働きをなすべきなり』と」

黒木が最も親しく交わった機関学校先輩の原田周三は駆逐艦の機関長として戦地にあった。黒木は親愛してやまぬ原田をいつも「兄さん」、貴代子夫人を「姉さん」とよんでいた。黒木はもし結婚するならば夫人の妹を貰うつもりでいたほどの間柄だった。黒木が呉にある原田の留守宅を最後に訪れたのが亡くなる四日前だったが、夫人はこう語っている。

「黒木さんに最後にお目にかかったのは九月二日であった。しばらくお見

えにならなかつたので、もう呉を立つ前に(夫人は十日呉を引き払い故郷に戻る)お目にかかれないうちも知れなかつたので本当に嬉しかった。でもその日、黒木さんはいらっしゃると『長い間いろいろお世話になりました』としんみりおっしゃった。私はいよいよ黒木さんも御出撃遊ばすのかと胸一杯になって何も申し上げることが出来なくなつた。申上げなくてはならぬ事がたくさんあるような気がするの、『御成功をお祈り致しております』とのみや々と申上げた。 (続く)

### 光基地慰霊碑



所在地 山口県光市 市役所隣  
守護団体 光市連合婦人会  
建立 昭和35年 慰霊祭 8月13日  
由来記 この碑は、昭和20年8月14日の空襲によって殉職した、旧海軍工廠職員、特別攻撃隊員738人ならびに人間魚雷回天立した。(以下略)



靖國神社遊就館にある回天

陸軍八日市飛行場で出撃命令を待つ

## 特攻隊員・細井巖少尉の足跡

八日市郷土文化研究会事務局長 中島 伸 男

### ■沖繩戦と特攻

昭和二十年三月下旬、沖繩本島沖に

燃料補給、作戦命令待ちなどのためである。

艦船約一四〇〇隻、艦載機一七〇〇機という米軍の大機動部隊が姿を現した。米軍は三月二十六日、慶良間諸島に上陸し、ついでに四月一日、一八万三〇〇〇名が沖繩本島に上陸した。

昭和二十年六月十七日にも、陸軍特別攻撃隊「と二一九隊(殉皇隊・森本時也隊長)」および「と二二〇隊(醇誠隊・山内苞隊長)」の二隊一二機が翼をつらね八日市飛行場に着陸した。

沖繩本島には、牛島満中将のひきいる約七万五〇〇〇名の日本軍が配備されていた。牛島司令官が自決した六月二十三日まで、沖繩では一般住民をも巻き込んだ絶望的な抗戦がつづいた。

この二隊は、沖繩特攻に赴くため岐阜各務原飛行場を発進し、八日市飛行場に立ち寄ったものである。

日本側の戦没者数は、一般住民約一〇万名を含む一八万八〇〇〇名余と言われる。

しかし、特攻出撃命令が出ないまま、五日後に沖繩戦は終結しこの二隊の出撃命令は延期された。

本島での激戦がつづくなか、四月六日から沖繩本島沖の米機動部隊に対し、陸海軍は猛烈な特攻攻撃を加えた。六月二十二日まで二二九三機もの特攻機が投入されたが、これは太平洋戦争期間における特攻戦死者数三九一三名の六割を占める。

いつ特攻出撃の命令が下されるかも分からない状況のなかで、青春の日々を特攻訓練に励んでいた殉皇隊・醇誠隊の隊員たち。

このころ、陸軍八日市飛行場には鹿児島県知覧基地などを経て沖繩に飛ぶ特攻機が連日のように飛来していた。

あの大戦から六十年を経た平成十七年十一月のある日、「と二一九隊・殉皇隊」の隊員であり副隊長であった細井巖さん(大正十二年三月十八日生まれ)が、思い出の地である八日市を訪ねられた。私は元八紘荘の松浦友一さんのご好意で、八日市飛行場の「面影さがし」に出掛けられた細井巖さんに同行する機会をえた。また、松浦さん宅では、特攻隊員時代のさまざまな思い出話をお聞きすることができた。細井さんがまとめられた記録をもとに、お聞きしたお話を「特攻隊員・細井巖少尉の足跡」としてまとめた。

昭和十八年は、太平洋戦争の戦局が一気に日本側に不利に傾いた年である。二月一日にガダルカナル島を失い、五月二十九日にはアッツ島守備隊が全滅した。

政府はこの年の十月、「在学徴集延期臨時特例法」(学徒動員令)を公布し、理工学部以外の大学生などの兵役徴集延期制度を廃止した。そして、大戦で召集された現実もあって、細井さんは「祖国を守るためなら」との一途な思いで決断したのだ。

### ■陸軍特別操縦見習士官に応募

昭和十九年二月十日、陸軍特別操縦見習士官第二期生、二〇〇名の一人として細井さんは合格し、熊谷飛行学校相模原分校(神奈川県)でグライダー訓練を受けることになった。つづいて

昭和十九年二月十日、陸軍特別操縦見習士官第二期生、二〇〇名の一人として細井さんは合格し、熊谷飛行学校相模原分校(神奈川県)でグライダー訓練を受けることになった。つづいて

昭和十九年二月十日、陸軍特別操縦見習士官第二期生、二〇〇名の一人として細井さんは合格し、熊谷飛行学校相模原分校(神奈川県)でグライダー訓練を受けることになった。つづいて

昭和十九年二月十日、陸軍特別操縦見習士官第二期生、二〇〇名の一人として細井さんは合格し、熊谷飛行学校相模原分校(神奈川県)でグライダー訓練を受けることになった。つづいて

昭和十九年二月十日、陸軍特別操縦見習士官第二期生、二〇〇名の一人として細井さんは合格し、熊谷飛行学校相模原分校(神奈川県)でグライダー訓練を受けることになった。つづいて

昭和十九年二月十日、陸軍特別操縦見習士官第二期生、二〇〇名の一人として細井さんは合格し、熊谷飛行学校相模原分校(神奈川県)でグライダー訓練を受けることになった。つづいて

四月から七月までの四カ月間、児玉分教場（埼玉県）で、通称アカトンボ（九五式中間練習機）による飛行基礎操縦訓練を受けた。

ここで、適性に応じ戦闘・爆撃・偵察などのコースに分かれ、任地も中国・朝鮮・ジャワ・台湾そして国内各地にと振り分けられた。

■戦友が特攻出撃

細井さんは、第四〇教育飛行隊に所属、戦闘機操縦者としての基本戦技教育を受けるため、昭和十九年七月三十一日、知覧飛行場（鹿児島県）に着任した。当時、知覧飛行場はまだ特攻基地にはなっていなかった。

知覧では二式高等練習機「キ七九甲」による操縦基本戦技教育を受け、十九年十二月十日、菊池飛行場（熊本県）に移動した。

翌二十年二月十日、陸軍少尉に任官。戦局は急を告げていた。二月十九日、米海兵師団の第一波が五〇〇隻の上陸用舟艇で硫黄島への上陸を開始した。

三月十日、マリアナ基地を出撃したB29三四四機が東京を無差別空襲、約二〇〇〇トンの焼夷弾を投下し十万人近い市民が犠牲になった。太平洋戦争は終末期の様相を呈していた。

米軍が沖縄に上陸する直前の三月十六日、細井さんの所属する第四〇教育

飛行隊で陸軍特別攻撃隊（第七八振武隊）が編成された。隊員は特操二期生八名ら十一名で、飛行訓練を受けてようやく一年一ヶ月余が経った人たちがかりである。細井さんと同期でベッドも隣同士であった親友の内藤寛次郎少尉（栃木県出身）も隊員の指名を受けた。細井さんは、内藤少尉と「俺も、すぐ、あとにつづくことになる」と語り合った。内藤少尉ら特攻隊員は翌日から集合行動となり、宿舎も給与も特別扱いで、以後、細井さんが内藤少尉と会うことはなかった。

菊池飛行場では、グラマンの襲撃があると回避のため飛行場を飛び立ち、空襲が終わると飛行場にもどるという状況であった。昭和二十年四月十日、細井さんの所属する第四〇教育飛行隊はグラマンの攻撃が激しくなった熊本

県菊池飛行場から各務原飛行場（岐阜県）に移動した。

五月六日、各務原の第四〇教育飛行隊では第二回目の特攻隊（と二二六隊・六機）が編成され、同期の戦友たちが中継基地の目達原飛行場（佐賀県）に向け出発した。そんな中で細井さんは、菊池飛行場を出発した内藤少尉が、五月二十五日に沖縄西方洋上の敵艦に突

入し戦死したとの知らせを聞いた。

■殉皇隊副隊長の下令

六月十日、第三回目の陸軍特別攻撃隊二隊が編成された。と二一九隊（殉皇隊）・と二二〇隊（醇成隊）である。乗機は、これまで飛行訓練用に使用していた二式高等練習機を特攻用に改装したものであった。細井巖少尉は、このとき殉皇隊の副隊長に指名された。二つの隊のメンバーはつぎのとおりである。

と二一九隊（殉皇隊）  
隊長 森本時也少尉 特操第一期  
副隊長 細井 巖少尉 特操第二期

磯谷 彰少尉 特操第二期  
岡本英介少尉 特操第二期  
鈴木 正少尉 特操第二期  
桑田計泰軍曹 予備下士官

と二二〇隊（醇成隊）  
隊長 山内 苞少尉 特操第一期  
副隊長 河西督郎少尉 特操第二期  
大谷正雄少尉 特操第二期  
宇塚二郎少尉 特操第二期  
月橋一夫少尉 特操第二期  
寺西清次軍曹 予備下士官

細井さんは、特攻隊員としての指名を受けた当時の模様を次のように回想される。

呼出しがあり部屋に行くと、部隊長は「新しく二隊を組むよ。お前は、と二一九隊だよ」と淡淡と話された。

「日本の国のために命を捧げる」という気持ちは、特別操縦見習士官に合格したときからすでに出来ていた。すでに同期の仲間も次々と特別攻撃している。「順番がきたんだな」との思い。悲壮感を通り越した境地であった。そして、「自分が犠牲になって、親や兄弟を守り国を守ることができたら何より」「故障の少ない操縦中の飛行機が貰えるだけでも幸せだ」という気持ちだった。各務原に残留した同期の特攻隊員の搭乗機は「赤トンボ」であった。赤トンボでの特攻攻撃はほとんど戦果の見込みが少くない。しかし、教育隊によって赤トンボ以外に搭乗する飛行機がなくなっていたのである。

細井さんたち特攻隊員に、「必中」と書かれた手拭いが一本ずつ手渡された。いよいよ敵艦に突入するというとき、額に締めるためであった。

細井さんは、特攻隊員として指名を受けたことは伏せて、東京の両親に「面会ができるようになった」と連絡した。早速、両親が各務原飛行場にきた。その日は両親とともに過ごし、いっしょに写真をとった。この世での最後となるはずの「記念写真」である。

両親は、細井さんが「特操」を志願したときから、息子もやがて戦死するであろうことは覚悟されていた様子で

あった。

六月十七日、細井少尉ら「と二一九・殉皇隊」「と二二〇・醇成隊」の十二機は特攻出撃のため各務原飛行場を九州基地に向け発進する直前、森本隊長に命令が入り殉皇隊は中継基地八日市飛行場に着陸するように、その旨森本隊長から隊員に伝達された。沖繩戦はすでに最終盤にさしかかっていた。ぎりぎりのところで特攻作戦が中止されたのである。

細井さんたちは、命令どおり陸軍八日市飛行場に着陸。ここで「待機特別攻撃隊」として、ふたたび特攻訓練の日々を過ごすことになった。

#### ■竹生島を敵艦に見立てて

八日市飛行場では、広大な飛行場の一角にテントと吹き流しをたて、ピスト（戦闘指揮所）を設けて訓練が行われた。

琵琶湖に浮かぶ竹生島を敵艦にみなし、島の手前まで低空飛行をつづけ手前で機体を引き上げて急降下し体当たりをする訓練や、瀬戸内海まで飛んで広島沖の沈没船に、同じように突入時をイメージしながらの低空飛行訓練などが行われた。

八日市・長谷野射撃場の布板を目標に急降下で機銃掃射を行い、急上昇する訓練もあった。このときは、腹巻き

を下腹に強く巻くことになっていた。

急上昇のとき全身の血液がすべて下腹部に下がるからである。いったん眼目が真っ暗になる。やがてすこしずつ回復し血液がのぼりはじめて、目が見えてくる。

機銃弾にはそれぞれ弾頭に色が塗ってあり、白布にその色がつくので誰の射撃がより正確であったか判定できるようにになっていた。

殉皇隊・醇成隊以外の隊も八日市飛行場で訓練を行っていたが、指揮系統が異なり他部隊との交流は全くなかった。そのため、どのような部隊がどのような任務を帯びて訓練しているのかは、全く分からなかった。

細井さんの記憶では、当時、八日市飛行場では三式戦（飛燕）六隊（一隊六機）が別に訓練を行っており、五式戦約三〇機の防空戦隊があったとのことである。

訓練用の航空燃料の不足を心配することはなかったが、同期の特攻隊員の話では、「他の基地などに不時着し燃料補給を受けるときは、思うように行かない」こともあったという。とくに陸軍機で海軍基地に不時着したときなどは、「ほかの基地でもらえ」といわれ、ガソリンを満タンにしてくれないことがあったともいう。

細井さんたち同期生の多くがカメラをもっていた。もちろん、飛行場での写真撮影は厳重に禁止されていたが、飛行訓練の現場では隊長と隊員のほかには誰もいないので、比較的自由に撮影ができた。部隊の写真班に内緒で頼むと、現像や焼き付けなどをしてくれた。

細井さんのアルバムには、終戦後、琵琶湖に突入し自爆した親友の河西督郎少尉と肩を組んだ写真が残っている。その写真には、二人の背後に翼を休める三式戦（飛燕）の姿と、その向こうに山並みが写っている。飛燕は他の隊の訓練機である。山並みは太郎坊山から瓦屋寺山にかけての稜線である。飛行場が開拓されさらに多くの住宅が建設された今では、この写真と同じ広々とした風景を見ることはできないが、山の姿だけはかつての写真と今とは少しも変わっていない。

飛行訓練が終わると、愛機を飛行場近くの畑の中の退避場に隠蔽した。両翼に整備兵がつき、道路を通り退避場まで移動する。途中、畑で農作業に励む老夫婦の姿があったという。退避場につくと、機体の上にサツマイモの蔓などをかぶせ機体をカモフラージュした。

雨などで飛行訓練ができないときは、

兵舎内で隊長を中心に操縦技術などのミーティングが行われた。「どうすれば、犬死にすることなく、見事、敵艦に突入できるか」「どこに当たれば、敵艦に少しでも大きなダメージを与えることができなのか」という研究に集中した。

訓練の合間に、細井さんは若い女性から慰問を受け血染めの鉢巻きを贈られている。指先を傷つけた血で描かれた日の丸、そして「必勝」の文字。裏にやはり血染めで「秀」の文字が書かれている。「秀」は、彼女の名前の頭文字なのだろう。べつに、短歌が書かれた木綿の布もある。

「明日も亦野良に急ぐ乙女われ武勲聞かたび眼がうるむ」

「若桜今宵待ちかね勇み立ち敵艦めがけ突き進むらむ」

この白布には、沖繩出身・久米八重と署名がある。

鉢巻きも白布とともに、若くして国に命を捧げる特攻隊員を思う乙女の一念がこめられている。

戦後六十年がたった。もう、それらの贈り主を探し出す手ではない。

八日市の町の写真館で殉皇・醇成両隊員が撮った集合写真が細井さんのアルバムに残っている。飛行服に身を包

み一人ひとりが軍刀をもっている。戦死したら遺影ともなる写真である。この写真館で撮ったものであったのか、細井さんの記憶はさだかでない。

### ■終戦の詔書

七月二十五日早朝、八日市飛行場にグラマン来襲の連絡が入り、その直後に空襲警報のサイレンが鳴った。細井さんは近くにあって防空壕に飛び込み、壕の入り口からいままさに展開されている空中戦を眺め上げた。視界が狭いので全体の様子は分からないが、グラマンが五式戦に追いかける逆五式戦がグラマンに追いかけるなど、混戦状態が展開されているのが分かった。グラマンは超低空で飛行場の上を飛んでいた。細井さんの搭乗機は九七式戦闘機を改良した訓練機である。いちおう機関銃一座を据えてはいるが、とうてい空中戦でグラマンと太刀打ちできる「しろもの」ではない。「日本もだめかなあ」という気持ちで細井さんのこのころの底に漠然と広がっていた。

八月、原子爆弾が広島と長崎に落とされた。各務原基地で細井さんたちの区隊長であった小野二郎中尉が、広島と長崎を上空から偵察飛行し、帰りに八日市飛行場に立ち寄った。彼は、細井さんたちに向かい、「お前ら、とんでもない爆弾が落ちて、ニッポンも大

変だぞ」と語った。

七月末と八月十三日の二回、細井さんは紀州沖への特攻攻撃準備命令を受けた。敵機動部隊が北上したという情報である。しかし、機動部隊はまもなく南下し、出撃命令は取り消された。沖繩特攻のときにつづいて、細井さんは二度「命拾い」をしたことになる。

そして八月十五日の終戦の日がきた。細井さんたちは部隊からの連絡を受け、飛行場近くの小学校で玉音放送を聞いた。

八月十五日か十六日の夜であった。宿舎である八紘荘近くの寺の境内で江州音頭が催された。森本隊長・磯谷少尉が軍服姿でその踊りの見物に出掛けたが、二人の姿を見た住民たちはどつと逃げ散った。なぜ、踊りにきていた住民たちは軍服姿をみて逃げたのだろう。この話を森本隊長から聞かされたことが、いまだに忘れられない出来事として細井さんの心に残っている。

それにしても、終戦直後にお寺で江州音頭が催されたというのはいへん珍しい話である。金念寺（金屋 二丁目）ならば、八紘荘に近い。森本隊長ら二人が訪れたのは、例年八月に行われてきた金念寺の「津鳴いさめ」の踊りだったのかも知れない。

### ■相次ぐ「自決」

八月十六日、殉皇隊・醇成隊の隊員十二名は、「飛行納め」として思い思いに八日市飛行場を飛び立った。細井さんは、同じ隊の磯谷少尉と編隊を組み琵琶湖から比叡山の上空を飛んだ。

比叡山頂に近い大津市山中町は磯谷少尉の故郷であり、村の人々の記憶に残る訪問飛行になったという。飛行場に帰ってから、河西督郎少尉が愛機とともに琵琶湖・竹生嶋沖に突っ込んだという話を聞いた。細井さんは殉皇隊であり、河西少尉は醇成隊だった。しかし、訓練は一緒であったし、二人とも仲もよかった。河西少尉はとくに純粹な人柄であった。それだけに、「敗戦」という現実がやはりつらく応えたのであろうか。あるいは、特攻出撃して国に殉じた戦友への思いが河西少尉を愛機での自決という道を選ばせたのであろうか。飛行場を飛び立つ寸前まで、河西少尉からは何一つそのような言葉もなく気配も感じられなかったという。

各務原飛行場からは、細井さんが戦技訓練を教えた東浩三少尉が、八月十七日に飛行場東南部の丘で割腹自決したとの知らせが入った。

河西少尉、東少尉

ともに強い信念をもった好青年であった。「生きていれば、戦後の日本復興にどれだけ役に立ったことであろうか」

と、細井さんは悔しい思いが忘れられない。

「特攻隊員たちをこのままにしておくと、みんな自爆するかも知れない」という心配があったためかも知れない。翌十七日、殉皇・醇成両隊員に大正飛行場（八尾市）に移動するよう命令が下された。殉皇隊六名、自決した河西少尉をのぞく醇成隊五名は、特攻機二式高練に別れを惜しみながら、トラックで大正飛行場に移った。

大正飛行場では、松林に隠された燃料管理などの雑務に従事し、八月三十日にそれぞれ郷里に戻った。

二度、三度の特攻出撃がいずれも中止になっての「奇跡の生還」であった。

### ■終戦直後の犠牲

昭和二十年八月十五日には、細井巖さんがともに特攻訓練に励まれた河西督郎少尉が竹生島近くの琵琶湖に突入、自決された。

秦郁彦著『八月十五日の空―日本空軍の最後』（文春文庫）には、昭和二十年八月十八日にも同じように陸軍八日市飛行場から飛び立ち浅間山腹に突入した西川俊彦中尉のことが紹介されている。

西川中尉は、細井さんと同じ時期に八日市飛行場で待機特攻隊として展開していた「二六八隊」の隊長であっ

た。陸軍航空士官学校第五七期生で弱冠二十一歳。

に抜粹する。

『八月十八日の朝早く、三式戦の離

陸音が聞こえた。「どここの隊か知らないが、朝早くからえらい張り切っているな」などと話し合っているところへ、

には「生きて辱めを受くることは、鹿児島の気風として帝国陸軍将校として誠に忍び切れませぬ。死して靖國の神々と共に永久に戦う所存です」と記された。

西川中尉は、八月十八日午前六時、愛機三式戦で八日市飛行場を離陸、生まれ故郷の長野県北佐久軍岩村田の上空を旋回、その直後に、浅間山外輪山の南斜面に突入し自決された。西川中尉は、突入の前に母校・岩村田小学校の校庭に遺書を投下した。遺書には、

終戦直後、陸軍八日市飛行場をめぐって河西少尉・西川中尉・内倉中尉の自決事件があったことは、あまり知られていない。

「ここで、独断、愛機を駆って太平洋に至り、はたまた浦塩に殺到し敵艦を沈むるはとも簡単であります。しかしながら、それは軽挙。皇国の再起して遂には世界の中心たりうることを固く信じつつ、愛機と共に我が浅間山頂に鎮まります」という趣旨が記されていたという。

「本土決戦」「一億玉砕」の時代が、「一億総懺悔」「平和国家」の時代へと大きく転換するなかでの、悲しい犠牲である。

#### ■戦後六十周年の訪問

二十一年五月、浅間山で父の手により西川中尉の遺骨が発見され、山頂に埋葬された。また昭和四十八年に、突入地点に墓碑が建設されたという。

戦後の細井巖さんは兵役前に在籍していた日本海洋漁業統制(株)に復職された。日本海洋漁業統制(株)のちに日本水産(株)となり、細井さんは日本水産で捕鯨母船に乗り組み、南水洋捕鯨に出漁し、また、陸上の総合工場に勤務するなど戦後の食糧生産に大きく貢献された。

(以上『八月十五日の空』による。この件は、枚方市・小松照さんからご教示いただいた。)

昭和三十八年八月、終戦後十八年目に元隊員が集まる機会ができた。隊員の一人である岡本さんの案内で、細井さんは森本隊長ら四人で各務原飛行場跡、八日市飛行場跡や八紘荘を訪ねた。

西川俊彦中尉の浅間山突入について、当時、やはり陸軍八日市飛行場で待機特攻隊の一員として訓練に励んでいた小林吉隆少尉(と一六九隊・特操第二期、昭和六十三年死去)の手記の中にも綴られているので、関連部分を次

戦後六十周年にあたる平成十七年十一月。

から飛行禁止となり整備隊の手によって点火栓が抜かれ、私たちは二度と飛ぶことができない身となってしまった。』

森本隊長・磯谷少尉・桑田軍曹が存

小林吉隆少尉(と一六九隊・特操第二期、昭和六十三年死去)の手記の中にも綴られているので、関連部分を次

八月十六日早朝には、浜松から八日市飛行場に移駐してきた第一航測聯隊の内倉光秀中尉一家五人が日野町の墓地で自決されている。内倉中尉の遺書



命であり、細井さんは、八日市飛行場跡や八紘荘の訪問を誘ったが、いずれも体調不良で細井さんだけの来訪となった。

今回は細井さんは奥さんとともに、住宅や工場の建ち並ぶ元の陸軍八日市飛行場の跡地を散策された。当時の飛行場を偲ぶものはほとんど何も残っていない。沖原神社ですら、往時とは大きく様子が変わっている。

布引丘陵に残るコンクリート製の掩体壕にも案内したが、この掩体壕は細井さんの記憶にはなかった。

「そうですね、当時、こんなのが造られていたのですね」

大腿で掩体壕の端から端までを歩き、二十四メートルはある。これなら、爆撃機も入るなあ」と、コンクリートのドームを見上げられた細井さんの横顔に、はじめてかつての特攻隊員の面影がよぎったのであった。



上州の快男子

小川 清大尉

元特幹一期生 深井 正昭  
平成十一年十月から二年間、余暇を  
求めては大東亜戦争・群馬県陸海軍特  
攻関係戦没者達芳録を作成すべく県内  
一円と、転居されたご遺族を尋ねて茨  
城、栃木、埼玉の各県を走り廻った。

小川 清海軍大尉のご遺族（高崎市  
藤塚町四一〇にお住まいの実姉飯沼フ  
ミ様）を尋ね、その人となりや経歴、  
事績などを伺い墓参したのは同年十一  
月二十二日とノートに記されている。  
墓参に際し、フミ様は自宅の庭に咲  
く黄菊を素早く手折り、墓地までご一  
緒してくださいましたが、強く印象に  
残っている。

清大尉は大正十一年十月二十三日、  
群馬県碓氷郡八幡村大字藤塚四三四一  
（現高崎市藤塚町）で父錦次郎さん  
の五人兄弟の末子四男として出生、村  
の小学校を卒業して県立高崎中学校に  
進み、更に早稲田第二高等学院から同  
大学政経学部を経て学徒出陣、海軍予  
備学生飛行科第十四期生。昭和十九年  
十二月任海軍少尉。

昭和二十年五月十一日から始まった  
沖繩戦第七次航空総攻撃・菊水六号作

戦に神風特別攻撃隊第七昭和隊員と  
して零戦爆装機にて鹿児島県鹿屋基地  
を同月同日〇六・四〇発進、一〇・〇  
四頃沖繩本島東方洋上に遊弋する第五  
八機動部隊米艦船群に体当り攻撃を敢  
行し散華。二階級特進。任海軍大尉）  
武勲は上聞の栄に達し、武人の鑑とし  
て全軍に布告され、正七位勲五等功三  
級金鷄勲章を賜った。

両親に宛てた最後の便り

『お父さんお母さん。清も立派な特別  
攻撃隊員として出撃する事になりました。  
た。思えば二十有余年の間、父母のお  
手の中に育った事を考えると感謝の念  
で一杯です。全く自分程幸福な生活を  
過ごした者は外には無いと信じ、この  
ご恩を君と父母に返す覚悟です。あの  
悠々たる白雲の間を越えて、坦々たる  
気持で私は出撃して征きます。生と死  
と何れの考えも浮びません。人は一度  
は死するもの、悠久の大義に生きる光  
栄の日は今を残してありません。父母  
上様には御健康に注意なされお暮し下  
さる様、なお又、皆々様の御繁栄を祈  
ります。清は靖國神社に居ると共に、  
何時も何時も父母上様の周囲で幸福を  
祈りつつ暮しております。清は微笑ん  
で征きます。出撃の日も、そして永遠  
に。』

昭和六二年五月靖國神社頭掲示よ

り）

辞 世

日本の本の子を見よや焰なす  
鉄火となりて体当りせん  
【無名戦士遺詠抄より 清 詠】

菩提寺 安中市板鼻 長傳寺  
墓 所 高崎市藤塚町 地区霊園  
ご法名 功德院義嶽清照居士

以上は平成十二年十月初版として出  
版した遺芳録と遺芳録資料に収録して  
ある清大尉に関する文言である。

平成十三年四月一日付本県地方紙  
「上毛新聞」に衝撃的な記事が載った。  
特攻隊員の遺品56年ぶり高崎の遺族  
へ。米空母の元乗組員「特攻機の残が  
いを調べ発見、保管」と大きな活字の  
見出しである。

第二次大戦末期の一九四五年五月十  
一日沖繩沖の太平洋上で米空母バンカー・  
ヒルに体当りし戦死した神風特攻隊の  
操縦士、小川清さん（当時（二二））  
が持っていた懐中時計や手紙などの遺  
品がこのほど、約五十六年ぶりに高崎  
市八幡町の遺族に手渡された。

戦死した特攻隊員の遺品が返還され  
るのは極めて異例。

遺品を持っていたのは同空母元乗組

員で、昨年十一月に七十二歳で死亡し  
た米カンザス州のロバート・ショック  
さん。孫のバークさんによると、バン  
カー・ヒルは特攻機二機の体当りを受  
けた。ショックさんは艦内に突っ込ん  
だ特攻機の残がい調べ、戦死した小  
川さんの遺体を発見。身に着けていた  
時計や写真、手紙など持ち帰り保管し  
ていた。

バークさんはショックさんの死後、  
通訳の協力などを得て小川さんの姪の  
幸子さん（六八）らを探し出し、三月  
二十七日、訪米した幸子さんらにサン  
フランシスコの日本料理店で遺品を手  
渡した。遺族は「日本に帰り次第、墓  
前に報告したい」と話していた。

特攻機の体当りを受けたバンカー・  
ヒルでは乗組員ら四百人近くが死亡し  
たが、辛うじて沈没は免れた。  
（サンフランシスコAP共同）

上毛新聞社では平成十四年八月、終  
戦五十七年の記事として「ふたりの特  
攻兵」を取材、その一人に小川清少尉  
（大尉）の米空母への体当りと帰って  
きた遺品を特集して読者に紹介した。  
内容の一部は次のような記事である。

『ロバート・ショックさんの葬儀が  
終わった夜、ロバート家に集まった遺

族は思い出にふけり語り合っていた。孫のダックス・バーグさんは、この頃、祖父から二度、バンカー・ヒル・アタックについて聞かされたことを思い出していた。

祖父の話はこうだった。突っ込んだカミカゼ(特攻機)によって船体に穴が開いた。修理係の祖父は艦内を調べ、焼け残った特攻機の残りの操縦席でドロドロに溶け全身骨折状態の遺体を発見、飛行服のポケットの中にあつた写真、手紙や、文字の書かれた布片、時計、バックルを取り外した。戦後、遺品をずっとガレージに保管してきた――

バーグさんは祖父が亡くなったその時「あの品物を探してみないか」と、いとこと相談してガレージに探しに行き、奥深い片隅の箱の中に入っていたそれらを見つけ出した。

血痕のついた手紙のようなものを見た時、胸が高鳴り「こんなものが五十年以上も、誰にも読まれずにここで眠っていたなんて……」

一刻も早く、誰かに翻訳して欲しいという思いに駆られた。

遺言によって、祖父の持ち物はすべて祖母の所有物となる。手紙や時計、バックルなど、遺品の処分について遺族の間で話し合いが始まり、オークショ

ンに出したら、などの案もあったが、遺族の手に返す事で意見が一致した。

バーグさんは手紙のようなものを「日本語の分かる人がいたら、翻訳してほしい」と勤務先の社員に呼び掛けたところ、上司の奥さん、美幸・グレイさんが日本人で、職業が通訳。たまに防衛庁の人の通訳をしていて、体当たりした特攻隊員の身元調査には有力量な協力者となった。

そして手紙のようなものには短歌が書かれていた。「捧小川兄 岩間」として七首。冒頭の短歌には「上州児君が示せし磊落さ 仰ぎ来し吾れの今は残さるる」とあって、カミカゼ特攻隊員は群馬県出身であることが容易に推定できた。

### 小川清少尉を偲ぶ方々へ

実は偶然のきっかけから、小川清少尉が体当たり攻撃をされた時、身に着けておられたと思われる遺品の数点をお預かりしています。出来ることであれば遺族又は関係者の方にお返ししたいと思っております。何人かの方々のご尽力により、小川松一様が小川少尉の親族の方ではないかと思われることが判明致しました。私が防衛庁から回答頂いた小川松一様の連絡先

は昭和五十五年当時のものであり、小川家は平成元年に転居されていました。

私が年末に松一様宛てに出した手紙は旧住所であったにも関わらず、十二月三十日には転居先の小川幸子・陽子様の手許に配達され、小川家と連絡を取る事が出来ました。

お預かりしている遺品ですが

- ① (小) 川少尉と書かれた布片
- ② 小川少尉宛ての手紙(短歌数首)
- ③ 写真二枚
- ④ 破損した懐中時計(飛行時計)
- ⑤ 落下さんのバックルと製造票
- ⑥ 数ヶ国の紙幣と軍票(⑥は後日遺品ではないと判明)

これらの遺品をお預かりするようになりたいきさつを申し上げます。これらの品々は私の主人(ポール・グレイス、アメリカ人)が会社の部下(ダックス・バーグ氏)から預かったものです。小川少尉は昭和二十年五月十一日、沖縄方面海上の米国空母バンカー・ヒル号への体当たり攻撃を見事成功させた二機のうちの二機でした。そして同空母の乗組員だったバーグ氏のお祖父様(ロバート・シヨック氏)がこれらの遺品を戦後いままでも所持していたのですが、そのお祖父様が昨年十一月十七日に他界され、お孫さんのダックスさんが形見として受け取られました。ダッ

クスさんは是非ご遺族にこれらの品々をお返ししたいと思われて、会社の上司で日本人と結婚した私の主人に相談を持ち掛けました。

たまたまその時、私の通訳業務の顧客でした防衛庁の土井二等陸佐さんが幕僚幹部広報室や防衛研究所に連絡をしてくださり、「小川少尉の姓、出撃の日、上州男児」であること。この三点から見事に当時の所属部隊とご遺族の連絡先が分かりました。

バーグ氏から主人を通じて調査協力の依頼を受けたのが十一月末、防衛庁の土井様に相談して小川少尉が海軍第七二一航空隊・戦闘第三〇六飛行隊(鹿屋)の小川清少尉であることが判明したのが十二月十九日でした。その後同二十四日に小川松一様宛てに手紙を出し、転居先の幸子・陽子様のもとに届けられたのが同三十日。小川様からご返信を頂いたのが一月五日でした。

その後も調査は順調に進み、小川少尉の旧制中・大学の同級生であった国峰正男氏を同五日、谷田部会世話人の渡辺賢一氏を同七日にご紹介を頂き、短歌を贈った岩間旭氏が見つかったのは同十日でした。また岩間氏のご協力によって、写真に写っている方は松村米蔵、平林勇作、柏倉繁治郎、市島保

男各氏と岩間氏の五名であることも分りました。

このようにして、小川少尉を巡る身元探しは、短期間の内に完了することが出来ました。ご協力を頂いた方々に厚く御礼申し上げます

これら遺品は三月中旬にバーグ氏から小川家に直接手渡す予定になっていました。

谷田部会と同様にアメリカにもバンカー・ヒルの会があり、毎年一回十月頃に集まっているのだそうです。この会ではバンカー・ヒル攻撃時の状況を各人が思い出して纏めた回想録を出版しているそうです。また同空母に乗っていた米軍エースパイロット(ジェームズ・スウェット氏)は主人と同郷で今も健在です。今回の小川少尉の件については、このバンカー・ヒルの会へも報告するつもりです。

同空母のカミカゼ攻撃による損傷に関しては米側にもかなりの資料がありますが、重複になりますので、主なものだけを抜粋して、簡単に日本語訳をつけておきましたので参考にしてください。(抜粋資料省略)

小川少尉の身元とご遺族の方の消息は直ぐに知れ、無事に遺品を返還できる運びになりましたが、これを機会にこの話を何らかの形でまとめておきた

いと思います。そして太平洋戦争や特攻隊に関心がある若い世代に受け継いで行かれればと思っております。何かご意見等ご希望がございましたら、遠慮なくご連絡下さい。

もともとはバーグ氏の個人的なプロジェクトではありましたが、バーグ家と小川家の橋渡しを勧めたことでもありますし、なにか私にできる事があればお役に立ちたいと思っています。

皆様方のますますのご健勝とご長命をお祈りしています。

平成十三年一月十二日

グレース 美幸(旧姓廣瀬)

現住所 2807 San Ardo Way, Belmont, CA 94002-1341

ご遺族小川幸子・陽子さん手記抜粋

平成十二年十二月三十日、グレース 幸子様より「清少尉の遺品返還」の便りを頂く。

清少尉の長兄、松一翁は幸子の舅に当たり、平成十二年四月、九十四才で他界した。

平成十三年三月下旬、早稲田大学で同級生だった国峰正男氏(東京)に同行願って私達親子(幸子・長女陽子)渡米。

グレース・美幸さんの仲介によってダックス・バーグ氏に対面し、遺品を返還して頂いた。

防衛庁土井茂二等陸佐さんの御蔭で、短時日に身元を確認して頂けた。

空母バンカー・ヒルには特攻機二機が体当たり、二機目が小川機で甲板に命中して多大な損傷を与えたが、搭載の爆弾が破裂しなかったので遺品を収容できたとのことであった。

同空母の乗組員は二〇〇名で大火災が発生、戦死・行方不明合せて三九六名、負傷者二六四名の大きな被害を与えた。

返還された遺品については家宝として保存したいと思ったが、靖国神社か、又は、鹿屋の史料館に寄贈したらの助言を頂いたので、鹿屋基地から出撃しているの、同史料館に寄贈したい。

出撃当日の午前十時〇九分「ワレ突入ス」の記録(無線)が残っていると同史料館長の話であった。

平成十一年の夏、沖縄県の平和の礎を訪れ、『小川 清』のお名前(九七年に追加刻銘された)にお参りして来たが、改めて訪沖し報告をしたい。

五月十九日東京九段のホテルで清少尉と早大同級生の方々との食事会に参加、当時の印象は、おとなしく口数の少ない青年。学徒出陣の折、日章旗に

『尽忠報国小川 清』と署名した寄せ書きを拝見した。

同二十日、学徒出陣、谷田部海軍航空隊で一緒だった横浜市の岩間旭様(慶応大出身)を訪問、古いアルバムには清少尉に贈った短歌と同じ歌や、笑顔の清少尉の写真などが張っており深い感動に浸った。

同二十一日、海軍航空隊の同期会「潮会」に出席、帰ってきた遺品を見て頂く。皆様吃驚され、涙ぐんでおられた。

ほかに、ホームページ「神国」を開設されている東京の居森達治氏、谷田部航空隊同期の一瀬智司(東大出身)氏や早大同期の寺尾哲男氏等々から貴重なお話を伺う事が出来た。

四月十五日には長兄松一翁の一周忌法要と清大尉のご供養を執り行い、天国で仲良く語り合っていると思う。

沖縄戦でも多くの方が特攻散華されましたが、これほど明確に戦果が確認され、遺品が返還された事は『奇跡』としか言いようが無いと信じている。

今回改めて戦争の残した傷跡の深さ、大きさ、残酷さを勉強させられた。

当時の若者が祖国のためにと、いかに戦い、いかに散っていったかを次代に語り継いでいかねばならないと思う。今回の件では母幸子と私陽子ではど

うすることも出来なかった。大勢の方々のご尽力とご支援に対し厚く御礼と感謝を申し上げます。(攻略)

平成十三年六月七日

高崎市八幡町一三三三の一二

小川幸子・陽子

矢田部海軍航空隊同期岩間旭様より  
「捧小川兄」として贈られた短歌

「激しさを肚にたがらすその君が

微笑ふ姿のつみあらぬ顔」

「からからとただうち笑ふその時の

君が面立ち忘れなくに」

「肚わりて言ひかはすべき時はなく

至りたれども仰ぎ来し君」

「君なれば必ず目覚しき働きを

なしくるるものと頼まれにける」

「近頃に至りて君が知りそめし

をみなの情の背かれける」

「神風の吹くを頼まず神風を

おのれ息吹きてすめらぎのすら」

以上

## KKベストセラーズ発行

### 菊水6号作戦概要(抜粋)

五月十一日に始まった菊水6号作戦は沖繩戦線全般にわたる米軍の攻撃開始と偶然に一致した。(中略)

第五八機動部隊指揮官Mミッチャー提督の将旗を翻している空母バンカー・ヒルは二ヶ月間にわたり、昼夜の別なく、沖繩の日本軍陣地攻撃のため、登載中の航空機を出撃させていた。

その日午前十時四分、司令部艦橋の無線電話スピーカーから「空襲警報! 空襲警報! 敵機二機がバンカー・ヒル目掛けて急降下中」の警報が飛び出してきた。

その時特攻一番機の零戦が水面近くをこっそりと高速で接近して、運動信管付の二五〇キロ爆弾を投下したあと、飛行甲板に待機していた三四機の米軍機の中に突入した。

それから数秒後、彗星二機が殆ど垂直に近い大角度、急降下で艦尾から接近してきて、提督の立っているところから三〇メートルと離れていない艦橋

基部の左舷側に命中、爆弾は後部飛行甲板を貫通してギャラリ甲板で炸裂し、格納庫内にも猛烈な火災が発生した。受命室で待機中の戦闘機隊の大半は煙に巻かれ、またミッチャーの幕僚

一三名も戦死した。

同空母は特攻出撃の基地のひとつである喜界島に向っていたが、ゆっくりと回頭して、炎上中のガソリンや油、及び甲板や格納庫にたまった多量の水、そして残骸を投棄、軽巡と駆逐艦が救助に接近して、負傷者の救出や消火に当たった。

同空母は沈没を免れたが、戦死三五三名、行方不明四三名、二六四名が重軽傷を負った。

ミッチャー提督は旗艦を空母エンタープライズに変更、海軍工廠に回航されたバンカー・ヒルは損傷が甚大で終戦まで戦列に復帰することができなかった。

◎註 米軍資料では一機目が零戦、二機目が彗星艦爆と記録しているが、当日、特別攻撃隊の編成に彗星は無く戦闘詳報等を検討した結果、両機とも零戦爆装機と推定する、と記載あり。

以上が米空母バンカー・ヒル号へ体当りした小川清大尉の経歴や遺品返還のいきさつ、同空母の被害状況等々であるが、小川家ご遺

族の新たな悲しみの思い出とともに、改めて清大尉のご冥福をお祈り申し上げます、米国サンフランシスコ・クロニクル紙の報じた「戦後五十六年ぶりの遺品返還」のドラマチックな記事は、米退役軍人や米側遺族から多くの反響が寄せられ、戦争は『両サイド』に悲しみが起きることだと認識させられた、と同紙カール・ノルト記者の述懐(上毛新聞より)を添えて攔筆する。



特攻機に体当りされた空母  
この記事とは別

# 万葉集の防人の歌を読み 特攻隊員の遺詠を連想する②

田中 賢一

前々号に続いて父母によせる情を拾う

水鳥の發ちの急ぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき

右の一首は、上丁有度部牛麻呂  
水鳥ノは枕詞。

父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて来まで

右の一首は、川原虫麻呂

潔斎してお待ち下さい、水の中にある白玉を取ってくるまで。敵艦轟沈のニュースを聞くまでと相通ずる。

忘らむと野行き山行き吾来れどわが父母は忘れせのかも

右の一首は、商長首麻呂

忘れようと私は野山を歩き回っているが、私の父母は忘れ得ないなあ。

家にして戀ひつつあらずは汝が佩ける大刀になりても齋ひてしかも

右の一首は、国造丁 日下部使主三中が父の歌

家において恋していないで、お前が佩いている大刀になっても、体を守ってやりたいものだ。

たらちねの母を別れてまこと吾旅の假慮に安く寝むかも

右の一首は、国造丁日下部使主三中

母と別れて本当に私は旅の仮小屋で安らかに寝られるだろうか。

## (特攻隊員の歌)

ふるさとに散るとも知らず我を待つ老いたる母に如何に告げなむ

ふるさとに髪を残してこの心わが父母にそれと告げたり

中田 茂少尉 第四十五振武隊、20年5月28日  
日知覧出撃沖繩へ

たらちねの母のみもとぞしのぼるる弥生の空の春霞かな

光山文博少尉 第五十一振武隊、20年5月11日  
日知覧出撃沖繩へ

たらちねの母のみめぐみおろがみて仇艦の群撃ちて砕かん

大谷邦雄少尉 神風特別攻撃隊八幡振武隊、20年5月4日  
日串長出撃沖繩へ。

国の為征く身なりとは知りながら故郷にて祈る父母ぞ恋しき

広田幸宣一等飛行兵曹 神風特別攻撃隊葉桜隊、19年10月30日  
セブ出撃スルアン島沖。

母上の御手の霜焼いかならんと見上げる空に春の

動ける

村川 弘大尉 神風特別攻撃隊第二御楯隊、20年2月21日  
八丈島出撃硫黄島近海へ。

告げもせで帰る戎衣の我が肩にもろ手をかけて笑ます母かも

白絹もてつづめる我子の遺骨抱きてかへる夜空やさぞ長からん

鷲尾克巴少尉 第五十五振武隊、20年5月11日  
日知覧出撃沖繩へ。

梓弓征きて帰らぬ晴姿育ての親は如何に見るらん  
赤近忠三二等飛行兵曹 回天白竜隊、20年6月13日、  
前進基地より沖繩近海へ。

いさみ来て今に思へば悲しけりなが年月の父の恩愛

根尾久男中尉 神風特別攻撃隊菊水部隊梓隊  
銀河、20年3月11日  
鹿屋出撃ウルシーへ。

死出の旅と知りても母は笑顔にて送りてくれぬ我くにを去るの日

広き広きホームに立ちて見送るは母と妹と共二人のみ

小林敏男 誠第三十七飛行隊、20年4月6日  
新田原出撃沖繩へ。

還り来ぬ身にしあれども父母に告げずに行かんや  
まと男子は

新藤 勝 義烈空挺隊 20年5月24日  
健軍出撃沖繩へ

## 黒沢丈夫氏と比島での特攻攻撃について

岩下 邦雄

私の大先輩である海兵63期の海軍少佐黒沢丈夫さんは、生存する戦闘機乗りとしては最古参の方であります。黒沢さんが戦闘機搭乗員として零戦の先代である96式戦闘機を駆って中国大陸で初陣を戦ったのは昭和13年の事です。から、もう70年近い昔のことです。

動を命じられました。

黒沢さんが率いるS戦闘機隊の零戦24機が比島クラーク基地のマバラカット飛行場に着陸すると、直ちに大西長官から出頭するようにとの命令を受けました。そこで大西長官の「特攻攻撃」についての決意を初めて聞きましたが、それは「レイテに上陸中の米攻略部隊を撃滅すべく、わが主力艦隊が北上している。戦場に到達するまでの一週間だけでも米艦載機の活動を封じなくてはならぬ。その為敵空母に体当たり攻撃を実施して発着艦が出来なくする事が出来れば、大和、武蔵などの主力艦隊の巨砲で米上陸部隊を殲滅できる。非情な作戦であるが今の劣勢を転換するため特攻攻撃の実行を決意した」と言うものであります。大西長官から言われて、万事已む無しと自分も納得して、黒沢さんは彼が率いてきた零戦24機全てを特攻攻撃用に提供する事を承知しました。

発動されると、特設されたS戦闘機隊指揮官として、比島に移動されたこと。その時関大尉は机に向かって何か「遺書」らしいものを書いていたようでした。彼はその時腹をこわしており、体調は万全ではなかったようでしたが、雰囲気は厳粛そのものでした。黒沢さんはその後二日間関大尉と起居を共にされましたが、当時のことを「敷島隊の隊員たちは、生命の執着を振り切って祖国を救おうとしているのだと思うと、彼らが日本を救う神様のように思われた」と述懐しています。

鹿飛行場からでしたが、今度は工場の生産能力が落ちていてなかなか所要の零戦が揃わない状態でした。原隊復帰が急がれるので黒沢さんは4機が揃った所で鈴鹿を発ちました。

ところが、燃料補給のためマバラカット飛行場に着陸を余儀なくされ、又も201空に4機の零戦の提供を要求されました。いろいろ交渉の結果一機は黒沢指揮官がバリクパパンに帰るため必要であるが、残りの3機は特攻用に提供する事で決着しました。

黒沢さんは大東亜戦争が始まると戦闘機専門航空隊として新設された「三空」の先任分隊長を命じられ、比島、セレベス、ボルネオ、豪州を転戦しました。この間黒沢さんが指揮した三空は、撃墜撃破計320機と言う大変な戦果を挙げました。

さて、全ての乗機を特攻隊に提供したS戦闘機隊の隊員は、一式陸攻に分乗して彼らに乗るための零戦を受け取ったため群馬県の中島飛行機製作所に赴きました。約一ヶ月をかけて23機の零戦を受け取り再びクラーク基地に着陸すると、又も特攻攻撃隊の201空に全ての乗機を取り上げられてしまいました。

二度にわたって乗機を取り上げられた黒沢指揮官は、所属する南西方面艦隊司令部に赴き、「S戦闘機隊のような練度の高い搭乗員がいる飛行隊をまるで零戦の輸送機隊のように使うのは承服出来ぬ」と談判しました。その結果S戦闘機隊は内地で機材を整えたりバリクパパンの原隊に復帰する事となりました。

三回目の空輸は三菱製作所のある鈴

黒沢さんは昭和18年9月には大型機攻撃用として新たに採用された雷電隊である381航空隊飛行長として、ボルネオのバリクパパンに進出し、連日来襲するB-24編隊と戦いました。特に昭和19年9月から10月にかけての5回の迎撃空戦で、B24爆撃機19機、戦闘機6機(米軍発表)の戦果を挙げ、バリクパパン根拠地隊や第二南遣艦隊司令部から戦果を讃える多くの電報が寄せられています。

黒沢さんが今でも鮮明に思い出されることは、昭和19年10月20日、敷島隊の指揮官を命じられた関行男大尉に会ったこと。その時関大尉は机に向かって何か「遺書」らしいものを書いていたようでした。彼はその時腹をこわしており、体調は万全ではなかったようでしたが、雰囲気は厳粛そのものでした。黒沢さんはその後二日間関大尉と起居を共にされましたが、当時のことを「敷島隊の隊員たちは、生命の執着を振り切って祖国を救おうとしているのだと思うと、彼らが日本を救う神様のように思われた」と述懐しています。

さて、全ての乗機を特攻隊に提供したS戦闘機隊の隊員は、一式陸攻に分乗して彼らに乗るための零戦を受け取ったため群馬県の中島飛行機製作所に赴きました。約一ヶ月をかけて23機の零戦を受け取り再びクラーク基地に着陸すると、又も特攻攻撃隊の201空に全ての乗機を取り上げられてしまいました。

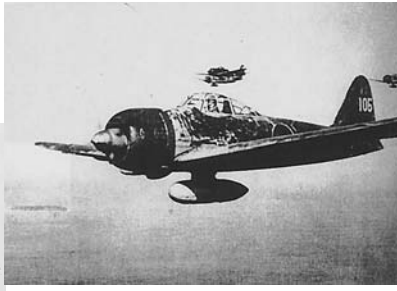
二度にわたって乗機を取り上げられた黒沢指揮官は、所属する南西方面艦隊司令部に赴き、「S戦闘機隊のような練度の高い搭乗員がいる飛行隊をまるで零戦の輸送機隊のように使うのは承服出来ぬ」と談判しました。その結果S戦闘機隊は内地で機材を整えたりバリクパパンの原隊に復帰する事となりました。

三回目の空輸は三菱製作所のある鈴

その後昭和19年10月に捷一号作戦が

三回目の空輸は三菱製作所のある鈴

黒沢さんは大正2年生まれで今年93歳。今も大変お元気で、昨年6月に退任されるまで実に40年間に亘って生まれ故郷の上野村の村政の為に尽力されました。昭和60年8月12日、日本航空



零式艦上戦闘機



のジャンボ機が長野県と群馬県との境にある御巢鷹山に墜落して50人が死亡した大事故は皆さんの記憶に新しいことだと思います。その時上野村の事故に対する応急措置が適切で村長の救難指揮が鮮やかであったことが話題を呼びました。その村長が黒沢さんだったのです。

### 小灘利春氏を悼む

河崎 春美

当協会の評議員で、全国回天会会長でもあった小灘利春氏の訃報に接して、万感胸に迫るものがあります。

小灘氏は、第一特別基地隊附となつて昭和19年9月5日、大津島基地に着任した海兵72期・海機53期生14名の中の一員でありました。

着任早々思いも掛けない、黒木・樋口両少佐の搜索任務に従事されて以来、回天が実戦に参加するに至る迄、及びその後の歴史を身を以って体験されて、今や当時を語り得る唯一の生字引的存在になっておられた小灘氏が世を去られ、残された者一同、等しく大黒柱を失った大きな虚脱感に見舞われています。

八丈島に進出展開した第二回天隊長として終戦を迎え、以後、大津島に於ける回天碑再建・回天記念館設立に奔走され、常に元隊員の中心的存在として活躍されました。

八丈基地での回天搜索を手始めに各地で搜索活動を続け、更に回天の実態真相を探るべく、数回に亘って渡米、ワシントン・ハッケンサック・キーポート・ハワイ等を訪れて、米人関係者との親交を確立されました。

その結果、ハワイから回天一型を引

き取って靖國神社に奉納する大事業を果たし、写真集「回天特別攻撃隊」を発行、回天作戦烈士の生前の姿を御遺族に伝え、元隊員の啓発の為には「まろくくだより」に積極的に投稿されました。

更には第六航隊の戦況報告と米軍資料との突き合せ等、回天作戦の実態把握にも精力的に活動されました。

昨年は、広島のザメディアジョンからの書籍「回天」の発行、松竹映画「出口のない海」制作への資料提供・助言等に、回天隊活躍の実態を後世に伝える為に尽くされた功績は誠に偉大で余人を以って代える事の出来ない、筆舌に尽くし難いものがあります。

今、小灘利春氏と永久の別れを迎えて、戦後六十余年の様々な思い出の一端を、追悼の言葉として捧げ、心から御冥福をお祈り申し上げる次第であります。

#### 回天特攻隊員遺詠

我が母の心籠りしおむすびを

押しただきて香を懐かしむ

宇都宮秀一少尉 菊水隊

19年11月20日戦死

国のため散るさやけさや今日の空

福田 斉中尉 菊水隊

19年11月20日戦死

#### 回天会会長

### 小灘利春君逝く

田中 賢一

この人とは出身は陸海軍別だったが意気投合し、打解けて話し合った。終戦時は回天部隊の指揮官として八丈島に展開し、戦機を窺っていたという貴重な体験で、本誌に多くの記事を寄せられた。我々が特攻観音の年次法要を行った九月二十三日に亡くなったことを、二十五日になって知った。歩行不如意で葬儀に参列できないので次の弔電を送った。

君が訃音に接し痛恨極まりなし

我ら皆余禄の齢とおもへども

語り部の逝く恨めしきかな

特攻回天のこと世に語りうる 余人を以って代え難し

玉の緒の惜しきをのこと嘆けども

よわい思へば輪廻なるかな

君彼岸の中日に帰幽せらる 彼岸とは

現世より彼の岸たる涅槃に行くことに

して涅槃とは煩惱を脱し悟りの境地に

到着することと聞く 君悟道に達しあ

ればなりと 畏敬の念新なり

黄泉に在りて回天殉国の烈士と久闊を

叙し 物語りせらるならん

特攻慰霊協会に席を同じくせし縁を以つ

て 一言粗辞を呈し 君が旅立ちを送る

## 陸海軍初の空挺作戦の指揮官 二人共敵国の報復裁判で刑死

田中 賢一

の誠の至らざりしに依るものにして此の点国民深く反省すべきもの

陸軍初の空挺作戦はレンバン降下

作戦で、このとき二個中隊を指揮しレンバン飛行場攻撃に任じたのは、挺進第二聯隊長甲村武雄少佐だった。

当時私は第一挺進司令部の部員だったので、甲村聯隊長とは接する機会が多かった。温厚で理知的な方とお見受けしていた。内地帰還後歩兵学校教官などなされて、十九年六月二十一日付でセレベスに在る独立第五十七旅団の参謀に補職された。

二十一年三月十六日モロタイ島に於いて銃殺された。四十一歳。彼等の付けた理屈は遺書に明記されている。

### 遺書

夢にだも思はざりき、斯の如き書を読むとは。即ち旅団指揮下の某部隊が濠軍捕虜を死刑せる事件に参謀として職務上是に連座し去る一月十八日銃殺を宣せられ、明三月十六日施行さる事と相成りたり。依つて一筆書き遺し置くべし。

一、大東亜の聖戦も敗戦に終りしは誠に一大痛恨事にて言ふべき言葉もなき次第、罪は一億国民齊しく御奉公

克く言ひきかせ被下度。

二、色々噂出づる事あらんも事実は全く小生の職務上の連座事件にして直接の關係者にあらず、自分の良心の苛責全く無く明鏡止水の心鏡なり。

この点子供達によく話し、父は全く正しき武人たりし事を知得せしむると共に職務上の責任に依り止むを得ざりし事を知らしめ、今後子供達教育の資たらしめ将来共正しく直く明るく生長せしむる如く教育せよ。

三、戦争犯罪者として濠軍より遇せられあるも何も罪を日本国家に負ひしものにあらず。正しく日本国の為全能力を發揮して奉公せしも敗戦如何せん。小生軍人の一生を顧み初一念を貫き、御奉公の一端を致せし事特に其の最後に於いて参謀として終る満足なり。

四、小生なき後子供の教育につきては一入御心労多き事と存ずるも子供をして真の日本人としての生長に務められ度。子供達の今迄の順調なる生長を見将来を刮目しあり。而して教育には柔剛並行教育を肝要とすべく

厳格なる父親の役目を忠夫兄に依頼せよ。徹頭徹尾実力実行力ある者たらしめよ。

五、其の許殿十有余年間小生に致せし誠に対し愛敬と感謝を捧ぐ。

六、中村家、今村家各位の生前の御厚情を深く感謝する事を伝へられ度。

母上、忠夫兄には別に書くの暇なき故特によりしく伝へられ度。君の為捨つる命はおしからず

モロタイ島の露と消ゆとも

昭和二十一年三月十五日

二三殿

於モロタイ島  
武雄



海軍初の空挺作戦はメナド降下作戦であり、部隊は第一〇一特別陸戦隊で司令は堀内豊秋中佐だった。

堀内大佐は二十三年九月二十五日メナドに於いてオランダ軍によって死刑に処せられた。なぜ死刑になったのか判決文がないので不明だが、関係者の言によればメナドを占領時捕らえたオ

ランダ軍の捕虜を、かねてから恨んでいた土民が殴り殺したので、捕虜の保護が適切を欠いたという理屈をつけられたという。次の一文を残して従容として死についた。 四十七歳

### 絶筆

九月二十三日突然執行の通知を受けた二十五日午前八時に執行されることになった。在世中は真に幸福な生活だった。執行の日迄刑務所内でも多くのインドネシア人の尊敬を受け何物かを残した。

一誠よ、其の子供達よ、父は国家の犠牲となつて散るのだ。桜花よりも清く少しの不安もない。兄妹力を協せ母上に孝養を尽くして呉れ。人を頼つてはならない。飽く迄清く正しく生活をなせ。死に臨んで少しも不安のないのは小生の過去の清らかな生活がさせるものと信ずる。

不幸な妻よ、子供よ、父なくとも決して自暴自棄すること勿れ。部下の散





つた「メナド」で白菊の花の如く美しい態度で散るのだ。年寄った母上様、どうか先立つ因縁をお許し下さい。

兄上様、呉れぐれも後に残った家族の行末を御願ひ申し上げます

人は自分を信じ努力を続ければ偉くなる。自分の死は見守る人もないが、立派なものであることを信じて戴き度い。もう二人の日本人将校が残つて居りますが、之も遠からず執行されるでせう。世に思ひ残すことは少しもありません。

皆様御機嫌よう。さようなら

堀内豊秋

堀内家御一同様

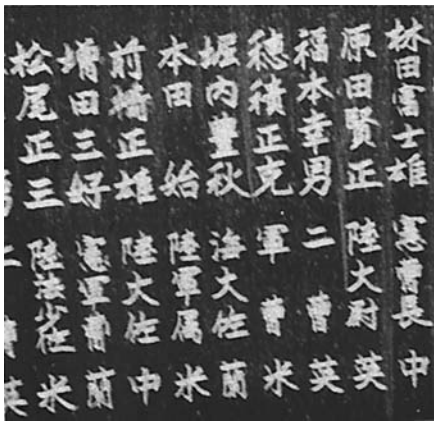
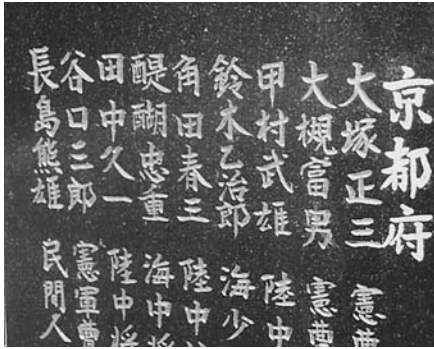
月に雲花に嵐と悟り得て

みは秋晴のそらをまつのみ



高野山にある昭和殉難者慰霊塔

高野山にある昭和殉難者の碑には、敵国というBC級戦犯山下奉文以下一〇六八柱の氏名が、県毎に刻まれている



これとは別に敵がA級戦犯とし、処刑された七士の碑は愛知県の三ヶ根山にある。

戦闘終了後不法な軍事裁判で国に殉じた人々は国内法では勿論罪人ではなく、法務死と呼ばれ、戦死者と同じ処遇を受け、靖國神社にも祀られている。それ以外に拘留中や禁固中に病死した人も戦病死と見なされている。

戦闘は終わっても講和条約が発効し、我が国が独立を回復した昭和二十七年四月二十八日までは戦争中と考えるのは至当である。所謂A級戦犯については言えば、処刑された七士の他に七士が戦病死と見なされている。



## パレンバン空挺作戦

### —挺進団司令部—幕僚の回想—

田中 賢一

階行社編集委員が実戦体験の投稿を求めた。会員も戦後の者が多数を占めるに至ったので、弾丸の下を潜った勇ましい記事を期待したのであろう。しかし私はパレンバン空挺作戦で弾丸を浴びたわけでもないのに、投稿をためらったが、当時の関係者が鬼籍に入ってしまった今、私の体験したことを文書に残しておくことも、意義あると考え投稿して掲載された。これがその記事である。

#### 本作战の概要

大東亜戦争開戦時、宮崎県新田原(にゅうたばる)にあった陸軍挺進練習部の隷下には、挺進第1聯隊が既にできており、第2聯隊に充当すべき練習員を練成中だった。飛行隊の方は2個中隊分の人員を保有しており、一式輸送機(ロ式)に改編中だった。

挺進聯隊は4個中隊より成り、第4中隊は工兵で編成し、歩兵戦闘の他爆破、軽渡河の能力もあった。中隊は3個小銃小隊と機関銃小隊で、機関銃小隊は機関銃2と速射砲1を持っていた。

12月1日第1挺進団に動員下令、但し

この時は団司令部、第1聯隊及び挺進飛行隊の2個中隊だっ

た。第1聯隊は12月13日門司港を出帆、南方に向かった。ところが乗船明光丸は大連に寄港し、我々とは関係ない航空弾薬を積載したが、1月3日南支那海を航行中、積載してあった焼夷弾が自然発火し、海没してしまった。人員は救助されたが、落下傘等の特殊装備品一切を失ってしまった。挺進練習部では第2聯隊の編成完結を急ぎ、装備品の入手を促進し、急拠送り出した。

パレンバン空挺作戦は、降下の翌日(L日)第38師団の一支隊が、ムシ河を遡航しパレンバンに到着することになっており、その部隊はカムラン湾から出発する。護衛に任ずる海軍との協定でL日は2月6日となっていた。ブノンベンに在った我々の司令部は、1月31日頃第2聯隊がカムラン湾到着と聞いていたので、到底無理だと諦めていた。第1聯隊の人員はブノンベンに來ていたが、装備は2聯隊が携行しているもので、使いものにならない。ところが海軍の都合で、L日は10日、つい

で12日、最終的に15日となり、我々は救われた。

第2聯隊は予定通りカムラン湾に到着し、鉄道でサイゴンに來て、自動車輸送でブノンベンに集結した。その前に挺進飛行隊の2個中隊も、ブノンベンに到着していた。ブノンベンにはカ

ンボジアの古都で風光明媚な街、戦火をよそに享樂にはこと欠かないが、司令部以下作戦準備に忙殺された。聯隊はここで落下傘の乾燥折畳みと、物料箱の整備等を行った。物料箱のことは後でのべる。ここに在ること数日、空輸と鉄道輸送でマレーのスンゲーパーニーに前進した。

挺進団ははじめ南方軍直轄だったが1月31日第3飛行集団に配属された。スンゲーパーニーにおいて飛行集団と連絡をとりつつ作戦計画を作成した。それらのことは別項で述べる。挺進飛行隊はこのとき第3中隊が追求し3個中隊となった。第1、第2中隊はロ式、第3中隊は百式(通称MC)。別にロ式の第12独立輸送飛行中隊が配属となった。物料投下に任ずるのは飛行第98戦隊と決定した。

作戦発起前日の2月13日、第一次挺進部隊は、降下部署通りの搭乗区分でスンゲーパーニーを發ちマレー南部のカハン飛行場へ前進した。一方物料投下の98戦隊はクルアン飛行場に展開した。両飛行場は隣接している。



カハン飛行場搭乗前、中隊長等集合



搭乗前落下傘装着 装具の上に外被を着る

明くれば14日、我が陸軍初の空挺作戦が発起されるのであるが、参加する飛行部隊とその任務及び展開飛行場は次の通りだった。

カハン

挺進飛行隊

飛行第64戦隊(戦闘) 直接援護

クルアン

飛行第98戦隊(重爆) 物料投下

飛行第59戦隊(戦闘) 直接援護

飛行第90戦隊(軽爆) 対地攻撃

飛行第81戦隊(司偵) 偵察・誘導

第15独立飛行隊(司偵) 偵察・誘導

100機に近い大編隊の飛行は挺進飛行隊の航行を基準に行われた。8時30分(内地時間を使っていたので日出直前)離陸開始、この日薄曇りで風弱く、視程10乃至20キロ、高度3千メートルで航進、左手に見えるシンガポールは断末魔であえぎ、黒煙はマラッカ海峡を越えていた。

ムシ河々口において変針、飛行場攻撃隊と精油所攻撃隊に別れて航行した。

飛行場攻撃隊は主力をもって飛行場南側に一部をもって飛行場西側に降下した。時に11時26分。主力は聯隊本部、第4中隊及び第2中隊の1小隊(水野小隊)で、降下場は疎林で下草が繁茂しており、集結と物料収集に手間取った。第4中隊の奥本中尉らの機

は扉の故障で降下が遅れ、飛行場からパレンバン市に通ずる道路付近に降下してしまい、異変を知って駆け付けたらしい敵の装甲車と遭遇し、手榴弾と拳銃だけで撃破した。第4中隊長三谷中尉は、概略掌握できたので飛行場に向かい道路沿いに前進した。すると敵の軍使が現れ、オランダ語がわからないので英語で対応した。なかなか意図疎通せず時間がたち、軍使は上司に報告すると言ったことを言い立ち去ったが、その後現れなかったり時間稼ぎだったらしい。日没時飛行場に入ったが敵は逃げた後だった。



搭乗、輸送機はMC

東方を迂回し飛行場に向かおうとした。途中敵の斥候に出会ったが大した戦闘もなく、地形錯雑していたため遅れ、夜半飛行場に入った。

聯隊長甲村少佐は通信班と水野小隊の掌握が遅れたが、三谷中隊と反対に東方を迂回し飛行場に向かおうとした。途中敵の斥候に出会ったが大した戦闘もなく、地形錯雑していたため遅れ、夜半飛行場に入った。

飛行場西側に降下した第2中隊(中隊長広瀬中尉)は、降下した所が背丈を没する草原で、これまた集結と物料収集が困難だった。かねて示してあった通り集まった者数名で組を作り飛行場に向かった。小隊長蒲生中尉は敵高射砲陣地につかり、真先に突入し壮烈な戦死を遂げた。飛行場から北方に通ずる道路の見える所までくると、退却して行く敵部隊を目標撃したが、拳銃だけでは手出しが出来ないので見の

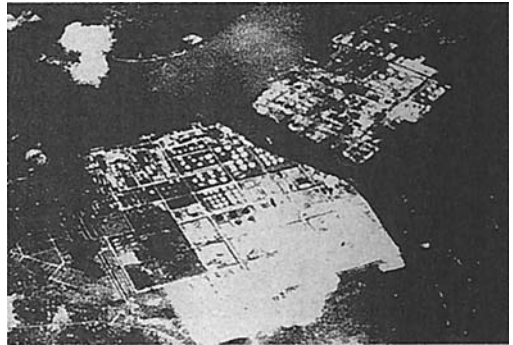
されておられ、小隊長長谷部少尉が戦死してしまつたので、その日のうちに突入出来なかった。夜半工場内で大爆発が起き、夜が明けて突入してみると敵はいなかった。敵が撤退するとき爆発したのだったが、それはたいした破壊ではなかった。

このように飛行場も精油所も占領でき、作戦は大成功を収めることになった。我が方の損害は挺進部隊の戦死者38名、負傷者50名、物料投下機1機が対空砲火で撃墜された(機長須藤中尉)。

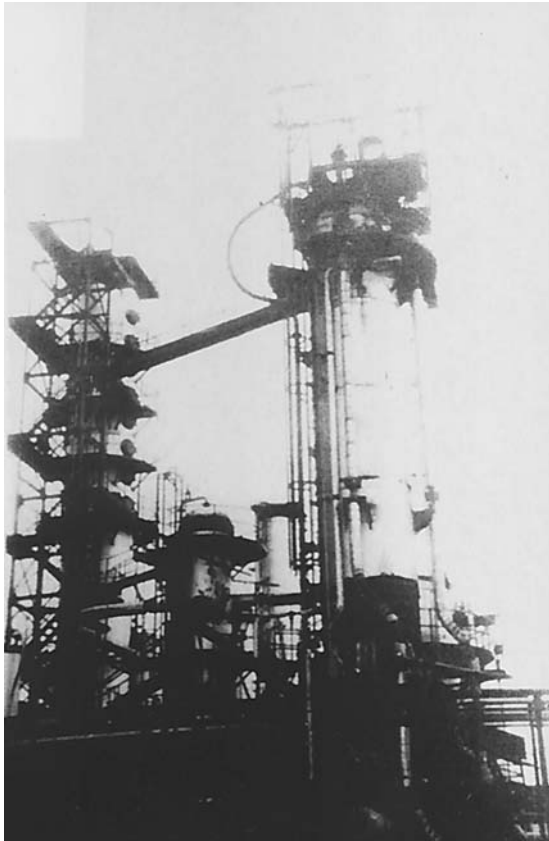
私の職務

挺進団司令部の編制と人名は次の通りだった。

- |     |    |    |     |      |
|-----|----|----|-----|------|
| 団長  | 大佐 | 久米 | 精一  | 31期  |
| 部員  | 中佐 | 木下 | 秀明  | 35期  |
| ”   | 大尉 | 弘中 | 郁夫  | 47期  |
| ”   | 中尉 | 田中 | 賢一  | 52期  |
| 副官  | 大尉 | 稲垣 | 芳治  | 少17期 |
| ”   | 少尉 | 山口 | 直二  | 特志   |
| 通信係 | 大尉 | 上田 | 大三郎 | 50期  |
| 暗号係 | 少尉 | 小瀬 | 恭介  | 特志   |
| 主計  | 大尉 | 谷口 | 芳太郎 |      |
| 軍医  | 中尉 | 深田 | 秀雄  |      |
- 私は挺進練習部の落下傘降下課程を終了して直ぐに司令部の部員に補職され、担当は兵站となつていたが、高級部員木下中佐の下働きだった。弘中大



大きい方がBPM、後方の小さい方がNKPM  
降下場はこの図の手前の方



BPMのトッピング 工場に突入すると直ちに小川軍曹がこれによじ登り日の丸を挙げた

尉は航空の操縦者で、航空関係の業務を担当した。

### 本作戦の目的

我々は動員が下令されたとき、文書では示されなかったが、パレンバン精油所の奪取に使われると聞いた。それから何日か後に、鶴見の日本石油精油所に工場の構造を勉強するため人員を派遣せよという指示を受けた。第1聯隊は既に出発していたので、第2聯隊編成要員から20何名かを派遣した。指揮官は徳永中尉だった。司令部が出発直前にパレンバン精油所の航空写真が

与えられたので、これは私が携行した。開戦に踏み切ったのも石油入手の途が断られたからである。大本營の作戦計画でも、第1挺進団をもって蘭印最大の油田パレンバンを奪取するとなっていたが、そこまでは我々には示されていなかった。ところが1月31日に下達された南方軍の命令は次の通りだった。

### 南方軍命令

一 自今第一挺進団ヲ第三飛行集団長ノ指揮下ニ入ラシム

二 第三飛行集団長ハ作戦ノ為第一挺進団ヲ左記ニ依リ運用スベシ

(一) 第一挺進団ハ「パレンバン」飛行場ヲ占領シ「L」及「H」作戦ヲ容易ナラシムルト共ニ成シ得レバ敵ノ破壊ニ先タチ「パレンバン」精油所ヲ占領確保ス  
(以下略)

注 Lはバンカ島及びパレンバン作戦。Hはジャワ作戦。

この命令を見て我々は意外に思った。内地を出る前から頭に描いていた精油所奪取が、成し得ればと次等の目標とは理解し難かった。精油所も始めから降下目標にすることについて、木下中佐は飛行集団と接渉していたが、折りしも鶴見の精油所に講習に行った徳永中尉が司令部に現れ、自分の中隊を精

油所に降下させてくれと申し出た。南方軍が飛行場を主目標としている以上主力を飛行場に指向しなければならぬ。そうなるに輸送機が足りないのでは中隊と言っても100名くらいしか連れて行けないが、それでも出来ると思うかと中佐が言った。徳永は決意を漲らせて「やります」と答えた。

これに依って飛行集団の命令では、第一次挺進は飛行場に対し2個中隊、精油所に対し1個中隊と決定した。

この空挺作戦は大成を収めたのであるが、南方軍総司令官寺内元帥から与えられた感状が問題だった。その個所だけを抜粋してみると、

——二月十四、十五ノ兩日ニ亘リ空地ノ抵抗ヲ破碎シツツ寡兵長駆決死敵中ニ投ジ南部「スマトラ」ノ要衝「パレンバン」ヲ奇襲シ敵ノ根拠飛行場ヲ其ノ破壊ニ先タチ占領セリ

此ノ破天荒ノ行動ハ南方軍ノ先鋒トシテ克ク戦機ニ投シ蘭印馬來兩方面ヲ分断シ且全軍爾後ノ作戦ノ鍵鑰ヲ確保セルモノニシテ其ノ武功ハ拔群ナリ仍ツテ茲ニ感状ヲ付与シ隷下全軍ニ布告ス

大本營の、否国家戦略の期待に応え精油所を殆ど無傷で奪取したことには一言も触れていない。総軍の幕僚何をしているのかと我々は憤慨したが、こ

れについてこの時異議を申し出たかどうか、私には記憶がない。

私は30数年後になって真相を知ることが出来た。昭和53年頃だったか、偕行社で航空作戦についての座談会があり、私はパレンバン作戦のときだけ出席した。この作戦当時はまだ航空軍は無く、飛行集団は総軍に直属しており、参謀部第4課が隷下の飛行部隊を運用していた。スマトラ作戦を担当していたのは松前中佐だった。

松前さんが座談会に出てきたので、私はここぞとばかり感状のことを詰問した。すると松前さん曰く、

あの時はジャワの上陸作戦の期日が迫っており、マレーからでは戦闘機が届かず、どうしてもパレンバンに戦闘隊を進出させなければならぬ。パレンバンが取れたというので直ぐに飛び立ち、パレンバンに着陸し確認して帰った。帰ると精油所はどうだったかと尋ねられ、実は見てこなかったし、聞いてもこなかったので恥ずかしかった。感状は直ぐに出すように指導を受けていたので、その日のうちに起案して決裁をもらったが、知らないことは書けなかった。申し訳なかった。

この話で私は理解できたが、あの時憤慨した司令部の人たち、皆故人になっ

てしまったのをしみじみ思った。

### 戦闘計画の策定

降下戦闘計画の根底をなすものは、当時の落下傘兵の装備である。わが国の落下傘部隊が発足してまだ一年、降下時の携行兵器のことまでは研究が進んでいなかった。小銃を身に付けて降下することは危険だった。開傘するまでに自動索や吊索が体にひっかかるという事故は、演習中よく起きた。殉職したのは1件だけだが、一個中隊の戦闘降下で、2人くらいは不完全開傘が発生し、予備傘を使うのが通例だった。拳銃、手榴弾、水筒、雑嚢までを身に掛け、その上に特製の外被を着て落下傘を装着した。

携行兵器は物料箱に入れ重爆から投下した。物料箱には各種あったが、一番多いのは1号箱で、これ一つ拾えば軽機関銃1と小銃数丁が入っており、1個分隊が武装できた。

この聯隊の将兵は支那戦場の歴戦者が多かったため、白兵戦には絶対の自信があった。しかし降下直後で小銃も持っていないでは話にならぬ。目標の真上に降下して奇襲の利を最大限に發揮したいが自信がもてず、飛行場を包圍するように若干問合いをとって降下場を選定した。精油所の方はこの場所

以外には適地がなかった。戦闘計画はスнгеーパターニーに来てから策定し、ゴム林の中で地面に砂盤をつくり、案を練ったり全員に周知徹底させたりしていた。降下後の戦闘については聯隊に任せてあったので、我々は関与しなかった。プノンペンからスнгеーパターニーに前進するとき、全員は空輪でできなかったもので、私は鉄道輸送の手配などに忙殺され、どのような戦闘計画が策定されたのか全く知らなかった。

スнгеーパターニーにいた時、長髪の見慣れない将校3人と下士官3人が現れ、中野学校からスマトラ島内の工作の任務で派遣されたので、同行降下させてくれと言う。我々の方はそのような連絡を受けていないが、彼らの携行している命令書を見ると本物らしい。飛行場を奪取したら着陸する輸送機があるから、乗せて行つてやると言ったが、どうしても初めに降下させてくれと執拗に嘆願する。私が相手していた時久米団長が現れ、彼らの熱意にほだされ、一人だけ降下させることになった。勿論落下傘降下の訓練は受けていない。星野少尉と言ったが、ゴム林中に連れてゆき落下傘を着け、樹から吊し即席の教育をした。第1中隊に行き徳永中尉に頼んで引き渡した。

作戦終了し降下部隊が引き上げて来

たので、あの男どうしたかと徳永に尋ねたら、降下直後走って行くのを見たが、後は知らぬということだった。

### 久米団長の統率

この人は砲兵から航空に転科して軽爆の戦隊長の経歴はあるが、操縦者ではない。部下を信頼することが篤かった。挺進第1聯隊が海没し第2聯隊を起用せざるを得なくなったとき、総司令部の幕僚の間では、編成早々の部隊の戦力を懸念する余り、何処か安全な場所に降下させ地上進攻させる案が出た。これに対し団長は断固反対し、総司令部における会議をリードしたと聞いている。聯隊長や中隊長の力量に絶対の信頼を寄せていたからであろう。

内地へ帰って挺進練習部長に復帰してからのことであるが、聯隊の演習を視察して小部隊の戦闘行動についての所見開陳に関しては、随行していた私の所見をそのままのべるようなことが多かった。

パレンバン作戦の間、高級部員木下中佐の献言は何事もそのまま決裁していたが、一回だけ否定したことがあった。実は地上戦闘については聯隊長と精油所攻撃の中隊長に任せておけばよいが、第3飛行集団や進出して来る飛行部隊との交渉は挺進団の部員が担当

しなければならぬ。それが為木下中佐は私と下士官2名を伴い、聯隊と共に降下しその任に当たる心算だった。このことを団長に述べると、「陸軍最初の此の作戦に儂（この人はいつも自分のことをわしと言った）は基地に留まっていることは出来ぬ、輸送機を1機潰すが降下部隊と同行し近くに強行着陸する。上田大尉と斎藤通訳は同行せよ」と厳然として言った。上田大尉は通信係、斎藤通訳は判任官の軍属でプノンペン到着時より挺進団に配属となっていた。実際にはこれ以外に第16軍参謀の井戸田中佐、稲垣副官、報道班の荒木カメラマンが同乗し、現地で通用する紙幣も積み込まれた。

更に私に向かって聯隊の為に速射砲を持って行ってやろうと思うので、手配せよと言われた。輸送機を1機潰すのが気になったようだった。

久米団長は部下に対し、作戦参加の機会を与えることに絶えず留意されていた。輸送機数の関係で第3中隊（中隊長森沢中尉）は、第一次挺進部隊からはずされ、スнгеーパターニーに残されていた。私は木下中佐と共にカハン飛行場に待機していたが、翌15日午前パレンバン飛行場に着陸し戻ってきた集團の偵察機で、飛行場は完全に占領したが第3中隊を派遣、飛行場に降下

させよという団長命令が伝えられた。急挺進飛行戦隊をスнгеーパターニーに差し向け、第3中隊を乗せカハンで給油しパレンバンに降下させた。このことは久米団長の深い思いやりだったと思う。降下させなくても着陸でよかったのに、3中隊の将兵にパレンバンに降下したという実績を与えたことになった。現地で此の中隊を掌握した団長は、パレンバン市内にあるオランダ軍の兵営占領をこの中隊に命じた。敵は既に退却しており戦闘はなかった。

作戦がすべて終わってからのことだが、ある時団長はしみじみした口調で私に語った。儂は地上戦闘で何もしなかった。功を奪いに行く気など毛頭なかったのにと、これは久米部隊の名で大々的に報道され、甲村聯隊長の名はかすんでしまったことを気にされていたのである。



第一次降下、偵察機が撮影

ここでもう一つ話しておきたいのは稲垣副官のことである。この人は兵からたたき上げの実直な人で、後に少佐になったがこの時は大尉だった。団長が戦死して副官が生きていたでは世間に顔向けができぬとて、強行着陸に随行を懇願したが団長は許さなかった。私が聯隊の兵を使って速射砲を積み込むと、稲垣大尉は外被をかぶりその陰に隠れ、とうとうパレンバンまで行ってしまった。これも後日のことだが、久米団長は、稲垣は儂の考えがどうしても判ってくれなかったと、私に申された。戦死者の事務上の手続きは副官



強行着陸した久米団長機、飛行場から意外に離れており途中湿地があり到着は翌朝になった

の仕事だった。基地に残っていてそのことをぬかりなく処理させようと思っておられたのだった。

私は千載一遇の降下作戦参加をはばまれてしまったが、木下中佐も同じ思いだったのか、帰国後の宇都宮天覧演習で、木下中佐のはからいで共に降下することが出来た。この時降下した水田曹長と向山曹長も、始めパレンバン降下の要員だった。

### パレンバン作戦の余光

南方進攻作戦も一段落したので、挺進団司令部は空路、聯隊は海上輸送で内地へ帰った。6月初めには新田原地区に全力集結した。司令部到着早々だったと記憶するが、久米団長は単独拝謁の栄を賜った。

以下私の書いた『陸軍挺進部隊外史』の一部を引用する。

### 第一挺進団の天覧演習

#### 宇都宮で天覧演習を行う事になる

17年7月に入って早々、宇都宮飛行場で降下戦闘の天覧演習が行われるということが示達された。挺進団はまだ復員しておらず、司令部と飛行戦隊は新田原に挺進練習部と同居しており、両聯隊は、宮崎郊外の住吉の廠舎に入っていた。

天皇陛下にパレンバンの戦闘について報告するのだということも、受けた文書の中にあつたと思う。またこのことは実施までは当事者以外には秘匿せよとあつた。これは去る4月18日所謂ドーリットルの空襲があり、このような事があつては大変だと思つたからだった。

パレンバン作戦の報告とあつて、不運の第1聯隊にやらせるのは当然と誰しも思つた。飛行戦隊は南方から帰る時、機種改編の為口式輸送機をサイゴンの航空廠に移管し、まだ百式輸送機(MC)をもらつてないので、2個中隊しかなかったが、挺進練習部の飛行隊を加え4個中隊を揃えることが出来た。全部で40機くらいあつたと記憶する。

参加部隊は挺進団司令部、挺進第1聯隊、集成飛行隊だった。司令部ではパレンバンの時、初め木下中佐、田中中尉(私)、水田曹長、向山曹長が聯隊と一緒に降下しようとしたが、久米団長が「俺が強行着陸機で行くからお前らは基地に残れ」と言われ、残されたので、今度はこの4人が降下することになった。団長は副官らを従え降下後着陸することにきまつた。

ここで一つ裏話を申せば、降下したら仮設敵が反撃に出るが、戦車を持つ

ているということは判つていた。これに対し、速射砲を使わなければならなかった。その頃はまだこの砲は投下できなかった。パレンバンの時は団長の強行着陸機に載せて行つたが、今回もそうしようと考えた。しかし脚を出さずに強行着陸するのならばすぐに曳き出せるが、演習で飛行機を壊す訳にはゆかぬ、通常の着陸姿勢では、速射砲を卸すのは大変で、しかも時間がかかる。そこで速射砲は砲手とともに玉座の反対側の松林の中に隠しておいて、降下部隊が態勢を整えた頃出てきて、戦闘に加わるという案が出た。

聯隊にはそのような芝居をすることは天皇陛下に申訳が無いという者もいたが、高級部員の木下中佐は、滑空機の開発を急がないと速射砲も持つて行けないということをも、中央に認識させるよい機会だと、その案を採つた。

もう一つここで秘話を申せば、初めは降下部隊は新田原から輸送機に搭乗して行くと考えていたが、飛行戦隊は整備員や管理要員を連れて行くので、降下部隊は所沢まで地上輸送で移動する事になった。

輸送の手配は司令部部員の私の役目である。私は直ぐに門司の鉄道輸送司令部に向いた。

この演習については当事者以外には

秘匿せよと言われていたので、私は輸送司令部の担当者に天覧ということは伏せて配車を要求した。

ところが相手はそんなことを急に申し込んでも目下作戦関係の輸送が幅濫しているのに直ぐには応じられないと、私が辞を低くして頼んでも聞いてくれない。困り果てて私は司令官に直か談判することにした。

鉄道輸送司令部の司令官は色褪せた旧式軍服の老佐だった。一目で召集の将校とわかつた。

私がパレンバンの戦闘を天皇陛下に報告する為の演習に行くのだと言つと、俄に立ち上がり不動の姿勢をとり、万難を排し、ご要望に応じますと答え、私の方が感動を覚えた。

### 演習実施

第1聯隊の降下部隊は空輸と鉄道輸送を併用して所沢飛行場に集結した。団司令部からは前述の通り木下中佐以下4名が聯隊と同行降下することになった。当日関東地方は風は穏やかであったが、霞がかかり、ラシオ作戦の轍を履むのではないかと危ぶんだが断乎発進した。パレンバン、ラシオ両作戦と同様、戦闘機の援護のもと堂々と編隊を組み、関東平野を横切つて北上した。宇都宮飛行場では玉座の傍に東條首相

以下の高官が扈從し固唾を飲む中を、先ず急降下爆撃機が上空に現われ、飛行場の一侧に布陣する歩兵、戦車、高射砲に対地攻撃を行い、これに膚接して輸送機編隊が侵入し一斉に降下した。落下傘兵は素早く武装を整え、所在の敵を駆逐して飛行場を占領し、それに続いて輸送機3機で後続部隊が着陸した。これは今後滑空機を開発し、大部隊を続々と送り込めるようにしたいという念願の一端を現わしたものである。やがて反撃に転じた仮設敵と、陛下の御馬前に於て壮烈な攻防を演じ、この演習は終了した。

当日雲低く降下高度は400mであった。



降下演習に行幸



遺骨を抱いて シンガポールに上陸

松浦軍曹は主傘が体にまきつき、予備傘を引いたが予備傘が半分出たときに地面に激突して殉職した。訓練中の事故は白城子における初宿軍曹につき、人目で、榮ある演習に一大痛恨事であった。

天皇陛下には侍従武官を通じ演習部隊に激励と弔問の御言葉を賜った。

本演習は第1聯隊の歴史を飾り、士気を高めること甚大なものがあつた。

天皇陛下から賜った御言葉は聯隊長室に掲げ、第2聯隊がバレンバン作戦に於て南方軍総司令官からもらった感状に対抗し、俺達は、天皇陛下から誉められたのだと胸を張った。

## 正氣の歌

田中 賢一

藤田東湖は詠ず「天地正大の氣粹然として神州に鐘る秀でては不二の嶽となり巍巍として千秋に聳ゆ注いでは大瀛の水と為り洋洋として八州を環る発しては万朶の桜と為り衆芳與に儔ひ難し」と。

また本居宣長は歌う「敷島の大和心を人問はば朝日ににほう山ざくら花」この歌には正氣の文字はないがその精神に隔たることはない。

陸軍最初の特攻隊は富嶽と万朶の二隊。海軍のそれは敷島、大和、朝日、山桜の四隊であることは、いみじくも名付けたものと思う。

正氣とは何ぞ。藤田東湖の詩の題は「文天祥正氣の歌に和す」とある如く語源はそこにある。

「天地正氣有り雑然として流形に賦す下れば則ち河嶽と為り上れば則ち日星と為る人に於いては浩然と曰ひ沛乎として蒼冥に蹙つ皇路清夷に当たれば和を含んで明廷に吐く時窮して節乃ち見はれ一一丹青に垂る」(天地には正しい氣が存在しており、それはもやもやしており形がさだかでない。正氣が下れば山や河となり登れば太陽や星とな

る。それが人間内部にあつては、浩然の氣となり広がって世に満ちる。世が平穩な時には、正氣はなごやかで、朝廷内に行き渡っている。乱世にあっては人の節操として現れ、一つ一つ歴史に残る)

文天祥は宋の末期救国の志に燃え元と戦い捕えられて、嶽中に在って正氣の歌を著す。即ち正氣なるものは国家存亡のとき、湧き出るものである。なれば特攻隊の精神こそ正に正氣である。

文天祥の正氣歌で特攻隊の精神に通ずる個所を拾って見れば、

「是の氣の磅薄する所凜烈として万古に存す其の日月を貫くに当たりては生死安んぞ論ずるに足らん地維頼りて以て立ち天柱頼りて以て尊し三綱実を命を係け道義之が根と為る」(正氣が満ち溢れば、人は敵然としてこの世に存在する。正氣が日月を貫けば、生死など問題ではない。大地を維持する綱は正氣によって保っており、天を支える柱は正氣のよつて尊厳を維持している。君臣・父子・夫婦の三つの道は、正氣によって命脈を保っており、道義は正氣が根底をなしている)

この詩最後は次の句で結んでいる。「風簷書を展べて読めば古道顔色を照らす」と。我らつらつら思う特攻隊の精神こそ古道なりと。

### 私の好きな禅語と 一脈通ずる特攻隊員の遺詠

田中 賢一

竹影 階を掃つて 塵動せず

つき 潭底を穿つて 水に痕無し

(愧安国語)

氣は澄みて心のどけき今朝の空

塵ゆく身とはさらに思わず

川尻 勉 一飛曹 甲飛13 17歳

多聞隊 イ53潜 回天

20年7月29日 沖繩近海

風 疎竹に來る 風過ぎて

竹に声を留めず

雁 寒潭を渡る 雁去りて

潭に影を留めず

(菜根譚)

胸中無生死亦無 疾風迅雷碎敵母

野畔の草召し出されて桜哉

原田 葉 少尉 特操1期 26歳

第27振武隊 20年6月22日

都城東発進 沖繩近海

白雲 幽石を抱く (寒山詩)

大君の御盾となりて吾は今

翼休めん靖国の森

田熊克省 少尉 海軍予備学生13期

27歳 菊水天桜隊 20年4

月16日 串良発 沖繩近海



## ガ島の攻防 (3)

### 海軍の作戦

前二回(61・62号)の記事は「戦史叢書の陸軍作戦」及び「服部戦史」に拠って記述した。従って陸軍の行動が主体となったが、この戦闘の実体は海洋遭遇戦であり、ガ島は戦場の要点と云うべきである。そこで、重複する個所もあるが海軍関係の書物を繕いてみることにする。以下は「海軍」編集委員会の著書の該当部分である。

なお一回では載せきれないので次号に及び「今期の戦史」の標題には乖離するが、了承され度い。

### 外南洋部隊の新設

昭和十七年七月十四日に「鳥海」、第一八戦隊(「天龍」「夕張」「夕凧」)、第七潜水戦隊等をもって第八艦隊(司令長官・三川軍一中将)があらたに編成された。聯合艦隊では、これにラバウル方面にいた第六戦隊(「青葉」「衣笠」「古鷹」「加古」)等を加えて外南洋部隊として、南東方面作戦を担当させることにした。第八艦隊司令部は旗艦「鳥海」で七月二十五日トラックに進出、第四艦隊司令部から申し継ぎを

受けて、二十七日から外南洋部隊の指揮を執り、三十日にはラバウルに進出して司令部を陸上に移した。当時ラバウルには第二五航空戦隊の基地航空部隊が進出して、この方面の航空作戦を担当していたが、八月七日のラビ攻撃に備えて、六日飛行機をラバウルに集中していた。また陸軍の第一七軍司令部もラバウルにあった。

### 米軍の本格的反攻

ソロモン群島のガダルカナル島に二個設営隊(一一設、一三設)を投入し一か月の日時を費して、長さ八〇〇米、幅六〇米の滑走路をほぼ完成した直後、昭和十七年八月七日早朝、約二万名の米海兵隊が奇襲上陸してきた。同時にツラギ基地にも来襲し、同島通信基地から「敵猛爆中、〇四一二」という第一報が飛んだ。日出三〇分前である。横浜空の大艇七機が海上で全滅、艦砲射撃に続いて上陸してきた海兵隊によって、午前六時一〇分「敵兵力大、最後の兵まで守る。武運長久を祈る」という浜空司令(宮崎重敏大佐)の電報を最後に連絡が絶えた。

### 第一次ソロモン海戦

八月七日ツラギからの敵来攻の急報に接した第二五航戦は全力をもって攻撃、空戦により五四機を撃墜したが、

密雲と敵機の妨害により艦船爆撃の効果は少なかった。翌八日も攻撃を続行したが空母を発見することはできなかった。

外南洋部隊指揮官三川中将は「鳥海」に将旗を移し、第六戦隊、第一八戦隊を率いて八日夜半ルンガ泊地に突入、砲戦、魚雷戦により所在艦艇全部を撃沈破したが、一撃で引き揚げて、陸揚げ中の多数の輸送船団には一撃も触れなかった。このため敵上陸部隊の居坐りを許してしまった。なお、わが方にはほとんど被害がなかったか、十日朝カビエン近くまで引き揚げたところまで「加古」が敵潜の雷撃で沈没した。

当時ガ島には二個設営隊のほかは陸戦隊二四七名がいたにすぎなかった。三川中将はラバウルにいた陸戦隊を集めて五一九名の増援隊を編成し、「明陽丸」と「宗谷」に分乗、「津軽」等を護衛につけ、ガ島に急派することに

して七日夜出発した。しかし、八日の飛行偵察によると敵の揚陸兵力は意外に大きく、引き返さざるを得なかった。ツラギ方面においてはツラギ島に八四警約四〇〇名、ガブツ島に同隊派遣隊の五〇名と浜空本隊三四〇名、兵装関係の設営隊一五〇名がいて頑強に抵抗したが、八日朝有力な敵増援隊が上陸してきたので、同日夕刻にはほとんど

玉砕した。ガ島では兵力が少ないので飛行場を捨てて西方に退り、陣地を構築

して対峙した。

### ガ島来攻に対する判断

米軍ガ島来攻の報により、聯合艦隊司令部は敵の本格的反攻と判断して八月八日午前二時次のように発令した(電令作第一九八号)。

一、外南洋部隊、内南洋部隊、基地航空部隊を南東方面部隊と呼称、基地航空部隊指揮官指揮の下に攻撃続行。

二、前進部隊、機動部隊は準備出来次第南洋方面に進出支援。

三、「B」作戦(印度洋交通破壊作戦)を取り止め、七戦隊、三水戦隊等ダバオに回航。

四、本職「大和」、第七駆逐隊、「春日丸」を率いて八月十八日ころ内地発南洋方面に進出の予定。

聯合艦隊の第二段作戦兵力部署では、第二航空艦隊を基幹とする基地航空部隊は東正面の作戦に専念することになっていたが、七月十四日第八艦隊新設に伴い、東および南東正面に対する航空戦を担当することになり、「第四艦隊、第八艦隊担任区域方面に敵来襲の際、要すれば第二航空艦隊司令長官は第四艦隊、第八艦隊、第六艦隊を統一指揮す」となった(聯合艦隊電令作第一八一号)。

当時第一一航空艦隊は司令部をテナンに置き、次の配備にあった。

二二航戦 内地

二四航戦 内南洋(マーシャル方面)

二五航戦 南東方面

二六航戦 内地、サイパン、テナン

なお、二一航戦、二三航戦は戦時編制で南西方面艦隊に編入されて、ラングーン、ケンダリー、クーパーン等に配備されていた。

二五航戦に戦闘機以外の元山空を加えた第五空襲部隊は南東方面の作戦を担当し、ソロモン諸島両側の哨戒を行うほか、ニューギニア方面の攻撃に任じていた。ツラギで司令以下が玉砕した浜空も二五航戦の一部隊である。八月七日にラビを攻撃する予定でラバウルに集中していた第五空襲部隊は、敵軍ツラギ来襲の報により全力を挙げて攻撃に向かったが、空母を発見できず大型巡洋艦を爆撃したにとどまった。

八日、九日も攻撃を続行した。

八月十日、第五空襲部隊の攻撃隊も、ガ島方面に進出した潜水艦も、付近に敵水上艦艇を認めなかった。八月八日ラバウルに進出した南東方面部隊指揮官塚原中將は、七日以降のわが攻撃によって敵攻略部隊を撃退し得たものと判断した。偵察機がツラギ、ガ島方面で相当数の舟艇を認め、高角砲の射撃を受けていることから、同方面が敵に

占拠されていることは確実であるが、それは敗残のものと判断したのである。第五空襲部隊は十一日、十二日も続いて陸上の強行偵察を行ったが、敵主力はすでに撤退したか、撤退を準備中であるとの判断を強めた。一方、十二日に「呂33潜」がハンター岬見張所との連絡に成功し、「呂34潜」もタイポ岬見張所との連絡に成功した。しかし、その報告は区々で陸上戦闘の状況は明確ではなかった。「伊133潜」は十三日敵情偵察の結果を総合して、ルンガ岬付近の敵陸上兵力は相当有力なものであると報告した。

### ガ島奪回作戦開始

第八艦隊ではまず横五特の一部、高橋大尉以下約百名を「追風」で十六日夜タサファロンガに揚陸した。高橋隊は十七日午前中に守備隊との連絡に成功し、その電信機によってラバウルとの直接連絡が復活した。

第八艦隊司令部では第一七軍と協議のうえ、一木支隊および陸戦隊をなるべく速やかにガ島に送り、急遽奪回の方針を決定した。

一木支隊先遣隊(九〇〇名)は駆逐艦六隻に分乗して、八月十六日トラック発、十八日夜ガ島タイポ岬に上陸した。輸送船二隻に残された後続隊は二水戦護衛のもとに同じく十六日トラッ

ク発南下した。

敵兵力は約二千名で脱出に腐心しているという情報を受けた一木支隊長は、後続部隊の到着を待つことなく攻撃を決意して西進、二十一日未明イル川砂州から攻撃を開始した。しかし優勢な敵の反撃を受け、午後には戦車に背後を蹂躪されて全滅するに至った。

後続の第二梯団は八月二十二日ガ島上陸の予定であったが、二十日朝、第五空襲部隊の哨戒機がガ島南東海面に空母を含む敵部隊を発見した。続いて同日昼頃、空母を含む他の部隊発見の報があり、また、ガ島所在部隊から敵艦上機二〇機以上が同飛行場に進出したことを報じてきた。塚原南東方面部隊指揮官は翌二十一日の航空攻撃、水上部隊の策応および輸送船団の一時退を下令した。続いて、第二梯団を、聯合艦隊主力支援の下に二十四日上陸せしめることにして、その支援を要請した。

これよりさき、第一七軍は歩兵第三五旅団(川口支隊)をガ島に充てることにしたので、その輸送に関して、第一一航空艦隊、第八艦隊、第一七軍の間で八月十八日に協定を行った。川口支隊は十六日パラオ発、二十日トラック着の予定であった。十三日に南東方面部隊に編入された三水戦を護衛に当たって、二十四日トラック発、二十八日

ガ島上陸と決定された。この協定は一木支隊と横五特でガ島飛行場を占領し、二十七日には海軍戦闘機が同飛行場に進出するという前提によるものであった。

### 機動部隊の再建

七月十四日の戦時編制改訂によって、航空母艦を主力とする第三艦隊が編成された。従来の機動部隊を建制部隊としたもので、その編制は次のとおりであり、司令長官には南雲第一航空艦隊長官が転補された。

第一航空戦隊「翔鶴」「瑞鶴」「瑞鳳」

第二航空戦隊「龍驤」「隼鷹」

第一一戦隊 「比叡」「霧島」

第七戦隊 「熊野」「鈴谷」「最上」

第八戦隊 「利根」「筑摩」

第一〇戦隊 「長良」第四、一〇、一六、一七各駆逐隊

「翔鶴」は七月十八日修理完成、「瑞鶴」「龍驤」はともに行動に支障がなかったが、「瑞鳳」「隼鷹」は小修理中であった。また、「飛鷹」は七月三十一日竣工とともに第二航空戦隊に編入される予定であった。各母艦の飛行機は岩国、鹿屋、笠之原、鹿児島

の補充に努めていた。第七戦隊は、ミッドウェーで傷ついた「最上」が内地回航のためトラックで仮修理を行ってお

り、「熊野」「鈴谷」は印度洋交通破壊作戦のため第一南遣艦隊司令長官の指揮下に入って、速くマレー半島西岸のメルギーに進出していた。その他の戦隊は、第一〇戦隊の二個駆逐隊が南東方面で活躍していたほかは、各隊とも行動可能な状態であった。

### 聯合艦隊の前線進出

八月十日、第二艦隊、第三艦隊は各幕僚が聯合艦隊旗艦「大和」に集まって作戦の打ち合わせを行った後、南洋方面進出を開始した。前進部隊指揮官近藤中将は二水戦司令官に対して、速かにトラックに進出、一木支隊のガ島輸送に關して関係部隊と協議するよう下令した後、その他の前進部隊を率いて翌十一日内海発、十七日トラックに進出した。機動部隊は第一航空戦隊の「瑞鳳」と第二航空戦隊の「龍驤」を入れ換え、第二航空戦隊を残して八月十六日柱島泊地発、聯合艦隊旗艦等は同十七日柱島出撃、いずれもトラックに向った。

八月二十日、敵機動部隊発見の報に接した聯合艦隊司令部は、支援部隊（前進部隊、機動部隊）にガ島北方海面への進出を下令した（電令作第二二

四号）。支援部隊指揮官である第二艦隊司令長官近藤中将は、この電令により前進部隊に出撃を命ずるとともに、その行動を示して機動部隊はこれに策応して行動するよう下令した。機動部隊はトラック入港を取りやめ、二十一日午前五時前進部隊と会合した。洋上の会合であるため作戦打ち合わせを行うこともできず、機動部隊から飛行機で書類を投下して、その行動を通知したにすぎなかった。

### 第二次ソロモン海戦

一木支隊第二梯団の上陸を八月二十四日として、支援部隊、外南洋部隊の支援行動を準備していたが、米軍側も増援を開始しており、二十一日も空母を含む部隊その他がガ島南方海面に認められ、また輸送船団がガ島に向っている状況であった。基地航空部隊は敵艦艇およびガ島飛行場の攻撃を企図したが、天候に妨げられてほとんど効果を挙げ得なかった。やむなく駆逐艦による敵輸送船と陸上の攻撃を繰り返した。機動部隊は二十四日「利根」「龍驤」駆逐艦二隻を分派、第八戦隊司令官指揮のもとにガ島飛行場を攻撃することを命じ、本隊は索敵を行いながら南下した。正午すぎ敵機動部隊「サラトガ」「エンタープライズ」を発見、

攻撃を加え、空母二隻に命中弾を与え、たが撃沈するに至らなかった。第二次攻撃隊は指揮官機通信不良などのため敵を発見し得なかった。この間に「龍驤」は敵艦上機の攻撃を受けて沈没した。この作戦中「翔鶴」は敵降爆二機の攻撃を受けたが被害はなかった。この敵機は同艦のレーダーで探知し、艦橋に報告されていたが、艦橋が混乱していたため指揮官に通じていなかった。これがわが海軍でレーダーが実用された最初である。この海戦は第二次ソロモン海戦と称された。

一木支隊第二梯団は敵機の接触を受けて反転したため、一日繰り下げて二十五日夜の上陸を目的に進出中、同日未明敵機の爆撃を受けて「神通」損傷、「金龍丸」、「睦月」沈没の被害を受け、揚陸を取りやめることになった。この結果、一木支隊、川口支隊の輸送は軽快艦艇による鼠上陸に変更された。

### 鼠輸送

鼠輸送（夜暗を利用して動き回ることからいわれた）の第一次輸送は二四駆逐隊（一木支隊）二〇駆逐隊（川口支隊）により二十八日夜揚陸の予定で進出したが、二〇駆逐隊が二十八日午後敵機の爆撃を受けて、「朝霧」沈没、「夕霧」「白雲」損傷のため揚陸を中止した。翌二十九日

夜は二四駆逐隊に一一駆逐隊（川口支隊）を加えた駆逐艦五隻をもって、夕イボ岬に一木支隊三〇〇名、川口支隊四五〇名を揚陸させた。

川口支隊長が舟艇機動による揚陸を主張、増援部隊指揮官の第二水雷戦隊司令官田中頼三少将がこれに同調したため三十日夜の揚陸は「夕立」と哨戒艇四隻をもって実施、一木支隊七〇〇名を揚陸した。川口支隊長の意見具申に対し、舟艇機動を並行実施することになったので、同支隊長は駆逐艦輸送に応じ、駆逐艦九隻をもって支隊長以下二〇〇名を三十一日夜タイボ岬に揚陸させた。なお、増援部隊指揮官は三水戦司令官橋本信太郎少将に交代することになった。その後も連夜駆逐艦輸送を行ったほか、九月二日夜「津軽」によって陸軍高射砲を揚陸した。一方、川口支隊の舟艇機動による輸送は九月四日敵機の攻撃を受けたうえ、風浪のため四分五裂となつて、翌五日一部兵力がガ島北西岸に上陸したにとどまった。

毎夜のように行われた駆逐艦による輸送を、アメリカ側はトウキョウ・エクスプレス（東京急行）と呼ぶようになった。

### 後手にまわった作戦指導

大本営陸軍部はこの頃大陸方面の作

戦研究に重点を指向し、印度アッサム州に進攻しようとする第二一号作戦と重慶進攻を目的とする第五一号作戦に没頭して、南東方面は単なる守勢作戦の一翼にすぎないとみていた。また、南東方面ではポートモレスビー攻略の「レ」号作戦に主力を注いでいた。したがって米軍のガ島来攻に対しては、わずか九〇〇名の一木先遣隊で攻撃するように指導して失敗した。ニューギニア方面においてもブナ輸送が困難となり、ポートモレスビー陸路攻略も途中が険峻な難路であることが判明した。

団フィリピンにあった迫撃第三大隊を第十七軍に増強した。

聯合艦隊と第一七軍の間ガ島奪回作戦に関する協定は九月五日に締結された。ガ島の陸軍が九月十一日総攻撃開始、一挙に飛行場を攻略することを基準としたもので、聯合艦隊は全力を挙げてこれを支援することになった。九月五日トラックに引き揚げて燃料弾薬の補給を行った支援部隊は、九月九日前進部隊、翌十日機動部隊の順に出港、ガ島北方に進出した。川口支隊の総攻撃は準備の関係から十三日になつたが、大本営の要望により十二日に繰り上げられた。基地航空部隊は九日以後極力ガ島攻撃を実施した。

川口支隊は九月十一日ジャングルに入り、十二日午後四時進撃開始の予定と報告をした後連絡が絶えた。十三日未明、飛行場占領の報告があり、三水戦の奇襲隊、六空零戦の挺身隊などが一斉に進撃を開始したが、後刻誤報と判明した。川口支隊からの連絡がないままに、十四日も奇襲隊は間合をつめて待機した。その日の夕刻、青葉支隊に同行した第一七軍参謀から、川口支隊は十四日夕刻攻撃開始と報告してきた。十五日も各隊待機を続けたが、攻撃失敗を報ずる川口支隊長の十四日付電報が届いたので、作戦を立て直すことになった。

陸海軍部協議の結果、八月十二日の陸海軍中央協定中「レ号作戦を既定計画に基き速に遂行すると共に、ソロモン海戦の成果を利用し、陸海軍協同し速にソロモン群島の要地を奪回す」という作戦方針を「陸海軍協同して速にソロモン群島の要地を奪回すると共にレ号作戦を既定計画に基き努めて速に遂行す」と改め、作戦要領もこの線にそって、ガ島奪回を第一とすることに

して、八月三十一日大海指第一三六号をもって指示した。陸軍部も同じ日にこれを発令し、ジャワにあった第二師

これよりきき、八月三十一日「伊26潜」がガ島南東海面で米空母を雷撃した。戦後判明したところによれば、この母艦は「サラトガ」で、巡洋艦に曳航されて避退、修理に三か月を要したということである。ついで九月十五日、「伊19潜」はサンクリストバス島南東で、空母「ワスプ」を撃沈し、新型戦艦「ノースカロライナ」および駆逐艦にも損害を与えた。

### 輸送作戦強化

聯合艦隊と第一七軍は九月十五日から作戦立て直しの交渉をはじめ、十七日合意に達し、陸上作戦の総攻撃開始は十月上旬末と予定された。第八艦隊は第一七軍と細部について協定を行い、次のように取り決めた。

一、カミンボ湾に上陸拠点を確保する。  
二、青葉支隊残部及び第二師団主力をガ島に輸送し、航空撃滅戦の成果を利用し要地を奪回する。攻撃開始の時機を十月中旬と予定する。

しかし大本営における海軍部と陸軍部の戦局判断には食い違いがあった。海軍部は、米軍のガ島進出を本格的反攻の第一歩と見ていた。それに対して陸軍部は、敵の本格的反攻は昭和十九年以降であり、ガ島来攻は豪州防衛のためのものであるか、または太平洋に第二戦線を構成して日本軍の西攻を牽

制し、細く長い消耗戦を指導するものであると見ていた。そして川口支隊の攻撃失敗は、準備不十分のまま攻撃を急がせたことが主因であり、第二師団主力を中心に火砲、戦車その他の装備資材を完璧にして、一挙に決戦を挑めば戦局は好転し得ると考えていた。第一七軍に第三八師団その他の兵力増強を発令したが、これはラビ、ポートモレスビー方面に使用する予定であった。また、大本営派遣参謀を辻政信中佐に代えて、より積極的な作戦指導を期待した。

ガ島に対する輸送は九月十六日再び開始され、連日駆逐艦をもって弾薬糧食と陸軍部隊を揚陸した。水上機母艦「日進」をもって重火器輸送を九月十九日に行う計画を立てたが、敵大型機のラバウル空襲や天象(月明期に向う)の関係などによって、一時中止のやむなきに至り、支援部隊もトラック回航待機を命ぜられた。

九月中旬以降敵機のラバウル来襲が激化した。ブナ、ラエ方面も同様で、ブナ基地は九月二十五日頃から使用不能に陥った。ガ島方面に対しては十月十五日までに第二師団主力、第三八師団の一部を送り、二十日頃総攻撃を行うことになったが、「日進」による重火器輸送の中止に続いて駆逐艦輸送も中止したうえ、小舟艇をもってする蟻

輸送も、海上のうねりのため意の如くならず、次の月暗期の輸送を待つとすれば総攻撃が一月遅れる見通しとなった。ここで第一七軍から大輸送船団による集中輸送の提案があり、海軍側もこれを容認して十月三日、六日に「日進」で重火器を送り込んだ後、十四日に高速船団五隻で強行上陸を行うことになった。聯合艦隊司令部ではこの案を承認し、高速戦艦による飛行場砲撃を計画した。

艦九隻、十日駆逐艦三隻をもって輸送を行った。

十一日は「日進」「千歳」駆逐艦六隻をもって輸送を行うほか、第六戦隊が飛行場砲撃を行う予定であった。輸送は無事終了したが、第六戦隊は米重巡二、軽巡二、駆逐艦五の邀撃を受け、敵駆逐艦一を撃沈、軽巡一、駆逐艦一大破、重巡一小破の戦果を挙げたが、「占鷹」「吹雪」が沈没、旗艦「青葉」中破の被害を受け、五藤存知司令官が戦死した。「占鷹」救援に向った「白雲」「叢雲」は十二日朝、敵機の攻撃を受け「叢雲」が航行不能となり、続く攻撃により大火災を起こして処分された。「叢雲」救援に向った「朝雲」も至近弾により沈没した。いわゆるサボ島沖夜戦である。

基地航空部隊は十月二日、三日ガ島航空撃滅戦を行った。「日進」は往路敵機の攻撃を受け至近弾で軽微な損傷を受けたが、三日夜タサファロンガに入泊おむね予定の揚陸を行った。同時に駆逐艦七隻による輸送も成功した。続いて四日に駆逐艦五隻、五日、六日に各駆逐艦六隻で輸送を行った。五日の往路に「峯雲」「村雲」が空襲を受け、至近弾により被害を受けて引き返したほか、目的を達した。「日進」の第二次輸送は七日ショートランドを出港したが、上空直衛機発進不能のため八日に延期、往路二回、帰路一回雷爆撃を受けたが、無事揚陸を完了した。蟻輸送は水路、天象、海象の研究不足と大発の耐波性不良のため失敗に終わった。そのため、軽巡「龍田」水上機母艦「千歳」などを使って輸送を強化することとなり、十月九日「龍田」駆逐

艦九隻、十日駆逐艦三隻をもって輸送を行った。

### 飛行場砲撃火の海と化す

第二師団司令部は十月三日上陸、第一七軍司令部も九日上陸して、飛行場砲撃のための砲兵陣地と、次期攻撃の拠点を失っていることを知り、船団輸送を強行するため艦砲射撃を海軍側に要望した。聯合艦隊司令部は船団輸送を十五日と予定し、十三日夜第三戦隊をもって飛行場を砲撃するよう下令した。第三戦隊（「金剛」「榛名」）、第二水雷隊をもって挺身攻撃隊を編成、十三日未明支援部隊を離れルンガ沖に突入、午後一時三六分から三式弾をもって飛行場の砲撃を開始した。「金剛」は三式弾（焼夷榴散弾）一〇四発、一式弾（徹甲弾）三三二発、「榛名」は零式弾（通常弾）一八九発、一式弾二九四発を打ち込んで飛行場一面を火の海とした。

十二日ラバウル発の輸送船四隻（内二隻海軍）、十三日ショートランド発の輸送船二隻は、四水戦護衛のもとに十四日夜半タサファロンガ入泊、揚陸を開始した。この夜外南洋部隊の「烏海」「衣笠」で再び飛行場を砲撃し、二〇糶砲弾約四百発を打ち込んだ。水偵、零観、零戦をもって上陸警戒を行ったが、そのすき間をついて来襲した敵機により輸送船三隻（「笹子丸」「吾妻山丸」「九州丸」）を失った。人員、重火器全部、弾薬糧食の八割を揚陸し得たが、三日後の十七日揚陸場所に敵機の爆撃と駆逐艦の砲撃を受け切角揚陸した軍需資材の大部分を焼き払われてしまった。十五日夜には第五戦隊旗艦「妙高」と「摩耶」が飛行場と新飛行機置場を砲撃した。

十七日夜軽巡三隻、駆逐艦一五隻をもって陸兵二一〇〇名、野砲六門、速射砲一二門等をエスベランス岬およびタサファロンガに揚陸し、「村雨」「時雨」が飛行場砲撃を行った。十九日夜さらに駆逐艦三隻をもってタサファロ

ンガ輸送を行ったが、「浦波」が被弾のため片舷航行となって引き返したうえ、他の二隻も敵機の妨害のため小発を発進させただけで引き返した。

### 南太平洋海戦

十月九日第一七軍司令部がガ島に進出したが、飛行場攻略の拠点と飛行場制圧射撃の砲兵陣地に予定していたマタニカウ河右岸が、七日敵の攻撃を受け、八日夕刻にはクルツ岬に上陸してわが側背をついてきたので、海岸道方面を主攻撃正面とすることは、再考を要することになった。地形偵察の結果、アウステン山方面は密林の度合いが大きくなく、迂回作戦可能のように見えたので、正面正攻法から迂回奇襲作戦に切り換えた。第一七軍から十月二十二日攻撃開始の予定を伝えられた聯合艦隊は、これを基準として行動を開始した。

ところが、二十一日になって攻撃開始日を一日延期する電報があり、二十三日さらに一日延期を報じてきた。この報により前進部隊、機動部隊、外南洋部隊はいずれも反転を繰り返し、対潜警戒と所在秘匿に腐心した。なお、二十日夜「飛鷹」が右舷発電機室で火災を起こし、最高速力一六節となり、修理の見込みが立たないので、二航戦旗艦を「隼鷹」に移し、搭載機を陸上

基地と「隼鷹」に移してトラックに向った。同艦は、翌十八年三月まで作戦に参加できなかった。

二十四日午後一時三〇分、ガ島から「二一〇〇飛行場占領」の報があり、突撃隊、第二攻撃隊をはじめ各隊進撃を開始したが、二十五日午前二時三〇

分「飛行場は未だ占領しあらず、飛行場付近にて激戦中」の報があった。この日「由良」と駆逐艦が昼間ルンガ沖に突入し、敵砲兵陣地を砲撃し仮装巡洋艦、駆逐艦等を撃沈したが、「由良」は敵機の爆撃によって大火災を起こし、処分するに至った。翌二十六日午前

一時五分に至って「陸軍主力未だ飛行場に入らず、敵の防禦堅固にして後図を策するの要あるを思わしむるものあり」との連絡参謀の電報を受信した。ついで「〇四三〇敵は飛行場を使用しつつあり」との電報があったので、外南洋部隊指揮官は各隊にシヨートランド帰投待機を下令した。この総攻撃失敗によって、ガ島飛行場奪回作戦は再び振り出しにもどった。

十月二十日以来、ガ島飛行場総攻撃が再三延期されるので、支援部隊は敵潜の待ち伏せと敵空母の東からの横なぐりを考えて、類似の行動を避けるように努めたが、毎回配備点につくために、同一海面の南北往復運動を繰り返さねばならなかった。この間機動部隊、

前進部隊ともたびたび敵大型機に発見され、触接を受けたが、攻撃は受けなかった。二十五日攻撃再開の通知を受けた。二十五日攻撃再開の通知を受けた。二十五日攻撃再開の通知を受けた。二十五日攻撃再開の通知を受けた。

すでに、触接を打ち切ったものと判断した機動部隊（「翔鶴」「瑞鶴」「鳳」「直衛駆逐艦」は午前一時三〇分反転し、二四節で北上しながら黎明二段索敵を行ったところ、四時五〇分、敵空母部隊を発見した。ただちに閩衛少佐指揮の第一次（零戦二一、艦爆二二、艦攻二〇、五時二五分発進）、村田重治少佐指揮の第二次（翔鶴隊零戦五、艦爆一九、六時一〇分発進、瑞鶴隊零戦四、艦攻一六、六時四五分発進）攻

撃隊を発進させた。この間「瑞鳳」は、五時四〇分敵索敵機の爆撃を受け、一弾が後部に直撃、発着艦不能となった。第一次攻撃隊は、六時五五分米空母「ホーネット」隊を爆雷撃、空母撃沈、大巡一大破、駆逐艦一轟沈、一大破と報告した。第二次攻撃隊は八時二〇分、

第二集団（米空母「エンタープライズ」等）を爆撃、続いて雷撃、空母、戦艦、巡洋艦各一撃沈を報じた。前進部隊に編入されていた角田覚治少将指揮の二次攻撃隊（零戦一二、艦爆一七）発進後「黒潮」「早潮」とともに機動部隊

に編入された。二航戦第一次攻撃隊は大破した空母のほかに、さきの第二次攻撃隊の手によって傷ついた空母「エンタープライズ」を発見、攻撃して命中弾三弾を与えたと判断した。

一方、「翔鶴」は午前七時二七分敵艦爆約十機の緩降下爆撃を受け、直撃弾三発により飛行甲板後半、格納庫中部を破壊され火災を起こした。二航戦の第二次攻撃は、上空直衛機の発艦等により遅れて、零戦八、艦攻七（一部一航戦帰還機を含む）で編成、一一時六分発進、続いて一一時一五分、一航戦第三次攻撃隊（零戦五、艦爆二、艦攻六、索敵機および帰還した攻撃隊で編成）発進、両隊とも第三集団の空母

その他を攻撃した。第一次攻撃隊にさきだつて発進させた触接機（二式艦偵）は通信不能となり、かつ陸上基地を経由して帰還が後日になったほか、触接機も適当な情報を送ってこなかった。また未帰還機も多く、敵兵力や戦果を明らかにすることはできなかった。そのためトラック

帰投の途中で「瑞鶴」に関係者を集めて検討した結果、敵は三群で空母三隻とも撃沈という事に落ち着いた。しかし米軍側の発表によれば「ホーネット」沈没、「エンタープライズ」損傷となっている。

り将旗を「嵐」に移し、翌朝に至って「瑞鶴」に移乗した。この朝の索敵で敵を発見し得なかったため、トラックに引き揚げる事になった。なお、二十六日の戦闘中「筑摩」は数十機の攻撃を受け、艦橋その他に被害を受けた。また、夜戦を企図して進出した前進部隊は大傾斜、誘爆延焼中の「ホーネット」を処分した。

この戦闘を南太平洋海戦と呼称し、空母四隻、戦艦一隻、艦型不詳一隻を撃沈したと大本営海軍部では発表した。また、二十九日には聯合艦隊司令長官に勅語が下賜された。

### 第三次ソロモン海戦

飛行場総攻撃の失敗によってガ島作戦は振り出しにもどり、長期化を覚悟しなければならなくなった。そのため聯合艦隊司令部では編制替えと艦船修理を企図し、第七戦隊、第二水雷戦隊その他を外南洋部隊に編入（十一月三日付）、「千歳」「日進」第三水雷戦隊等（十一月六日付）および第四水雷戦隊（十一月三日付）を原隊に復帰させることを十一月一日発令した。ついで

翌二日第一航空戦隊等の内地回航、整備訓練と、第三艦隊所属隊・艦の前進部隊編入を発令した。

十一月二日、ガ島からは敵の強襲が報ぜられ、敵航空兵力の徹底的撃滅と

駆逐艦による兵力の急送、船団輸送の確実な実行を要望する電報が相つた。聯合艦隊司令部では、関係陸海軍部隊と再三意見調整の末、第一一戦隊（「比叡」「霧島」）および重巡による制圧射撃のもとに、十一月十三日頃大規模船団輸送を行うことを決定、七日これを内報した。第一一航空艦隊（基地航空部隊）は十一月一日の戦時編制改訂によって、航空隊の名称が数字番号に改められたが、二五航戦を内地に帰投させ、二一航戦、二六航戦にこの方面の作戦を担当させることにした。

ガ島の陸軍部隊は、弾薬糧秣がつきで全滅に瀕しているの、増援部隊は全力を挙げて第三八師団歩兵団を輸送することになり、十一月二日、続いて五日、「天龍」と駆逐艦全力、一六隻をもって輸送を敢行した。聯合艦隊兵力部署変更による兵力入れ換えの後、七日夜駆逐艦一隻、八日夜同一隻をもって輸送を行った。七日は敵機、八日は魚雷艇の妨害があったが無事成功した。十日夜も駆逐艦五隻をもって第三八師団長を含む六〇〇名をタサファロンガに送り込んだ。

一方、陸軍輸送船団によるガ島輸送は、十一月十二日夜第一一戦隊飛行場砲撃、十三日夜輸送船団一隻タサファロンガおよびエスペランス入泊、外南洋部隊重巡二隻飛行場砲撃の計画のも

とに発動された。十二日夜阿部弘毅中将指揮する砲撃隊は雷鳴を伴う激しい雨のなかで、隊形が乱れたまま敵巡洋艦隊を発見、照射砲撃を開始した。彼我きわめて接近していたので、「比叡」の射撃は初弾から命中したが、敵の中小口径砲、機銃が「比叡」艦橋に集中して前橋楼に火災を起こし、上甲板以上は薙ぎ払われて一時砲戦力を失った。「比叡」は敵駆逐艦と二〇〇米まで接近、辛うじて衝突を回避するほどの混戦となり、舵機室、舵柄室満水、直接操舵も人力操舵もできなくなった。「霧島」は有効な射撃を行い直衛駆逐艦は乱戦となった。この撃ち合いで「比叡」舵故障、駆逐艦「夕立」「暁」沈没の被害があったが、米軍側は軽巡「アトランタ」、駆逐艦四隻沈没、重巡二隻、軽巡二隻、駆逐艦三隻損傷、後に損傷軽巡「ジュノー」が「伊26潜」の雷撃によって沈没したので、無傷であったのは駆逐艦一隻のみであった。

しかし、翌十三日敵機の反復雷撃を受け「比叡」はついに処分せざるを得ないことになり、夜になって総員退去後、味方駆逐艦が魚雷をはなつて沈めた。聯合艦隊司令部は、夜戦勃発の報により輸送船団の入泊を一日延期し、翌朝になって外南洋部隊と「霧島」を含む前進部隊に残敵掃討と飛行場砲撃を命じた。

十三日夜外南洋部隊の飛行場砲撃は「鈴谷」「摩耶」「天龍」によって行われ、火災、誘爆を認めたが、引き揚げる途中敵機の爆撃を受け、「衣笠」沈没、「鳥海」「五十鈴」「摩耶」損傷の被害を受けた。輸送船一隻はいったんショートランドに帰ったが、同日午後田中頼三少将の指揮する一一隻の駆逐艦に守られて出港、ガ島に向った。十四日日出後まもなく敵機に発見され、午前午後にわたり延べ一二〇機の攻撃を受けた。第一次第二次は被害がなかったが第三次から第八次までの攻撃により七隻被爆、うち六隻が沈没、一隻は引き返すという大きな損害を受けた。「船団はガ島に進撃せよ」との聯合艦隊命令により、二水戦司令官乗艦の「早潮」と第一五駆逐隊の三艦が残りの輸送船四隻を護衛してガ島に向い、他の駆逐艦は午後六時頃まで約五千名の将兵の人員救助に当り、以後船団を追った。

前進部隊は十三日夜第三戦隊から駆逐艦に燃料を補給し、ガ島砲撃のため十四日未明から南下を開始した。基地航空部隊とR方面航空部隊の哨戒機は十四日午後「巡洋艦四、駆逐艦二」「空母一、戦艦一、巡洋艦三」「戦艦二」等の敵部隊がガ島南方を北上中と報じた。前進部隊指揮官近藤中将は、従来敵艦隊は夜間ガ島から離脱する習性がある

るので、敵主力は今夜ガ島に近寄らず、巡洋艦、駆逐艦の一隊のみがわが企図の妨害に出るものと判断し、まずこの敵を撃破したのち飛行場を砲撃する決意をした。前進部隊は会敵を予期しながら進撃し、船団はその後方を続航していた。午後七時三〇分、索敵機からエスペランス岬の西約二十海里に、敵味方不明の巡洋艦二、駆逐艦四ありと報じてきた。

第二艦隊司令官近藤中将直率の射撃隊は、旗艦「愛宕」「高雄」「霧島」の順に単縦陣をつくり、掃蕩隊（「川内」第一九駆逐隊）に続いて南下中、「敷波」が八時ちょうど右前方に敵発見を報じた。「愛宕」も八時三一分この敵を認めた。掃蕩隊は、九時一六分から敵の星弾射撃を受けた。別動した駆逐艦「綾波」は九時三〇分雷撃を行い巡洋艦、駆逐艦各一隻撃沈を報じたが、同艦は敵の集中砲火を受けて大破炎上した（のち沈没）。直衛を解いた軽巡「長良」、駆逐艦五隻は、九時三〇分敵を認めて砲撃を開始、続いて魚雷を発射、北西方に避退して次発装填を行った。前進部隊指揮官は戦艦らしきものを認めながら、敵は巡洋艦以下と思ひ込み、かつ、水雷部隊の戦闘は有利に進展中と判断し、飛行場砲撃を行うために反転ロンガに向った。

射撃隊はサボオ島の南に向って南東進中、九時五五分重巡らしい艦影を認め、まもなく戦艦と気づいて砲撃を開始、好射点で魚雷を発射した、主砲に続いて副砲、高角砲も砲戦に参加、「愛宕」「高雄」「霧島」の集中射撃により、敵戦艦の主砲を沈黙させ、漸次傾斜、戦闘力を失わせた。しかし、他の敵戦艦の猛射を受けた「霧島」は火災を起こし航行不能に陥ったので、前進部隊指揮官はガ島砲撃を取りやめ離脱行動を開始した。

火災と舵機室満水のため航行不能となった「霧島」は、一時立ち直るかに見たが再び傾斜が加わり、十五日午前一時二五分ついに沈没した。前進部隊指揮官は午後一時四分「戦場を整理し北方に離脱す」と報じ、攻撃隊には「敵に接触せる隊艦は襲撃を決定したる後北方に離脱せよ」と下令した。

この夜の戦闘は、駆逐艦四隻を伴う新式戦艦「ワシントン」「サウスダコタ」と第四戦隊（「愛宕」「高雄」）、「霧島」、軽巡二隻、駆逐艦九隻の間で行われ、駆逐艦三隻撃沈、戦艦一隻、駆逐艦一隻を大破せしめたが、「霧島」「綾波」沈没の被害を受けた。当時戦艦一隻、重巡二隻、駆逐艦四隻撃沈の戦果を報じたのは、魚雷の自爆を命中と誤認したもの含まれると思われる。輸送船団は十五日午前一時四〇分、

タサファロンガ泊地に進入擱坐して揚陸を開始した。同六時以後敵機の爆撃と陸上および巡洋艦、駆逐艦の砲撃で輸送船四隻とも火災を起こした。人員二〇〇〇名は、ほとんど無傷で上陸したが、隨身兵器、軽火砲、弾薬糧食は、一部のほかは揚陸できなかった。

戦艦二隻、重巡一隻、駆逐艦三隻、輸送船一隻などの犠牲を払って敢行された大船団輸送作戦は、完全に失敗に終わった。この結果、第三八師団主力の到着を待つて態勢挽回を期していた第一七軍の計画は、根底から覆り、ガ島奪回作戦の前途に暗影を投じたのであった。

## ソロモン航空消耗戦

### 遅きに失した正攻戦法

昭和十七年十一月九日、大本営は第八方面軍司令部と第十八軍司令部の編成を発令し、ついで十六日に各軍の戦闘序列を発令した。第一七軍中、在ニューギニア部隊を基幹として新たに第一八軍を編成し、同方面の作戦を分担せしめ、第一七軍をソロモン方面作戦に専念せしめることにしたものである。両軍の上に第八方面軍（司令官・今村均中将）を新設、航空部隊と予備兵力等を直属させた。この航空部隊は飛行師団に増強する予定であった。

これとともに「南太平洋作戦陸海軍中央協定」が締結された。これまでは、米軍が島来攻の際に急いで作られた「情勢に應ずる東部ニューギニア、ソロモン群島に関する陸海軍中央協定」を戦況に応じて増補しながら、いわば

抽速主義で押切る戦法であったが、航空を主体とした正攻戦法に改めたものである。はじめの陸軍部の案では、「ソロモン群島を攻略すると共にニューギニアの敵の根拠を覆滅して南太平洋方面に於ける優勢を確立し、且つ豪州方面海域を制圧す」となっていた作戦

目的が、「ソロモン群島及びニューギニア方面の要地を攻略確保して南太平洋方面に於ける優位の態勢を確立す」となったのは、国力上特に船舶問題から陸軍省側が、ポートモレスビー攻略に反対したためである。しかし、この旬日の間に第三八師団輸送船団の潰滅、米豪軍のブナ上陸等戦況が急変し、日米決戦を認識したせつかくの本格的協定も遅きに過ぎた感があった。

第八方面軍司令部は、十一月二十日飛行艇で横浜を出発し、トラックで聯合艦隊司令部を訪問、二十二日ラバウルに到着した。二十八日統帥を発動し、第一七軍に対しガ島作戦に専念して、一月中旬を目途として攻勢を準備するよう、また、第一八軍に対しブナ付近の要地を確保することを命じた。

## 苦戦を重ねる基地航空部隊

中央協定によるわが陸海軍航空の派遣兵力は、陸軍一三七機、海軍は陸上機一三五機と艦上機であるが、母艦航空兵力は南太平洋海戦の消耗により再建途上にあつた。

これに対し、十一月における敵兵力は、ガ島に約百機、東部ニューギニアに約百五十機のほか、後方に少なくとも五百〜六百機があると判断されており、ガ島奪回作戦実施予定の翌年一月には、さらに一倍半になるものと推測された。

十一月中旬までの基地航空部隊は、ほとんどガ島方面の作戦に専念しなければならなかった。したがって、第二六、第二二航空戦隊を主力とするこの方面の基地航空部隊は、戦闘機、艦爆の約半数をブインに、その他をラバウル、一部をカビエンに配し、ブカには基地員だけ、東部ニューギニア方面のズルミ、ブナ、ラエ等には基地保守員を配備したにすぎなかった。

十一月十五日船団輸送が失敗し、月明期の関係で駆逐艦輸送も月末まで実施困難なため、十二月からの輸送再開に備え、兵力整備、未熟搭乗員の錬成などを実施していた。ところが、十一月十六日に敵がブナ方面に上陸したため、基地航空部隊は主作戦方面を一時ブナ方面に転換するに至った。すなわ



ち、ガ島に対しては二十五日から三十日まで、月明を利用して少数の陸攻による夜間攻撃を実施しただけで、東部ニューギニア方面の陸戦協力、ブナ南方飛行場攻撃、ポートモレスビー夜間攻撃を実施したが、大兵力をもってする攻撃はなし得なかった。

十二月一日、一部航空隊の改変が行われ、また二航戦の内地掃投に伴い「飛鷹」の飛行機隊が引き揚げたので、南東方面における基地航空部隊の兵力部署は、次のとおりとなった。

飛行艇、八五一空、ショートランド、

ラバウルに在って哨戒。

第一空襲部隊(二一航戦司令官)二  
五三空ラバウル、七五一空カビエ  
ン、哨戒、上空直衛、敵航空兵力  
撃滅、敵艦隊撃滅。

第六空襲部隊(二六航戦司令官)

七〇一空、七〇五空ラバウル、二  
〇四空、二五二空、五八二空ラバ  
ウル、ブイン、任務第一空襲部隊  
に同じ。

十二月に入り、ブナ方面の戦局はますます急迫を告げた。基地航空部隊は、同方面の艦船、飛行場攻撃と陸戦協力、物糧投下を実施して、同方面の戦闘に協力した。しかし、ガ島に対しては増援部隊の上空警戒および日施哨戒程度で、航空攻撃を行う余裕はなかった。

### ガ島奪回困難となる

次のガ島奪回作戦では、航空戦強化のため既設の航空基地を拡充整備するほか、中部ソロモン諸島に基地を設定し、ガ島方面敵航空兵力を制圧して、一挙に有力兵団を増援する方針であった。海軍の一〇個設営隊、陸軍の四個飛行場設定隊と工兵二個連隊は、協同で基地設営に当たったが、機械土木の未熟により非能率的な人力による作業を主としたので、設営は遅れがちであった。

これに反し、ブルドーザーなど機械を使つての米軍側の航空基地整備は、著しく進捗し航空兵力の増強と相まって、彼我航空戦力の差は時とともに増大していった。B17の哨戒は、ビスマーク諸島およびソロモン諸島の全域にわたり、ラバウル、ショートランドからの艦艇輸送は、出港するとまもなく発見されるという状況になった。

十一月十六日敵のブナ南方上陸の報により、外南洋部隊指揮官は増援部隊駆逐艦の一部をR方面防備部隊に編入して、この方面の輸送を実施することにした。また、ソロモン方面に対しては月明期間はムンダ輸送に専念し、十一月三十日からガ島輸送を再開した。この日司令官田中少将指揮のもとにガ島に向つた第二水雷戦隊の駆逐艦八隻は、泊地進入中敵有力部隊を発見し、

不利な会敵であつたにもかかわらず、各艦は勇戦敢闘し、戦艦一、重巡一、駆逐艦二隻撃沈を報じ、わが方は「高波」を失つた。この海戦は「ルンガ沖夜戦」と呼称された。実際の戦果は重巡一隻撃沈、同三隻大破であつた。十二月三日の第二次輸送は駆逐艦一〇隻をもつて行い糧食をつめたドラム罐の投入に成功したが、陸上に収容できたのは二割にすぎず、聯合艦隊苦肉の策のドラム缶輸送も効を奏さなかつた。

### 「ケ」号作戦ーガ島撤収作戦

聯合艦隊司令部から十一月中旬頃、ガ島放棄、東部ニューギニア確保の戦略転換の意見が出された。中央もこれに同意して研究と現地部隊との連絡を重ね、十二月三十一日の御前会議でガ島部隊撤収が決定した。

昭和十八年一月四日、ガ島部隊撤収に関する大命(大海令第二三三号)が下り、陸海軍中央協定が示された(大海指第一八四号)。

撤収援護のため第三八師団補充員で臨時に編成された矢野大隊を一月十四日夜駆逐艦九隻をもつてエスペランサ岬に揚陸、収容準備を整えた後、二月一日夜第一次、四日夜第二次、七日夜第三次の三回に分けて全部隊を収容した。第三水雷戦隊司令官橋本信太郎少将指揮のもとに、一隻の巡洋艦と駆逐

艦延べ六〇隻が参加したが「巻雲」が機雷に触れて大破、僚艦によって処分したほか、駆逐艦三隻が空襲によって傷つた。収容人員は第一次四九三五名、第二次三九二二名、第三次一七九六名、合計一万六五二名のうち海軍八四八名であつた。

一月中旬以降陸攻によるガ島夜間攻撃を強化し、二十五日から昼間の航空撃滅戦を行ったが充分の効果は挙げられなかつた。ただ一月二十九日、三十日、サンクリストバル島南方に戦艦を含む有力部隊を発見、陸攻隊は猛攻を加えて戦艦三、巡洋艦二隻撃沈、戦艦一、巡洋艦一損傷の戦果を報じた。この戦闘は「レンネル島沖海戦」と呼称されたが、米側は巡洋艦一沈没、駆逐艦一損傷と発表している。また、二月一日ルンガ沖に巡洋艦二隻、駆逐艦三隻を発見、艦爆一二、零戦四〇がこの敵を攻撃、巡洋艦二隻撃沈、空戦により一九機撃墜の戦果を報じた。二月一日から七日までの基地航空部隊の作戦とガ島撤収作戦を含めて、「イサベル島沖海戦」と呼称した。

## 英語版・映画「ザ・ウィンズ・オブ・ゴッド〜カミカゼ〜」上映

飯田 正能

この8月26日から9月8日まで、池

袋西口のメトロポリタン・プラザ8階にある映画館「シネ・リール池袋」で、神風特攻隊を主題とした「THE WINDS OF GOD〜KAMIKAZE〜」という映画の限定ロードショーが開催され、その上映初日に観賞した。三百席ほどの小劇場で七、八分の入り。年輩者の姿もちらほら見受けられたが、大半は若者達で、女性も多く見受けられた。意外と若い層の関心が高いのであるうか、若者達はどういう想いで観賞したのであるうか、聞いて見たいところであった。

この映画の原作は、異色の俳優今井雅之（昭和36年兵庫県生まれ）が20年前、自ら原作・脚本・演出・主演を手掛けた自主公演の舞台演劇「リーインカーネーション」を原形とし、平成3年（1991年）からは「THE WINDS OF GOD〜雲のかなたへ〜」という舞台演劇に作り上げて、アメリカ・ロサンゼルス公演を敢行して以来、ニューヨーク、ハワイ、ロンドンなどの海外公演で高い評価を得、同時に国内各地での公演・ツアーを重ね、平成3年度には

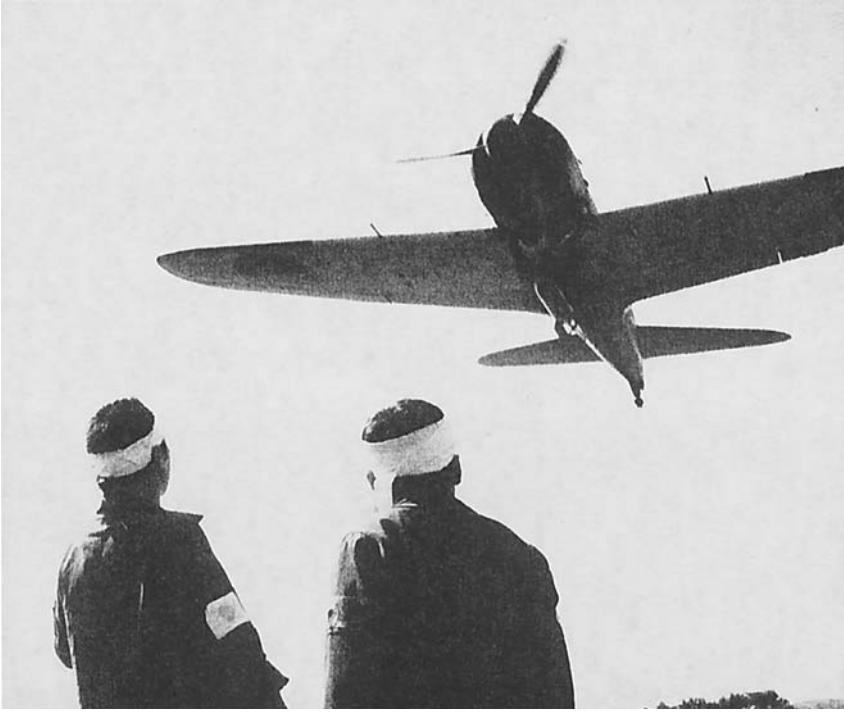
文化庁主催芸術祭賞（原作・脚本・演技）史上初の三賞を受賞、更に平成5年（1993年）には、ニューヨークでの国際連合作家協会主催芸術賞を受賞している。

今井監督をして、この映画の製作に突入する契機となったのは、5年前の2001年（平成13年）9月11日のアメリカ同時多発テロであった。そのテロの様子を米国メディアが伝える際、ビルに激突した旅客機を称するのに使われた言葉が何と「カミカゼ・アタック」であった。それを聞いた今井の胸は猛烈な悔しさと煮えくり返ったという。「あの戦時下で、掛け替えのない青春を葬り、護国のために命を捧げた特攻隊員の若者と、聖戦と称して平和の下に生きる無数の命を抹殺したテロリストが同じレベルで語られるのか、自分はこれまで10年間、一体何をやってきたのか、米国でもこの舞台を上演しているながら何も伝え切れていなかったのではないか」と。舞台のみでは限度がある。自分の想いを広く世界中に伝播させるためには、映画しかない。そこで、舞台上上演10年を機に一度は封印するはずであった本作品を「英語脚本による映画化」という形で蘇らせることを決意し、準備に4年もの歳月を掛けて遂に封切りを迎えることとなった。また一

方、舞台にも情熱を注ぎ、終戦60周年に当たる昨年は、国内34か所・全51公演の全国ツアーをこなし、今年も国内28か所・全43公演の全国ツアーに挑むという。特攻隊員達が本当に抱いていた気持ち、決して声にすることが許されなかった若者達の悲痛な叫びを伝えていくために、そして、二度と繰り返してはならない戦争の無惨さを伝えるために、上演・上映を続けていきたいという。その情熱には感嘆のほかない。

この映画の特色は、海外での公開上映を前提に製作され、出演者のほとんどが日本人でありながら、その日本人キャストが、全編英語脚本により、全英語で演じるという前代未聞の挑戦であること、NYロケでは、世界で初めての映画撮影となる「グランドゼロ」でのロケを敢行したこと、また、LAロケでは、世界で唯一現存する「零戦」を実際に飛ばしたこと、などであるが、それにも増して特色と言えるのは、今井監督自身が陸上自衛隊を経て、法政大学文学部英文学科を卒業後俳優になったという経歴の持ち主であると共に、この映画の製作に当たっては、死と真っ向から立ち向かう若き特攻隊員の想いを正しく伝えるためには、まず彼らが置かれていた状況下に役者を置き、感情移入ができるように

するというところで、キャスト一同を数日間、陸上自衛隊に体験入隊させ、徹底的な肉体の鍛錬、敬礼を始めとした軍人の立ち居振舞い、軍歌などの習得といった基礎訓練を経て本格的なロケに突入したということにある。「いやあ、人生観が変わりましたね、その訓練は、日頃の甘えは一切許されないと聞いた感じで、一人のミスは全体の責任だし、私にとっては肉体の限界を超えた訓練が課せられました。数十キロの荷物を背負った行軍も体験しましたが、当時の特攻隊員は、死と隣り合わせでこうした訓練をしたはずですし、現実に自衛隊の皆さんは、今なお日々国を守るんだという強い意志を持った人達であり、その強靭な精神と肉体を目の当たりにしました」と、福元貴士少尉（キンタ）役の松本匠が、また、「私はボストン生まれで、在米期間と日本の暮らしがちょうど半分ずつ、訓練、リハーサル、ロケを通じて大和魂の何たるかが叩き込まれたような感じます。俺は日本人なんだという自覚がしっかり根付きました」と学徒出身の山本勉少尉役のタケウチコウがそれぞれ語っている。1年数か月及ぶ撮影合宿を通じて「スタッフ同士、役者同士、戦友にも似た人間関係を築き上げることができたのも、ハードなロケの



零式艦上戦闘機飛翔のシーン

中であって、皆の心の内に戦争の悲惨さを真っ直ぐに伝えようと思う共通意識が芽生えていたからではないでしょうか」と、今井監督は語っている。

ごく簡単に、この映画の粗筋を書く

と、21世紀の現在、ニューヨークの街角、いつかはコメディアン憧れの「エ

二人は、時空の渦に巻き込まれ、過去と未来の狭間で運命に翻弄され、己の無力さに歯がゆさを感じる。やがて、次々に特攻攻撃に出撃する同僚の姿を見て、キントタこと福元少尉は、自分も平和の礎となるために、恋人との愛を守るために、潔く命を捧げることを決意し、特攻出撃を志願する。8月15日の早朝、止めるマイクこと岸田中尉を振り切って、零戦に搭乗し、出撃する。それを追って岸田中尉も零戦を駆って雲のかたへへと飛び立っていく。

二人は、時空の渦に巻き込まれ、過去と未来の狭間で運命に翻弄され、己の無力さに歯がゆさを感じる。やがて、次々に特攻攻撃に出撃する同僚の姿を見て、キントタこと福元少尉は、自分も平和の礎となるために、恋人との愛を守るために、潔く命を捧げることを決意し、特攻出撃を志願する。8月15日の早朝、止めるマイクこと岸田中尉を振り切って、零戦に搭乗し、出撃する。それを追って岸田中尉も零戦を駆って雲のかたへへと飛び立っていく。

この物語の筋は、肉体は消滅しても霊魂は永遠に、時空を超えて彷徨い、あるいは甦るのだという思想を基に構成されたものであろうか、今年3月、靖國神社で上演された奉納演劇「流れる雲よ〜未来より愛を込めて〜」（会報『特攻』67号14頁掲載）に共通するものがあるようであるが、映画であるだけに迫力がある。しかも、特攻隊の若者達の真実の想いに迫ったものだけに悲壮・悲痛の感が強い。平和の意味、平和を守ることの大切さを考えさせられる好作品である。更に、海外での公開上映を前提に製作された全編英語版であり、これによって若き神風特攻隊員達の真実の姿、想いが少しでも多くの外国人に理解されるようになれば幸いである。

バイクに乗って出発したが、途中交通事故に遭って意識不明の重傷を負う。そして、意識を取り戻した場所が何と昭和20年（1945年）8月1日、太平洋戦争末期の日本海軍航空隊特攻基地、しかも、彼らは神風特攻隊員となっていた。勿論、アメリカ人ではなく、日本人として…。マイクは岸田守海軍中尉、キントタは福元貴士海軍少尉、いずれもフィリピン戦線で大活躍をした名パイロットであるが、飛行機事故で意識不明の重傷を負い、やがて、意識は取り戻したが、記憶喪失となった。彼らは、現実の姿に戸惑い、そして、突然突き付けられた現実を否定し、日本はアメリカに負けた、原爆で広島、長崎は壊滅した、それなのになぜ特攻隊員として命を落とさなければならぬのだとわめき、上官の命令を聞かず、暴言を吐く。上官は、それでも彼らの腕を惜しみ、正常な意識の回復を待たため、特攻隊員から外すのをためらっていた。戦局はいよいよ厳しく、特攻出撃は続く。戦争という大義の前に、任務遂行のため命を差し出すことを余儀なくされた若者達、その中で突然突き付けられた死という現実、ある者は任務を忠実に果たそうとし、ある者は神に祈り、ある者は心の奥に疑問を抱きつつ、それでも戦いの空に飛び立っていく。

## 私の接した将軍達①

## 栗林忠道大将

田中 賢一

## 中少尉集合教育

栗林少将が騎兵第1旅団長として蒙疆の包頭に着任されたのは15年12月だった。私はその頃旅団隷下の騎兵第14聯隊自動車中隊にいて、電灯もない安北に駐屯していた。

旅団長が着任して間もない頃だったと思う。旅団で中少尉の集合教育があるというので、我々は喜び勇んで包頭



聯隊主力の駐留していた安北



包頭の町並み

に行った。包頭は大都会である。

実員演習は一つだけで、あとはソ軍の編成装備などの学科だったと記憶している。実員演習の後だったか前だったか、旅団長は我々を集めて問題を出した。

現地を指さしながら、ここからあそ

こまで敵火の下で前進するとき、匍匐で行くのと早馳けで躍進するとき、どちらが損害が少ないか、と言う問題だった。旅団長は、陸軍省課員や米国の駐在武官などされて、部隊長としては騎兵第7聯隊長と騎兵第2旅団長をやられたものどちらも内地である。我々はその前に包頭戦や五原作戦を戦っている。敵火の下は度々潜っているのだ、という自負心があるので、勝手に放題のことを答えた

それに対して栗林旅団長は、目標となる立姿と伏姿に対する敵弾（小銃）の命中公算はいくらか、と質問したが誰も答えられない。ついであそこまで何回躍進し、立姿で敵目に暴露している時間は全部で何秒になるか、との問いに対しても、誰も考えてもいなかったことだった。そこで旅団長が言うのには、そのような計算をして出た答が絶対正しいとは思わないが、何事も感じだけで事を処理するのではなく、科学的合理的に考えねばならぬと諭された。そのあと次のような話をされた。

騎兵で数学に凝った人がいて、馬場馬術で巻乗の時重心をどのくらい内側にかけたらよいか、計算して答を出したが、その人は馬術は下手糞だったと、笑って話された。

## 展示演習

このとき行われた展示演習の事は、主題と離れるが忘れ難いので述べる。

旅団戦車隊長の面高俊秀大尉が対戦車肉薄攻撃という命題をもらい、展示演習を行った。面高大尉は44期で私と同じ騎16出身、後に挺進戦車隊（滑空機搭載の戦車隊）の隊長となり、その職を私に送り、挺進集団の参謀部付となり空母雲龍に乗って南方へ向かう途中、敵潜に撃沈されて戦死した、天衣無縫で名代の腕白者だった。

突進してくる仮設敵の戦車に対し、発射発煙筒で目潰しをしてその煙に隠れて、壕から飛び出して行って対戦車地雷で攻撃するという構成だった。何回も予行をしたらしく、隠れている壕も躍進して飛込む壕も事前に掘ってあった。

いよいよ本番、予行の時と風が全く逆だったらしく、発煙筒を射ち込んだのはいいが、弾着地点が戦車より風下のため、煙は戦車にからない。煙に隠れて戦車に迫る苦の肉攻班はマゴマ

ゴしていたが、己むなく暴露突進して行き、この演習は失敗であること歴然としていた。我々は面高（メンコウさんとよんだ）さん何と締めくくるかと、興味津々だった。

ところがメンコウさんふんぞり反えているのには「日本一の戦車隊長が計画し日本一の戦車隊員がやっても、対戦車戦闘はこのように難しいものである。それが解れば本日の演習は目的を達成した」と言っていたのけた。

栗林旅団長はワッハッハと笑いお開きとなった。

## 旅団直轄の中隊となって

16年4月私は騎兵第14聯隊第1中隊長に任じられ、中難の警備隊長を命ぜられた。聯隊の駐屯している安北は烏拉山脈の北側で、中難は南側にあつて、直路行くことはできない。一旦包頭に出不いと行けない。そのような所なので私の中隊は旅団長直轄となった。

私は月に一度は旅団司令部に状況報告に出向いた。細かいことは高級副官に報告したが、旅団長が飯を食ってゆけと言われるので、いつも陪食してお話した。包頭までは40キロほどあり治安はよいが途中車輛が故障すると困るので、2輛で来ると申し上げた。その頃燃料節約のため管理車輛を減らすよ



中難警備隊地域内の行動  
手前にあるのは罌粟畑でこれから阿片を採る

うにという指導があり、そのことが話題になった。旅団長が鳩をやるから使ってみろといわれ、間もなく旅団通信班から指導者が付いて鳩が配属された。暫く慣らした後、警備区域内の見回りなどいつも鳩を携行し、包頭行きも一輛にし、鳩を携行するようにした。ところが困ったことがもち上がった。毎日時間をきめて鳩を運動させていると、烏拉山から鷺が現れ鳩を襲うのである。小銃を射っても命中しない。旅団司令部に出向いた折りにそのことを旅団長に申し上げたら「怪しからん鷺だ、獵銃を買ってやるから鷺を退治しろ」との抑せで、間もなく獵銃が届いた。包頭にはなくて大同だか張家口から取り寄せたということだった

今振り返ってみると、実行力旺盛な指揮官だったと敬服に堪えない。私はもらった獵銃を兵器係の飯島重曹に持たせ鷺退治を担当させた。鷺を射ち落したとは聞かなかつたが、威嚇したらしく現れなくなった。

もう一つは栗林將軍の手柄を偲ぶことを付け加えると、第三中隊の須賀上等兵は、本職は浪曲師で芸名を林家小白猿と言った。3年兵のとき旅団司令部勤務となったが、旅団長の所望で度々口演したという。そのうち満期除隊の為近衛騎兵聯隊に転属となるので、包頭駅を發つ折りに、旅団長が態々駅まで見送りに来てくれたという。戦後聯隊会の会合で、あれほど感激したこと無いと私に語った。

### 私の転出と広東でお会いした事

これから先は私自身のことの主になるので、面はゆいが、私は馬がいなくなった騎兵が嫌になって、折りから落下傘部隊の募集があったので、聯隊長に無理にお願いして出してもらった。旅団長に申告に伺うと、何故出るのか

と言われるので、馬に乗りたくて騎兵になったのにトラックに乗せられ、名前だけが騎兵では面白くないと、ありのままの理由を申し上げた。そうかと言われればらく雑談の後、近く戦車師

団に改編になるのに若い者は辛抱できないのかナアと、呟くように言われるので、何んだか申し訳ないような気がして、深く頭を下げて引き下がった。

私は16年の9月末包頭を後にし、陸軍挺進練習部の練習員となり、大東亜戦争開戦と同時に課程修了し、第一挺進団司令部部員に補職された。司令部の高級部員以下は年末に南方へ先発したが、私と副官は挺進団長久米精一大佐のお供をして、挺進飛行戦隊と同行して行ったので、那覇、台中と立ち寄り、ついで広東に着き、整備のため二三日滞在することになった。

その頃栗林少将は第23軍の参謀長をしておられた。久米団長は陸軍省にいたころ栗林さんと昵懇だったので、軍司令部に挨拶に行くが、騎兵だからお前知っとるかと言われるので、知ってるどころか、落下傘部隊へ来るまであの人の直属の部下だったと答え、お供する事になった。司令部へ伺うと大層御機嫌で今夜偕行社で御馳走するということになった。

その晩栗林さんは一層御満悦で、海軍は真珠湾とマレー沖海戦で二つも勅語をいただいた、陸軍は今度香港を陥して初めて勅語を賜ったのだと、何回も言われた。あとで考えてみると、勅

語ではなくて御嘉賞の御言葉なのだが栗林さんは確かに勅語と言われた。

私に向かつて、いいときに騎兵から抜け出したな、これからは航空でなければだめだと言われるので、包頭を去るときのことを思い出し、安堵する思いだった。そして落下傘部隊は南方で何をするのか、と尋ねられた。

実は内地を出る直前に、大本営からパレンバン精油所の航空写真をもらって、私が携行していた。そればかりでなく、鶴見の日本石油の精油所に研修員を出せという指示があり、徳永悦太郎中尉(53期)以下30名ばかりを編成途上の第2聯隊から派遣してあった。今度の戦争は石油資源がないから始まったので、我々が出てゆくのも国策に直結するものであることを、とくと理解していた。しかし久米団長が発言しないので私も黙っていると、栗林さんは言われた。

「今や戦局を支配するのは航空だ。航空戦力發揮の基盤となるのは飛行場だから、敵の飛行場奪取に落下傘部隊を使うことになるう」そのようなことを言われた。

その晩は十分に酒をいただいて辞去した。我々はその年の6月には内地に帰ったが、帰路は広東に着陸しなかつたので、これが栗林將軍にお目にかかる最後となった。

### 小笠原兵団長栗林中將

栗林將軍が硫黄島に渡ったのは19年6月8日だが、それから一步も島を出ることなく、作戦準備に尽瘁した。指揮した兵力は固有の一〇九師団のほか配属された多くの陸海軍部隊を含め、約一万七千名に及んだ。従来島嶼守備は、水際撃滅主義だったが、栗林將軍は合理的考えで、主陣地を内陸に設け縦深に配置し、緻密な火力と短切な逆襲によって、敵の攻撃を破砕する戦法を考案した。

毎日島内をくまなく回り、陣地構築を指導し戦鬪法の徹底を期した。島は地熱高く築城は困難を極めたが、将兵には兵団長の熱意が透徹し、全島が要塞化して敵を迎えることになった。

20年2月19日、僅か4キロ足らずの正面に島が吹き飛ぶほどの激しい砲撃のもと、海兵15個大隊が482台の水陸両用戦車に載って上陸してきた。敵が指向した兵力は海兵3個師団、それにも増して戦艦を先頭に敵の艦砲の射撃は物凄く、米軍はこんな小さな島は一週間で陥落出来ると予期していた。それが徹底した築城、合理的な陣地編成、栗林兵団長の透徹した統率のもと、一月を経るもなお抗戦を続けた。しかし孤立無援ついに最後の時は来た。3月25日兵団長以下最後の総反撃

に転じ、栗林將軍は翌未明重傷を負い拳銃をもって自決された。

大本営宛決別電の終りに「左記駄作御笑覧に供す、何卒玉斧を乞う」とて次の三首があった。

国のため重きつとめを果たし得て  
矢弾尽き果て散るぞ悲しき  
仇討たで野辺には朽ちじ我は又  
七度生れて矛を執らむぞ  
醜草の島にはびこるその時の  
皇国の行手一途に思う

#### 栗林將軍経歴の概要

- 2年9月 軍事研究のため米国駐在
- 5年8月 陸軍省軍務局課員
- 6年8月 カナダ大使館付武官
- 8年8月 騎兵中佐
- 8年12月 陸軍省軍務局課員
- 11年8月 騎兵第七聯隊長
- 12年8月 騎兵大佐 陸軍省兵務局馬政課長
- 13年4月 満州国 中華民國に出張
- 15年3月 少将 騎兵第二旅団長
- 15年12月 騎兵第一旅団長
- 16年9月 第二十三軍参謀長
- 18年6月 中将 留守近衛師団長
- 19年5月 第百九師団長
- 20年3月17日 陸軍大將
- 20年3月26日 戦死



敵の上陸用舟艇



陣地構築の指導中



硫黄島にある慰霊碑

## 憲法問題

### 改正にあらざ破棄せよ

齊藤 資郎

この頃憲法改正のことが新聞紙面を賑わせている。しかし現憲法の制定に思いを致せば、改正など言うべきではない。破棄すべきである。そもそもこの憲法は日本軍を恐れたマッカーサーが、日本人を骨抜きにしようと考えて作り、押し付けたものである。彼らは恐れた。特攻隊を、また絶対に降伏を肯んじないで玉碎した軍隊を。

改正論者は第九条を取り上げ、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。とあるを云々するが、それは形に表れたもので、マッカーサーが日本を骨抜きにしようとした狙いが端的に表れているのは、前文にある。即ち「日本国民は恒久平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われわれの安全と生存を保持しよう」と決意した」と書いてある。御立派な諸々のお国よ、お助け下さいと念仏を称えておれ、再び手向かいなどするでないぞ、と言っている。

その諸々の国はどうかと言えは「われわれは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永久に除去しよう」と務めている国際社会において：」云々とのべている。このような立派な国際社会なのだから安心せよ、と。マッカーサーよ、あの当時国際社会はそんなに立派であると本当に思っていたのか。

更に言っている「われわれは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって」と称えているが、これは他国も規制する憲法なのか。マッカーサーが世界に向かって言いたいことを表現したのか、それとも何れの国もそのような気持でいるのだから、再び八紘一宇というような大それた考えを起こすではないぞと言っているのかも知れない。

さて私はこの憲法はマッカーサーが与えたものとの前提に立って、批判してきたが、そのことは憲法制定の経緯をみれば歴然としている。占領下我が国に於いても、帝国憲法の改正について準備を進めていたがそれらは総てGHQによって封じられた。

二十一年二月三日、マッカーサーはホイットニー民生局長に三原則を示して、日本国憲法草案の起草を命じた。それを受けてホイットニーは、翌日民生局長二十一名と秘書・通

訳を加え二十五人を集め指示した。その要点は、日本側によって準備された憲法案は不満なので、最高司令官は自分で手をつけねばならぬと決心した。そして草案作成を民生局に委託された。

私は二月十二日までに民生局の案を完成し、最高司令官の承認を受けようと思う。私は日本側に説得してこの憲法案を受け入れさせよう并希望するが、説得が聞き入れられないときは、力を使用する権限が最高司令官から与えられている。

これは紛れもない史実である。二十一名の小幕僚が一週間かけて作った憲法を、マッカーサーが権力をもって押し付けたのである。これは法というには値しない。日本無力化の作戦命令である。その作戦命令を押し戴いて、憲法違反とほざく裁判官の無知。正気の沙汰とも思えないが、今日まで放置しておいた政治の責任も重大である。

この憲法のもたらした罪科は数限りなくある。靖國神社に首相が公式参拝すると、それに反対する者が、得たりと憲法を持ち出すが如きはその最たるものである。しかしマッカーサーも一つだけいいことをした。我が国を共和制にしようと思えば、彼の権力をもってできた筈だったが、それはしなかった。

### 明野合祀慰霊祭

栗原 宏

10月6日第47回明野合祀追悼式(慰霊祭)が陸上自衛隊明野駐屯地で行われた。当日は秋雨前線が台風16号の影響を受けて、前夜から雨が降り続き、式典は駐屯地体育館で実施された。明野頭彰会関係者一八九名を含め約三百名が参列、明野駐屯地司令が執行者となり、司会、進行等全て陸上自衛隊が担当した。司会者によると、忠魂塔合祀者は一六四七柱で、そのうち一五柱は陸上自衛隊明野飛行学校関係者であるとの説明があった。祭壇の両側に各一名の儀杖隊員を配置し、13名の儀杖隊の「捧げ銃」により参列者全員黙祷で始まり、厳かに斉整と執り行われた。式典終了後、陸上自衛隊中部方面音楽隊による加藤隼戦闘隊等往時の軍歌が演奏された。

### 高野山「空」の墓

#### 墓前祭

田中 賢一

この墓は陸軍空挺部隊全戦没者の名簿を納めた墓であるが、後に空挺同志会(昔の空挺隊員と自衛隊空挺隊員及びその退職者をもって構成した団体)の会員が死没して遺族の申し出あれば分骨を納めている。

嘗て陸軍挺進部隊の基地だった宮崎県児湯郡川南町にある護国神社の御祭神は、陸軍空挺部隊の全戦死者である。昭和三十一年に比島戦場生き残りの中村秀雄軍医が中心となって高野山に墓を建て、川南護国神社から御霊(名簿)を移して建立した。

初めは中村秀雄を中心とし、大阪に本部をおく挺進戦友会が管理し、毎年墓前祭を行っていたが、三十八年に中村軍医が死去した後、習志野に本部をおく空挺同志会が管理し、毎年九月に墓前祭を行っている。

今年(一九九一年)は九月十七日に行われた。空挺同志会の役員も今では全部自衛隊空挺除隊者になっていて、本日参加者は約二百人で大半は戦後の者になった。なお現職空挺隊員は三十人ばかり参加した。

空挺同志会長の祭文奏上に続いて旧挺と元挺が一文を奏上するのが例となっている(旧挺とは陸軍空挺隊員、元挺とは自衛隊空挺の除隊者を言う)私は娘の扶助で参加したが、これが最後かと思ひ旧挺代表として次の一文を奏上した。

「空」の墓に鎮まる先輩同僚に 老耄の落下傘兵 謹みて思いを述ぶ 光陰矢の如く 諸霊と志を同じくし 六十数星霜を経ぬ 挺進殉国を相言葉とし 国軍の先頭にありて 精銳類なき我ら 緒戦パレンパンの榮光に 意気愈々揚がりぬ 聖戦三年を迎え 全般の戦局衰退甚だしきも 乃公出ですんばの意気高く 比島決戦場に向かいぬ しかれども 大廈の倒れんとするや 一 肱の支うる能わず レイテに血戦し ルソン・ネグロスに死闘し 屍を異境に曝しぬ 義烈特攻の烈士に至りては 戦勢打開のため 欣然として帰らぬ 出撃に就けり

中略

ここに参じたる自衛隊空挺隊員は 諸霊の志を継がんと 罷り出たり 現 在 国を思う正しき教育の行われあるは 自衛隊を措きて 他になし 国民精神の刷新は自衛隊より生起すべし 諸霊よ 懺せ賜え

一、残暑の候に 君病むと風の便りに 伝わりぬ 空の神兵と 謳われし 男ならずや老いたれど 八十路の坂に何あらむ 二、雁渡る候も 近ければ奮いて起こせ 丈夫よ 国に殉ぜし 友がきの いさを伝える語り部の 務めはなをも残りあり 三、海山千里 へだつとも 同におもいの 老兵の 通う心の ひとしづく などか忘れん若き日の 君が闘志を 唯いのる

パレンパン作戦に参加した 一兵士に呈する雑詠 田中 賢一







お知らせ

理事長

一、「特別攻撃隊全史（特別攻撃隊五訂・追補版）」の刊行

協会は、平成15年に前身の特攻隊慰霊顕彰会が、平成2年に初版を刊行した「特別攻撃隊」の四版を刊行いたしました。

戦没者氏名欄には未だ空欄が多く、且つ、本文中にも何か所か訂正すべき所があり、後世にはより改善された文献として遺すべきであると判断して、五訂版作業を進めて参りました。

一方四訂版に至る迄、「特別攻撃隊」は、「大和」以下第二艦隊（第一遊撃部隊）沖繩出撃に関しては、全く触れずに推移して参りましたが、近年になって旧海軍関係の会員の中から、第二艦隊の出撃命令には特攻と明記されていて、戦死者はその認識の下に死んで行ったのであるから、協会としては「特別攻撃隊」に取り上げるべきではないか、との声が挙がる様になりました。

時に、「男たちの大和」が予想外の観客を集め、且つ「大和特攻」という言葉は、既に広く人口に膾炙していたことはご承知の通りであります。

昭和二十年七月三十日に、小澤治三郎聯合艦隊司令長官の、「第一遊撃部隊の大部」に対する全軍布告が発せら

れながら、続く二階級特進措置は取らずに終わったので、昭和二十七年の特攻平和観音の開眼以来、像の体内に霊名簿が納められ、更に平成二年の「特別攻撃隊」の刊行に至る迄の間に、当時の旧海軍関係者からは、一切問題提起されることなく推移して来ました。

会員からの提言を受けて、調査と討議を重ねた結果、大東亜戦争末期に我が国が死力を尽くして戦った特攻作戦の全貌を、より正確に後世に伝える為には、「大和」以下第二艦隊の沖繩出撃時の戦死者を、「特別攻撃隊」でも取り上げるべきであるとの結論に達しました。

然しなから、後世、史実認識の混乱を避ける為、特攻戦死者としてではなく、特攻戦死者に准ずる「准特攻戦死者」として取り扱うことに致しました。

この様な観点に立つと、回天を搭載して出撃し、回天と共に未帰還となった母潜水艦の乗組員、任地へ展開中、乗船の海没で、或は乗艇を喪失して地上戦で戦死した陸海の水上特攻隊員、輸送機を操縦した隊員は特攻認定され、乗り組んで強行着陸していながら、特攻認定されなかった、薫空挺隊・高千穂降下部隊、航空特攻隊員に指名されて、任務達成前に敵機に喰われたり、

殉職したりした隊員等、准特攻戦死者の範疇に入ると考えられる特攻隊員が、可成り存在するということを含めて後世に伝えることが、より目的に添うことになる、関係者の意見が一致しました。

斯くて五訂版に更に准特攻戦死者名簿を追補して、冒頭に述べた『特別攻撃隊全史』として刊行することが、戦争体験世代会員として残された責務と考えた次第であります。

現在五訂部分は脱稿し、追補部分の名簿整備の作業に入っております。遅くも来年前半中に全史の脱稿を終わらしめるべく鋭意努力中である現況を御報告申し上げます。

一、徳之島犬田布岬の第二艦隊

戦没者慰霊塔の再建について

昭和43年4月7日、高松宮・同妃両殿下台臨のもと除幕された第二艦隊の沖繩海上特攻戦没者慰霊塔（協会発行「特別攻撃隊・四版」三八九頁参照）は、老朽化が進んで近年は立入禁止になっていました。

この度、慰霊塔を再建することになり、全島を挙げて再建事業委員会が結成され、会長には塔の所在地伊仙町の大久保 明町長が就任して、募金と碑文募集の活動を開始致しました。

時、恰も前項で御説明申し上げました様に、協会は第二艦隊沖繩海上特攻の戦死者を、准特攻戦死者として後世に伝えることに決めて、本年4月7日の枕崎で行われた徳之島との合同慰霊祭で、会長の追悼の辞の中でこのことを発表致しました。

この様な関係で徳之島から要請を受けることになり、協会は、(財)水交会と共に募金活動に協力することに致しました。宜しく御協力を賜ります様をお願い申し上げます。募金される方は、同封の払込取扱票で御送金下さい。

碑文公募の対象者は、現職・OB自衛官、旧軍関係者及びその遺族、第二艦隊戦没者遺族に限られています。詳しいことは、左記、公募碑文の送付先にお尋ね下さい。碑文は二百字程度を上限として、戦没者に対する慰霊追悼、感謝、未来（次世代）へ繋がる言葉等、自由にお考え下さい、とのことであり

応募碑文送付先

〒891-7001 鹿児島県徳之島町亀津

NPO法人ボランティアネットワーク

徳之島

TEL ○九九七―八三―二九〇八

FAX ○九九七―八三―四五六〇

処で、昨年迄は徳之島と枕崎はそれぞれ別個に4月7日に慰霊祭を開催していましたが、今年は本土関係者が船を借上げて、両方の慰霊祭に参加することになり、その為に徳之島の慰霊祭は、本年に限って4月5日開催になりました。然しながら当日は強風の為に船が接岸出来ず、急遽7日に枕崎で、徳之島代表も加わった合同慰霊祭が執り行われました。之を機にこれからは、徳之島、枕崎がそれぞれ隔年4月7日に慰霊祭を開催することになりました。以上、お願いと御報告申し上げます。

会の会長に就任され、また当協会の発足時に評議員に就任されて、特攻隊戦没者の慰霊顕彰に献身されて来られました。

会誌「特攻」に屢々投稿されていたことは、会員各位の御記憶に新たなことでありましょう。関連記事55頁。

茲に、謹んで木村、小灘両評議員の御冥福を心からお祈り申し上げます。

井上泰生殿  
我が会に二人の全員の会員がいることは、前号の59頁に載せておいたが、その一人井上君が9月21日逝去された。この日は彼岸の初日、彼岸とはこちらの岸から彼岸の岸、即ち涅槃に行くこと。君悟りの境地にあったのか。(田中)

**訃報**

**木村元正氏**

当協会評議員、前事務局長の木村元正氏は、平成十八年六月二十四日に逝去されました。

氏は財団発足時から事務局長として、会の態勢固めと発展に大きく寄与されました。

**小灘利春氏**

当協会評議員小灘利春氏は、平成十八年九月二十三日に逝去されました。

終戦時、八丈島に布陣していた第二回天隊長であった小灘評議員は、昭和四十年代初めに結成された。全国回天

**新入会員**

(平成18年7月1日～9月30日)

- 北海道 川本修二 ○福島 手代木和之 ○茨城 久保木功 ○群馬 小林雅男 芳川かおり ○埼玉 澁沢衡一 ○千葉 福原榮夫 吉川 勇 射手園纒子 北浦淑子 ○東京 小林彦重 佐藤行孝 天野 環 大木一憲 小林秀司 田中武夫 ○神奈川 中川透 西村洋文 田中睦夫 桑原美智子 田村 力 吉田正則 ○石川 古暮武和 ○長野 浅川金夫 ○愛知 時田 實 辻 久雄 稲嶋ひろな ○三重 森ノ内敏巳 藤井幸蔵 ○京都 多谷洋平 ○大阪 比嘉宏行 吉岡照美 大野孝行 大野耕四郎 ○和歌山 望月井泉 ○岡山 佐藤 登 ○山口 田中 浩 ○福岡 木村俊夫 ○鹿児島 福島一治 ○(NPO法人) ボランティアネットワーク徳之島 ○沖繩 前田和秀

**寄付者御芳名**

(平成18年7月～9月・単位千円)

- 一〇〇〇 (有)アマティ 五 岡山ヨシ子
- 五〇 大久保 隆 五 上尾 侑子
- 二〇 大穂 利武 五 上村田佳子
- 一〇 飯岡 哲子 五 川井美保子
- 一〇 小林 静 五 高山 友二
- 一〇 宮永 笑子 五 田島 幸男
- 五 岡田 豊 五 畑谷 輝彦
- 五 福田 保光
- 五 町田 乾郎
- 五 松本 悦郎
- 五 三宅 浅男
- 五 村田 房保
- 五 山本 卓眞
- 五 山本 年男
- 四 大木 五一
- 四 千葉 孝
- 四 深山 明敏
- 三 荒木 精一
- 三 畷田謹次郎
- 三 大久保武司
- 三 大西 富雄
- 三 上川 智也
- 三 菊地 洋
- 三 久保田久弥
- 三 佐々木ひろ子
- 三 洪田 一信
- 三 高田 源二
- 三 高梨 久義
- 三 多田 龍二
- 三 津覇 実雄
- 三 長島とし子
- 三 西村 芳行
- 三 宮脇 宗明
- 二・五 大井 路雄
- 二 青木 信雄
- 二 新 忠信
- 二 石井 敏子
- 二 藤原 直之
- 二 伊藤 利一
- 二 伊富貴 清
- 二 岩本 末治
- 二 木村 一吉
- 二 佐伯 忠嗣
- 二 志波 昭弘
- 二 高梨 武光
- 二 高橋 房之
- 二 谷尾 侃
- 二 中村 栄造
- 二 中村 光雲
- 二 中村 竹雄
- 二 花見 重一
- 二 羽田 俊一
- 二 深井 正昭
- 二 水町 博勝
- 二 宮崎喜一郎
- 二 宮本 了吾
- 二 山本 裕士
- 二 湯澤 栄
- 二 渡辺浩志郎
- 二 小林 興孝
- 二 小林 敏久
- 二 千田洋之助
- 一 武田 輝和
- 一 塚原 充康
- 一 根木 要
- 一 藤井 忍
- 一 三浦 晨平
- 一 山根 敏史
- 一 和田 實

**寒山詩の一節**

死生 元と命あり  
富貴 本と天に由る  
此れは是れ古人の語  
吾れ今 謬り伝うるに非ず  
聡明なるは好く短命  
癡駭なるは却って長年  
鈍物は財宝豊かにして  
惺惺の漢は銭なし

会員訃報

謹んで哀悼の意をささげます。

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

○東京 江尻 次雄 (17・6)

古典詩に見る人の死を悼む名句

人生 能く幾何ぞ

畢竟 無形に帰す

王維の「殷遥を哭す」

人生は寒松に非ず

年貌 豈に長えに在らんや

李白の「古風十九首」其の十一

今日の人日空しく相憶う

明年の人日何れの処なるか知らん

高適の「人日杜二拾遺に寄す」

人日とは正月七日

此の生 都べて是れ夢

前事は旋ち空と成る

白居易の「商山の道にて感あり」

松樹千年 終に是れ朽つ

槿花一日 自ら栄を為す

白居易の「放言五首」其の五

人生 行客に似たり

両足 歩を停むること無し

白居易の「春を送る」

往時渺茫として都べて夢に似て

旧遊零落して半ば泉に帰す

白居易の「微之に峽中に遇ふ」

和漢朗詠集より

無常

朝に紅顔あて世路に誇れども

暮に白骨となりて郊原に朽ちぬ

義孝少将

世の中を何に譬へむあさぼらけ

漕ぎゆく舟の跡のしらなみ

沙弥満誓

手にむすぶ水に宿れる月影の

あるかなきかの世にこそありける

貫之

すゑの露もとの雫や世の中の

おくれ先立つためしなるらむ

良僧正

泣く涙雨と降らなむ渡り河

河水まさりなばかへり来るがに

小野たかむらの朝臣

古今和歌集より

哀傷歌

明日知らぬわが身と思へど暮れぬまの

今日は人こそ悲しかりけれ

つらゆき

すみぞめの君がたもとは雲なれや

たえず涙の雨とのみ降る

ただみね

深草の野辺の桜し心あらば

今年ばかりはすみぞめに咲け

古今和歌集 かむつけのみねを